

「同人誌から芥川賞受賞作が出なくなり、同人誌評が掲載される場も減って、優れた作品が取り上げられる機会が失われている。現在、商業誌が掲載している作品が劣化している。かつて日本文学に良い作品が多数出て来たのは、同人雑誌という土壌があり、その中から力のある作品が出て、プロもそ



ういう活力を吸収して、健全な文学エネルギーの循環が行われていたが、出版不況とともにそれが失われていった。商業誌の作品の貧困化に歯止めをかけるには、同人雑誌の活力を生かすことが重要だ。同人雑誌を通して文学行為を深めていき、その力を生かす方向に持っていかなければ、日本の文学は衰退する一方だろう。今度の芥川賞作品を読んだが、ひどいもので、同人雑誌の優秀作品の方がずっと読み応えがある。こうした優秀な同人作品を推挙して多くの人に読んでもらい、称揚することは、日本の文学そのものに対してひとつの力を与えていくことになる。互いの文学観をぶつけ合う激しい議論になることを期待している」と、まほろば賞の意義をあらためて明確にしました。

●第一次討議

さっそく最初の作品、草原克芳「下北沢路地裏ツアー」についての討議となりま

事前投票

下北沢路地裏ツアー	鏡が湖	黒い赤ちゃん	見返り仏	黒い水	マーサの足音
3	0	31	4	7	15



都築隆広特別選考委員

「閑話茶館」の中庭はとても印象的でもなかった」と評価するとともに、ルポルタージュ的な印象をまず述べてから「下北沢路地裏ツアー」は、意図がはっきりしていて情緒も伝わりと評価したものの、登場人物が類型的過ぎる点が惜しまれる」と語りました。

八覚選考委員は、「読みやすかったが、山が感じられなかった。仙人のような老人が出て来るが、ここからもうとおもしろくできた。牧田画伯の絵からも、単に下北沢ではない文学の世界を開くようなところにいつてもらいたかった。想像力で広げられたところを何カ所か逃してしまっている点がおしまれる」と改善点を挙げました。

都築選考委員は、「この作品は実際にこれを持って街を歩けるという楽しみがある」と綿密な描写を評価した後、「取材のし過ぎによりッ

続いて大高選考委員が、今回はどの作品もレベルが高く選考を楽しみにしていると全体に対する印象をまず述べてから「下北沢路地裏ツアー」は、意図がはっきりしていて情緒も伝わりと評価したものの、登場人物が類型的過ぎる点が惜しまれる」と語りました。

●第六回目を迎えた「まほろば賞」
第六回目を迎えた全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会は、二〇一二年九月十七日、東京は大田区民プラザにて開催されました。

「まほろば賞」は、全国の同人雑誌に発表された作品から同人雑誌優秀作を選出し、さらにその中からもっとも優れた作品を公開選考会にて選出する形式です。候補作は「文芸思潮」誌面に転載され、作品を読んだ人は誰でも選考会に参加することが可能であり、広く門戸は開かれています。

同人雑誌と大手出版社の関係が希薄となり、社会的評価を得られる機会が減っている今日ですが、「まほろば賞」の結果は例年メディアからの取材もあり、同人雑誌の活性化の契機としての役割を定着させつつあります。

最優秀作は会場での投票により決定され、それぞれの持ち点は、特別選考委員は五〇点、一般選考委員は一〇点、当日参加できない方は事前投票が可能で三点となっています。事前投票を加算した一次投票で上位三作品を選出し、二次投票で最優秀賞を決定します。

今回の特別選考委員は前回と同様、作家集団「塊」の大高雅博氏（群像）新人長編小説賞受賞、八覚正大氏（新潮）新人賞受賞、小沢美智恵氏（蓮如賞受賞）、都築隆広氏（文芸界）新人賞受賞、五十嵐勉（群像）新人長編小説賞受賞、「文芸思潮」編集長」と、「文芸思潮」誌上にて同人雑誌評を担当している全国同人雑誌振興会推薦委員の東谷貞夫氏です。会場は計二十人の選考委員が集まりました。

今年度の候補作は、草原克芳「下北沢路地裏ツ



八覚正大特別選考委員

の作品よりも上手く書かねば高く評価することはできない。致命的なのは出だしのまずさで、鏡が湖というキーワードともリンクしておらず情景も浮かばない」と否定的な意見を述べました。八覚選考委員は、「うまい書き手であり純文学の書き手で、スズメやカマキリの優れた描写があるが、肝心の鏡が湖の描写は読めず、作品のタイトルから入って来るインパクトや広がりを感じられなかった」と評しました。

都築選考委員は、「この作品はどう評価するか目玉だった」と語り、『文芸思潮』同人雑誌評での解説を読んでようやく良さがわかったが、解説を読まないと良さがわからない作品というのはどうか。原が女にだらしなかつたという宏子の言葉を、どれだけ信用していいのかなと疑問を感じた。宏子を主体にすればよいところを、どちらかというと原が主体になっている。宏子は日本文学に在る古いヒロインぽくてよいが、永井荷風や谷崎潤一郎の書く女と比べるとどうしても哀愁が足りない。評価に困る作品だった」と語りました。

五十嵐選考委員は、「同人雑誌の掲載時、『文芸思潮』への掲載時、公開選考会前と三回読んだが、読むたびに深まっていく作品はこれだった。一読しただけでは気づかない仕掛けがあちこちにあり、スズメやカマキリの描写には自分も感心した。原が治療を受けなかった理由として、医師である兄に対する意地と受け取ることもできる。文章がうまいと推薦したが、小沢選考委員の言うこともわかり、非常に優れた描写と変な描写が共存しており、そこが普通の書き手と違うところ。通常なら宏子を寝取ったあたりを書くところ、そこを省略しているのも普通と違うところで、その省略したところにも言われぬ味と深みがある」と表面的ではない奥深い魅力について解説しました。

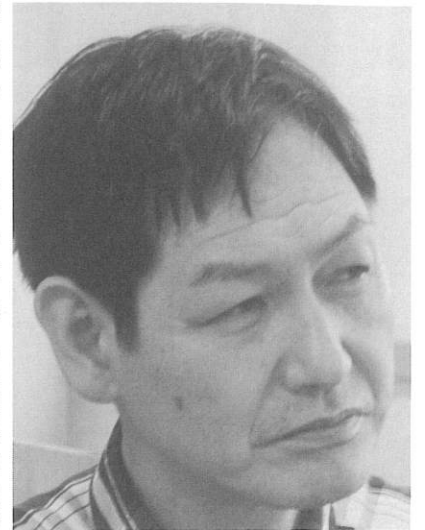
会場の八重垣氏からは、「小沢選考委員と同じく冒頭の文章がとくにまずい」と述べ、「主役ではなく控えである原和夫の、病院での死を追及する構成も悪い」と批判しました。

ここで東谷選考委員も、『繁茂』という言葉は『樹林』とは合わない」と指摘しつつ、「自分は医師である兄への意地で治療を受けなかったというよりも、こういう変なやつもいるという解釈でよいと思う。『私』が原和夫に関わることによって宿命を背負うようになっていく。余韻が残り、変化のない小説だが重心が低くてよい」と補足しました。

昨年同人雑誌優秀作に選ばれた「まくた」の平井文子氏からは、「山もなく淡々と書いていて感動もなく印象も薄かった」と否定的な意見が述べられました。「クレイン」の和田氏は、「五十嵐選



小沢美智恵特別選考委員



大高雅博特別選考委員

アーになってしまっている。宮本輝は取材に行っても細かい取材はしないで、その場のおじさんたちとしゃべるだけということを知り、下北沢を知っている人しかわからない表現もある」と指摘しました。

東谷選考委員は、「都市計画反対という題材よりも下北沢のこちゃこちゃした魅力を描いた方が、草食的な印象を受ける文体には合っていた」と述べました。

ここで会場からの意見が求められました。同人誌「私人」の長野純氏は、同人誌掲載時と変更を加えた『文芸思潮』掲載時の違いについて、「変更前の群像劇のままでもよかったのではないかと意見を述べました。「クレイン」の和田伸一郎氏は、「下北沢をこれだけ描いた点は価値ある小説だと思いが、主人公が素直すぎるので、もっと屈折した感情などを抱えている方が内容が膨らむのではないかと述べました。「相模文芸」の外狩雅巳氏は、「気持ち寄せられる登場人物が出てこず、感動やドラマがない」と批判しました。「まくた」の森本哲氏は、「それぞれの登場人物

がちゃんと書き分けられており、気になる点はいくつかあるが才能を評価したい」と述べました。

五十嵐選考委員は、「街には再開発によって失われていく魅力というものが、小説中で文化や壊して建て替えることの破壊の意味についても深く追及してもらいたかった」と述べました。「ただ、浅い切り込みだからこそ活きている部分もあるかもしれない。初夏に取材に行ったポーランドのワルシャワでは戦争によって壊滅した街並みを市民の要望により逆に再建・復元している、古いものを壊して新しいものを建てるという再開発の下北沢とはまったく逆のことをやっている。古いものを大事にするという根本的な見方の違いがある。これはこの作品だけでなく、日本人全体に、歴史や文明の姿に深く切り込んでいく視点を持つてもらいたい」と付け加えた。

「群系」の永野悟氏は、「人物・地名・再開発と雑多な要素があり、娯楽とはいかないまでもあまりシリアスでない描き方をすれば他の作品とは違うものになれたが、中途半端である」と分析しました。前回まほろば賞を受賞した山口馨氏は、「都



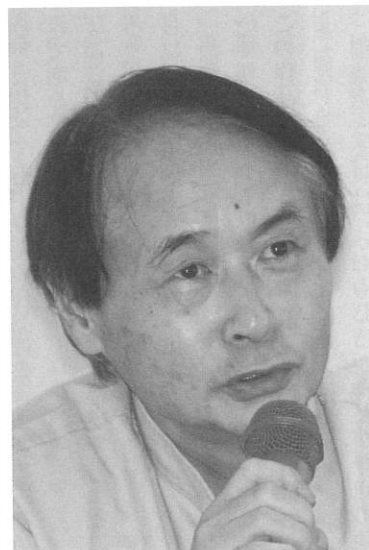
東谷貞夫特別選考委員

市の破壊を発見していき、それを好ましくないものとする認識に共感を覚えたが、文学としては深いところでの共感には欠けたかと感じる」と述べました。

次に市尾卓氏の「鏡が湖」です。東谷選考委員は、「これは地味で古くさい作品と受け取られるだろうが、原和夫のような人物を書けるといっては、すごい筆力。そういうイメージを定着させるのは非常に難しいと思う。この小説でいいのは、宏子が時間とともに成長していて、原和夫とのコントラストとなっていて、原和夫の深さが浮き彫りにされている」と高く評価しました。

大高選考委員は、「主人公と宏子の話になるのかなと思ったら原和夫との話になる、視線がいろいろ変わっているのが、普通はこういうことをすると小説自体がバラバラになってしまうところを非常にすんなりと読むことができ、かなりの力量があつて高く評価している」と讃えました。

これに対し、小沢選考委員は、「いずれの人物も何回も読んだと思わせるもので、これまでのど



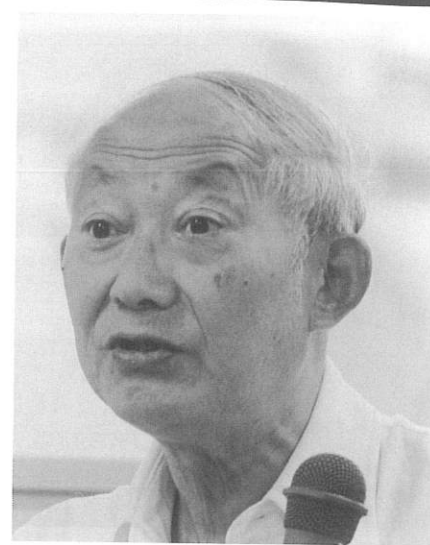
五十嵐勉特別選考委員

考委員のように深く読むこともできるのかと感心した」と述べた後、『私』は原に対して親しさや親近感を感じておらず、宏子に対してはかなりのシニパシーを感じている、最後には原を看とるといふ、運命的な出会いを作者は書きたかったのかなと思つた」と感想を述べました。渡辺美恵子氏は、「人物設定はよくあるもので、もうちょっと読みたいと思うところさらっと行つてしまふ物足りないことと、言葉が類型的であり現実感がなく、人物設定に寄りかかっているのではないかと述べました。

三番目に討議された作品は波佐間義之「黒い赤ちゃん」です。この作品は事前投票でもっとも多くの点を集めました。

最初に八覚選考委員が、「波佐間氏はずっとカネミ油症の問題を追及して銀華文学賞でも読んでいます。今回も題材のためにどうしても気持ち沈んでいかざるを得ず、耐えがたい部分もあつたが、最後に生きる意味を見出して今までは一番良かったと思う」と評価しました。

都築選考委員は「公害の問題が焦点となつたの

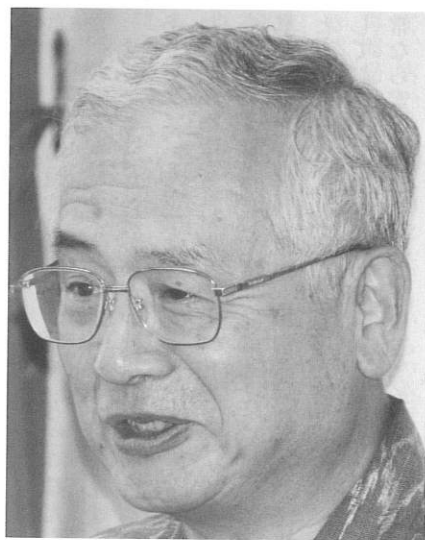


外狩雅巳選考委員

は自分より前の世代だが、震災による放射能や格差社会の問題がある現代を生きる人と共通の絶望感を抱えているような気がして、この小説には作者も意図せぬ普遍性があり、これは評価できる。カネミの油が美味しくて流行ったというところにリアリティを感じた。竹やりをおじいさんが削るところにも、おもしろがってはいけないおもしろさがあり、この作品を推したい」と高く評価しました。

小沢選考委員は、「インターネットで調べただけで、この小説に出て来る以上の情報を得られたので、背中に来たおできについてはリアリティがあったが、取材をしなくても書ける程度のことしか書いていないという印象を受けた。きれいにまとめているが、病院で子どもを産んで戻ってくる間に順番に説明したというだけで、小説としてのダイナミズムや人物の動かし方の工夫がないなと思った」と否定的な見解でした。

東谷選考委員は、「最後の二つのパラグラフは同人誌まる出しという感じで必要ない。同人誌を



長野統選考委員

書いている人の大半が、最後が妙に明日に向かっていく。しかし、同人誌を読んでこれだけまとまっている作品はなかなかない」と評しました。他の意見を問う前に、五十嵐選考委員が、波佐間氏が候補となるのは二回目であること、ずっとカネミ油症を追っている姿勢を讃えました。同人雑誌優秀作に四度選ばれた人は「まほろば作家賞」を授与されることが決まっていますが、過去二回同人誌優秀作となった山口馨氏は昨年まほろば賞を受賞しているため、波佐間氏はもともと「まほろば作家賞」に近い書き手になることを補足しました。

この大高選考委員が、「赤ん坊と母親がこれからどう生活していくのかということこそが小説の題材になるという気がする、自分としてはこの最後の部分から小説を始めてもらいたかった」と述べました。

会場の長月遊氏もそれに同意しつつ、「読んでいて救いがなかったが、作者の力量で理性的に訴えているところに好感を持った」と評しました。故河林満教室に所属していた織戸政義氏からは、「社会派小説はテーマが明確で読む者は引き攣りこまれる。出だしの三行も小説の書きだしとして胸が躍るところがあり、うまい。簡潔な文章でありほとんど無駄がなく、主人公の苦悩が良く出ている」と高く評価されました。山口氏は、「以前自分が候補となった際に同人誌編集長に言われた、「点まで人は読むんじゃないんだ、文章で読むんだ、文章を読ませる力がなければ、どういう大きなテーマを持っていてもそれは駄目だよ、そのことを思い違いをしてはいけないよ」という言葉を紹介し、波佐間氏の以前の候補作「どくだみ」と比べても、今回の作品は書きこんであり巧みであると讃えました。

ここで休憩が入りました。熱を帯びて来たところで、飲物などで一休み。一五分後の再開後一作目は、若草田ひずる「見返り仏」です。

最初に小沢選考委員が、「文章がきちんとしていて初めてスタートラインに立っているのであって、この作品は破綻した文章が見える」と批判しました。

補作は社会派作品が多いために印象が薄くなってしまふ点と、読む側が本主に主人公に共感できていないのか、外部の人を主人公にした方がおもしろかったのではないかとという点、作品はムカツキで読めてしまう面があるが、不愉快さで読める内容は読後感が悪くなるし、おもしろさに限界がある。最後も不幸のただ中で終ってしまう感じがするので物足りない」と意見を述べました。

東谷選考委員は、「かつてカラツバが盛んに行われていた時の描写が十行でもあればおもしろいし、そこに昔からの因習や言い伝えが織り込まれていけばよかった。フィクションをつくるという意識と技術があることは立派だが、最後は病院に入るのではなくボロ屋で死ぬ方が筋が通っている」と述べました。

八覚選考委員は、「カラツバというものに依存してしまい、そこを突き抜けて来るものがなかった」と惜しまれました。大高選考委員は「カラツバという題材はおもしろいが、それを活かして切れているかどうか、最後には普通の老人問題になっ

ている」と語りました。

会場の永野氏からは、「カラツバを調べたが実際にあることなのかわからなかった。創作と周辺資料との混交において、この作品を信用していいのかという疑問を感じたが、文章はよかったです」という評価が語られました。

和田氏からは「一番引掛かったのは最後に娘の視点で書いたことで、統一した方がよかった。深沢七郎の世界みたいなものを書いてもらえばよいかと思う」との意見が出ました。山口氏は「古語辞典などをあたったが自分もカラツバが創作で

あるか確認できなかった。時代錯誤的とはいえず異なる世界像というものを出すことも小説の仕事ではなかるうか。文章のまずいところはありますが、おもしろいなと思った」と好意的な意見を述べました。同人誌「飛翔」の神子島良男氏は「人間が死ぬとどうなるかというのは誰も思いついた経験がないので、この作者は死ぬことは恐ろしくないと言いたいのではないかと思いついた」と語りました。

五十嵐選考委員は、「現代において希薄になっている生と死の連結部分をどういうふうに見ているのか、この作品はその点で半分成功している。しっかりとここで提示して新鮮だとは思いますが、死とこちらを繋ぐものをもっとリアリティを持って書くことが可能だったかという点、より迫力とリアリティを持って書けたと思う。便利さを優先する現代の葬式は死を隠蔽していく方向にあるが、そこに精神性があるかという問題をクローズアップしているという功績が、この作品にはある。もっと強烈にこちらが殴られるくらいに提出することをやってもらいたい。タイトルは『見返り仏』よりも、印象に残る『カラツバ』を生かした言葉にした方がよかったかもしれない。私たちが忘れてかけている重要なものを提示している点で評価したい」と作品の根幹について解説しました。

それを受けて八覚選考委員は、「読んで瞬間に『おくりびと』に近いところがあるなと思った。地に戻ることによって、そこで再生があるんだらうなど、その過程の中で必ず『穢れ』の問題が出て来る。このカラツバっていうのも、もっともつとそういうところに踏み込んで、『おくりびと』



山口馨選考委員

とは違う形でやったらいいなということ、作者には期待を感じている」と語りました。

続いて東日本大震災を題材とした、佐佐木邦子「黒い水」です。最初に小沢選考委員が、「震災の実態を小説でうまくまとめ、文章も完璧と言っている作品。あえて挙げれば、主人公が直接の被災者ではないことから来る、あまりに目配りのきいた客観性というか、その傷のない点が欠点になっているか。震災について書かれた作品はすでに何冊も出ているが、本当に目配りがきいて小説としても作り込んでいる」と高く評価しました。

八覚選考委員は、「震災の小説は自分も多数読んだが、どれも人間として深いところには入っていかない。しかし、これは読んだとき『来たな』と思った。文章が良いが欠点として、『夫の出身地、つまりアイツの出身地だ』という文章に『えっ』と思った。作者がどういうスタンスを取ろうとしているかはわかるけれども、多くの場合において、アイツっていう形で被災した子どもは扱わないが、あえて踏み込んでいるんだと。他にも『あ

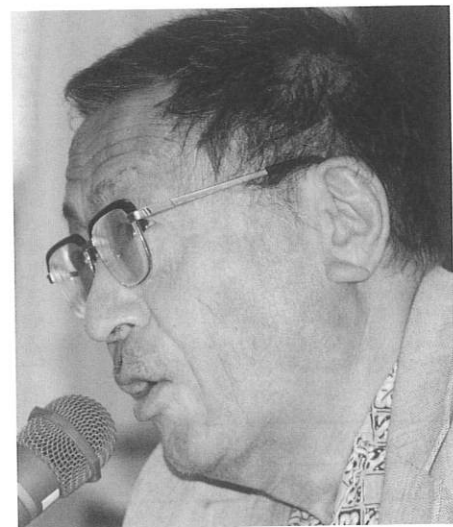


平井文子選考委員

ど絶望が深かったという設定なんでしょうけれども、その絶望が本物の絶望じゃないから読者に訴えてこないのかなと思う。文章はすごく上手だと思ふし、とてもリズムがカルでいいと思うけれど、最後になると、どうしてこういう物語が必要だったのかということが伝わってこない」と批判的な意見を述べました。

都築選考委員は「作品自体は非常に面白く読めました。マーサの影が薄く、最初と最後に演出のために取ってつけた感じがする。主人公を襲う白人が日本の事情に妙に詳しいのもリアリティがなく冷めてしまう。読者に突っ込みを入れられてしまうところが弱い」と同じく批判的な意見を語りました。

東谷選考委員は「文章のすごさで、現実から浮いたところをうまく書いていると思う。マーサの足音で夢の世界に入って、またマーサと縁を切って日本に帰って来る、そういうお伽噺として読めば、極端なところもすんなり読める。現実と夢の



八重垣渡選考委員

薄暗い空間のお伽噺として読めば、よい作品だと思う」と述べました。

大高選考委員は、「よくある話をいろいろ味付けしてるとい感じがしないでもない。タイトルの『マーサ』が大きな意味を持っているんだろうと思うけれども、よくわからない」と評しました。

会場の外狩氏は「これは人間の複雑さを書くためのひとつの題材に挑戦した作者の力量だと思う。女性のひとつの生き方を国際感覚の中で転がしていきけるというのはすごい。こういうスタンスを持てる作品は求められていると思う」と高く評価しました。

八重垣氏は、「規模が大きい作品だが、疑問のところがあらず、タイトルにしている『マーサ』の意味がわからず、ピンとこない。主人公がこれだけ生活を賄えるのか、家まで買っているのも疑問。打席に入って空振りしたような作品だ」と厳しく評価しました。

神子島氏は「マーサは主人公の心だと思ふ、潜



長月遊選考委員

んでいる良心が時々出て来て彼女の行為に対して意見をいうというそういうテーマじゃないか」と述べました。平井氏は「すごく文章が上手です。すらすら読めるけれども、納得できない。この主人公は心を病んでいるために、マーサが幻想のように出て来るのではないか。変わった小説として読めばありかと思う」と述べました。渡辺氏は「お伽噺のような楽な気分では読めない。東欧でセルビア人が尼さんなどを強姦して、おろせない時期に解放してというドキュメンタリーを見たことがあるが、みんなすごく苦しんで精神も普通ではないられない。この作品のようにそんな簡単にいくのかと思う。好きではないテーマだった」と語りました。

長月氏は「カトリーヌ・ドヌーヴ主演の『昼顔』という映画を思い出した。かなり儲けているのだつたら、子どもができるような年齢までこういう商売が続けられるとは思えない。『看護婦も大野の母親もそれを見抜いて』の文は、こんなつくりものめいた一文があるだろうか、自分が窓口にな

あなたが連れて来たんじゃないの』『思わずひっぱたいていた』など、そうした偽悪的なスタンスをとって、それでもこの子の面倒をみなきやいけないという構造をつくったところが鼻についた。しかし、竹ペラで剥がすようにしてやっていくスタンスは見事なもので、作りすぎと思えるところはあった。この作品は推せると思えた。しかし、最後の『なんというこもなく涙が出た』というところの作っていないというスタンスは、逆に自分の気持ちを削いだ。もっと大変な子を扱って、そうなったけれども人間的なところについていうのがあってもいいんじゃないかと。ここでそんなに距離を入れることもないんじゃないかというのが感想でした」と述べました。

都築選考委員は、「自分もこの作品を推しているが、この作者はかなりの受賞歴でプロの作家と言ってもいい。プロ作家が同人誌に書く傾向は今後も強まると予想されるので、一般の同人誌の作品と同列に評価してもよいのだろうか、という問題が出て来ると思う。自分は文学作品としてよりも娯楽小説としておもしろいなと思った。この作品は子どもがどこに居るかというミステリーとして読むこともできる。津波のテーマはまだ早すぎるので、それを評価してよいのか悩む。憎たらしい子どものエピソードが携帯電話のことしかないので、もっと酷い子どもを出した方がおもしろくなつたのではないか。ここはただけでないというところは、最後の『聖なるものを照らすように』という表現が大きいので、遠藤周作のキリスト教小説ではないのだから、こういうところははないほうがよいと思った」と述べました。

大高選考委員は、「最後の三人の子どもが腰掛けているところは非常に良いシーンだと思う。かなりの資料からつくったんだろうと思うけれども、全体としてあまりにも作り過ぎている感じがする。作りすぎてもよいけれども、小説的なリアリティが必要で、それがどうも微妙に違っているような気がして、あまり高く評価できないと思つた」と話しました。

東谷選考委員は、「一番気になるのは、『構築性に欠ける』というところ。本来は『アイツ』が軸になるところ、途中で消えて携帯を落としてその辺の話になっている。最初のボランティアの構想の時と、だんだん違った方向に話の筋が行っているんじゃないか」と述べました。

会場の和田氏は、「小説を読んで涙が浮かんでくるというのは久しぶりの体験だった。子どもの心を通して震災の厳しさを描いたことに感動した。強いて言えば『アイツ』や『聖なるもの』は気になるが、この中では一番の作品だと思う」と評価しました。織戸氏は、「また震災小説かと思ひながら読み始めたが、自分でも気付かない間に涙をこぼしていた。小説を読んでいて自然に涙がこぼれたというのはなかつた経験で、感動した。よく言われる絆や繋がりを前面に出したものでなく、子どもを預かりたくないという本音がよく出ていて、違う視点のリアリティがある。『ただ抱き締めた。ぎゅっと力を入れると、骨がないようにぐにぐに揺れた』というところは素晴らしく、いくら涙をこぼしてもいい」と絶賛しました。

山口氏は「自分も昨年、震災を題材とする作品



和田伸一郎選考委員

を書いた。自分の許容できる範囲でしか語れない物語れない、その中でこれだけのものを書けるのは感服した」と高く評価しました。

最後に紺野夏子「マーサの足音」です。まず八選考委員が「文学的なテーマに対する取り組みの深さは、この方が一番あるんじゃないかと思つた。最後のあたりはフロイトという超自我的な感覚がある。妊娠した自分が子どもと生きていくようなところが描けていて、図式的に言えば自我が超自我から脱出するようなフロイト的なテーマも考えられないではない。こういう性を受け止めて、そういう女性を描いて、最後妊娠しちゃって、それでいくつていうのは、男には書けないすごさがある。ただ、作品自体のまとまりから言うと、タイトルにつけた割にマーサも描けておらず、これで脱帽ですというわけにはいきませんでした」と語りました。

小沢選考委員は、「主人公は十二年前に夫を亡くし、その後九年間も娼婦をしていて、それほ



渡辺みえこ選考委員

にもつたいないことをしている」という批評でした。

長い時間をかけて候補作を論じてきましたが、批評が一通り済んだところで一次投票です。五十嵐選考委員からは投票に先立ち、過去には自分が推さなくても通るだろうと思つて全点を投せず、その結果、一次選考を通過できなかったという事例があるので、できるだけ、本場に推したい作品に絞つて投票することをお勧めする、と注意が喚起されました。

●第二次討議

また一五分の休憩を挟んで、いよいよ里見風樹アシスタントの集計による得点が発表されます。五十嵐委員から声高々に得票数が発表されます。

第一次投票結果

	下北沢路地裏ツアー	鏡が湖	黒い赤ちゃん	見返り仏	黒い水	マーサの足音
一次投票	3	0	31	4	7	15
合計	31	71	66	82	156	34
合計	34	71	●97	●86	●163	49

●第二次討議

作品ごとに会場がどよめくなか、「下北沢路地裏ツアー」は三四点、「鏡が湖」は七一点、「黒い赤ちゃん」は九七点、「見返り仏」は八六点、「黒い水」は一六三点、「マーサの足音」は四九点の結果となりました。

上位三作は「黒い赤ちゃん」「見返り仏」「黒い水」です。後半はこの三作にしぼつてさらに批評を深めていきます。

まず、「黒い赤ちゃん」につい



早川ゆい選考委員

「見返り仏」については、「カラツバ」が実際にあるのか創作なのか気になってしまふ、という意見が再度出されました。五十嵐選考委員は、「生と死を見つめ直す作品としての価値を再度説明するとともに、もつとインパクトのある作品にできたとは思ふ、なぜカラスの死体でなぞること救いに結びつくのか明確に書くべきではないのか。同じテーマで書き直してもいいし、この作者には期待している」と述べました。

東谷選考委員は、「黒い水」がトップだったのは意外だった。文章力も構想力もそうあるとは思えない。「アイツ」が最後までつながっていない」と批判しました。会場の八重垣氏は「これはあざといと思う。やるなら映像のドキュメンタリーでやってもらいたい。遺族に石を投げられてでも映像として残さなくてはいけない。それに比べると作家は安全なところから書いている、小説にそぐわない題材である」と否定的意見を述べました。小沢選考委員は、「この作品は膨大な資料を集

めてこれだけの長さにまとめたはずで、直接津波に飲み込まれてはいないにしても、後方の安全な場所からネタにしたとは思わない」と反論しました。

五十嵐選考委員は「黒い水」の問題点として、「主人公が文書を修復する『静』的なところは要らないと思う。携帯電話を持つ持たない、行方不明の子どもを追いかける、津波から逃れる、といった『動的な世界には合わない。タイトルの『黒い水』の『黒』が何につながっているのか象徴性が弱い。最後の部分のセリタカワダチソウを津波に例えるのはあまりにも弱くて無理がある。腕のある書き手ではあるが腕に頼り過ぎていて。あと、もう一つ問題なのは、地震の被害当事者がこれを読んで、ほんとうに納得するだろうか、ということだ」と批判しました。

大高選考委員も、「タイトルの『黒い水』は津波のことだが、あまりにも単純で弱く、もつと考えた方がよかった。小説の中にも安易な部分があるので、印象がよくないのかと思う」と述べました。

八覚選考委員は、「震災などの激動的な部分に對して、ようやく第一歩の視点を確保をはじめた文章が出たなと思った。『竹べらで慎重に剥がして』いくという、この感覚、いろんな出来事に対して後の人間がそれをどうとらえているか、そこに文学としての意味が出て来る。作者が取材をしたんだらう『ガソリンこぼれて、別な車は人が乗ったまんま沈んで』とか、そういうところがこの小説の一番評価できるところで、それがベースだからこそ私も感動した。しかし、読んでいくとそ



森本哲選考委員

て再度意見が出されます。会場の森本氏は、「まほろば賞」を受賞するのは最先端の作品テーマ・文章でなければならぬと思う、またここに「戻るか」と否定的な意見を述べました。これに対し八重垣氏は「タイトルは好みではないが、すごい作品で波佐間氏の名前は記憶にとどめた。これだけの密度をこめるといふのは大変な力量で、題材が暗いとか重いという意見もわかるが、迫力が違うことを強調したい」と評価しました。河林満教室の早川ゆい氏は、「この作品を推していたが、このラストから始めてほしい」といふことが自分も一番の問題だと思ふ。この作品でカネミ油症について今の若者が知ることができるといふ意義はあるが、「そういう事件があつたんだ」で終つてしまふ可能性がある。現在、事件がどのように風化しているか、事件について知らない若者を登場させたりしたほうが、より素晴らしい作品になつたのではないか。ただ、これはこれで完成度の高い作品だと思ふ」と評しました。

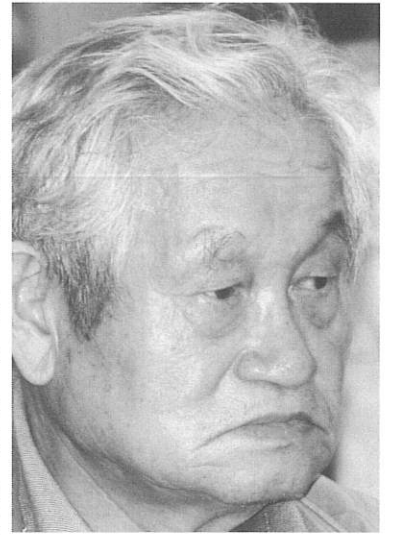
れだけではおさまらないので、『アイツ』っていう表現や、はじめの問題とかも入れて、そしていかにも動いているかのようにしてやっていく。しかしそれは本質ではなくて、この小説が震災を剥がして見ていこうという、その視点に対して、高く評価している。構造に問題があるといふのは仕方がないことだと思ふ。何年かして、たとえばカネミの『ベスト』のような作品が出て来るのかも、それだけで感動する人もいふし、自分も候補作の中では感動した」と高く評価しました。

会場の八重垣氏は、「震災やカネミ油症のような題材はなるべく作家は書かない方がいいと思ふ。当事者からしてみれば、なぜそれであなただけ原稿料をもらうのか、ということになる」という痛烈な意見が出されました。

それに対して永野氏は、「カネミ油症の話は非常に新鮮に感じた。自分の過去の記憶を小説



永野悟選考委員



神子島良男選考委員

という形で呼び戻してくれたというのは、小説の効用だと思う。時間軸の中で生きていく中で、過去のこれがあった、その資料をもとに次のストーリーである作品を書いていくという営みは、人間の営みとして、データベースに蓄積するだけではなく創作として書く、とくにカネミ油症のように消えかかっている問題を扱うことは重要で、同じ事件に対しても各々の被害や受け止め方があったわけ、それを作家の想像力によって書いていくのが小説。今、あらためて書き方が求められているから、当事者ではないという遠慮による自主規制は基本的に必要ないし、『黒い赤ちゃん』がいいと思う」と述べました。

山口氏は、「どんなに書き手が頑張っても、傷んだ人の全人格まで引き受けるようなものは書けない。『黒い水』に関しても、震災によって生じた怒りや悔しさや悲しさのすべてを、誰でも共感できるように書くことは到底できない。ある部分を実際立たせて書くことも大切だと思う」と述べました。

都築選考委員は、「原稿料について、作家に倫

理観を求めてはいけなと思う」と言った後で、「『黒い赤ちゃん』と『黒い水』の違いというのは、『黒い水』の方が商業作品の雰囲気書かれているので、おもしろくしてしまっているところがある。『黒い赤ちゃん』の方は迫真さを求めている、作品としては『黒い水』の方がおもしろいと思っただけでも、同人雑誌優秀作という商業的なルールにのっとらなくてもよいのなら、『黒い赤ちゃん』の方が作品としては合っている」と語りました。

ここで五十嵐選考委員から意見が述べられました。八重垣氏の述べた原稿料の問題について「タイ・カンボジア国境の取材にいった際、同行しているカメラマンが今死ぬと分かっている人の写真をパチパチ撮っている、それはその写真を日本の出版社に売って生活している。こうした冒瀆的なことをしているのか、本人にも良心の呵責がある。それはカメラマンも作家も同じことで、問題がないんじゃないかと思う。ただ単にお金儲けと



特別参加の河林幸恵氏



第6回「まほろば賞」公開選考会
私的レポート
和田伸一郎

うだけだったなら、そういうことはできない。誰かがやらなければ出来ないことで、作家やカメラマンはそうした弱みを持っているけれども、それを押し切つてやらなければならない。その指摘は意味がない」と語りました。また、山口氏の意見については「すべての当事者に伝えられるものを書くことは、確かに実際には不可能だけれども、作家の立場としては、できるだけそこに近づこうに努力すべきだというのが私の考えだ」と述べました。

予定時間を大幅に超過しており、ここで決選投票となりました。休憩を挟んだ後、得点が発表されます。

結果は、「黒い赤ちゃん」一四九点、「見返り仏」一〇三点、「黒い水」一六八点で、「黒い水」が最多の得点を集め、会場がどよめくなか、拍手とともに第六回まほろば賞に決定されました。

例年にも増して長時間にわたる批評が行われ、最後には脱線気味ではありましたが、作家のありうべき形についての重要な議論が交わされるなど、熱い充実した公開選考会でした。

表彰は、今回は明年一月二十六日に予定されている文芸思潮授賞式と併せて行なわれることになりました。

第二次決定投票

黒い赤ちゃん	見返り仏	黒い水
149	103	168

9月17日(月)にあった全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞(主催/全国同人雑誌振興会・文芸思潮)の公開選考会に初参加した。候補作は六篇(『文芸思潮46号』掲載)。特別選考委員六名と一般選考委員約二〇名が参加。場所は東京都大田区民プラザ。参加費二〇〇〇円。持ちは、一般参加者10点、特別選考委員50点で、単独に入っても、複数に分けて入れても構わない。

一次投票で、「黒い水」、「黒い赤ちゃん」、「見返り仏」が残る。二次投票で、「黒い水」が1位、2位が「黒い赤ちゃん」だった。

「黒い水」は、3・11大震災がテーマの作品。津波によって、家族全員が亡くなった小学六年生の男の子を夫の親戚ということで引き取り育てるようになった主人公が、情緒不安定の少年に手を焼き、憎しみさえ感じてくる。少年は「うちに帰る」と言い残し、自転車で家出。村ごと流され、もはや少年の家などないのに……。といったストーリーだ。小説の作り方があざといという意見も出たが、私は素直に感動した。また、作者が、芥川賞候補になっているということで、同人誌賞にふさ

わしくないという意見も出たが、芥川賞作家でも駄作はあるということで、特に問題はなしということになった。

「黒い赤ちゃん」は、カネミ油症患者が主人公。妊娠六ヶ月の胎児がいる身体で、油症被害に苦しんでいる。破水して早産した子どもが油症に冒され、当時「コーラベイビー」と呼ばれた黒い赤ちゃんだった。三〇年以上前の事件をドキュメントで書いた力作だが、現在どうなっているのか、赤ちゃんはその後どう育ったのかという、その後の視点も加えてもらえたかったという意見が多く出ていた。

「見返り仏」はカラツバというカラスの羽を使った土俗宗教を引き継いだ老婆が主人公で、こうした宗教が信仰された歴史にも触れてほしかった。私としては、順当の結果だったが、特別選考委員は評価が半分に分かれたようだが、会場も最後まで賛否両論激論が交わされた。ここで提案なのだが、二次投票は決選投票なのだから、点数を一品限定にしたほうが、すっきりしてよい。当然、特別選考委員の動向が重みを増すわけだが、そこで、受賞作品を推した特別選考委員に作品に対するコメントを書いてもらい、次号に掲載したらどうか。それを読んでもみたいとおもう。

それにしても、こうまで意見が分かれるとはおどろきで、小説作品の普遍的評価は、こうもむずかしいものかと、考えさせられた。さまざま意見聞いて、勉強になったが、良貨は悪貨を駆逐するというのが、批評もそういうことになるのだろう。当日は前日の雨から一転、暑い日だったが、それにおとらぬ熱いひとときだった。

第6回
全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

2012 公開選考会

9月17日月祝 PM1時30分

あなたも選考委員

同人雑誌最優秀作品を自らの手で選ぼう
同人雑誌界のエポックを

会場●東京都大田区民プラザ

主催●全国同人雑誌振興会・文芸思潮

後援●作家集団「塊」 参加費●2000円

●文書選考委員（送付参加）1000円

（候補作品を読んでいただくことが必要です／収益は「まほろば賞」の賞金となります）

※候補作6作は「文芸思潮」46号に掲載

参加申込 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 文芸思潮

メールでも受けつけます asiawave@qk9.so-net.ne.jp

地方から御参加の方は、宿舎も手します

詳細は次ページを御覧下さい。

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

第6回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

どうぞ選考に御参加ください **公開選考会**

あなたも選ぶ、新同人雑誌時代の、新しい文学賞

2012 9月17日 月祝 13時半

東京大田区民プラザ

●全国同人雑誌振興会・文芸思潮では全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を公開選考会にて決定します。公開による方法ですので、どなたでもご参加できます。

●候補作品は文芸思潮46号に同人雑誌優秀作として掲載された以下の作品です。

「下北沢路地裏ツアー」(草原克芳「カプリチオ」31号)

「鏡が湖」(市尾卓「季節風」108号)

「黒い赤ちゃん」(波佐間義之「九州文学」539号)

「見返り仏」(若草田ひずる「じゅん文学」70号)

「黒い水」(佐佐木邦子「仙台文学」79号)

「マーサの足音」(紺野夏子「南風」29号)

●選考会は9月17日(月曜日・祝日)に大田区民プラザ第一会議室で13時半より開かれます。郵送による投票だけでも参加が可能です。どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。

選考委員ご希望の方はまほろば賞選考委員申込用紙を、「文芸思潮」まほろば賞係宛にお送りください。※参加費2000円(参加費は賞金に充てられます)

選考委員は候補作を全作読むことが資格となります。お持ちでない方は選考委員申込用紙と併せて、文芸思潮に46号を御注文ください。文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいただければそのまま選考委員となることができます。詳しくは次ページをご覧ください。

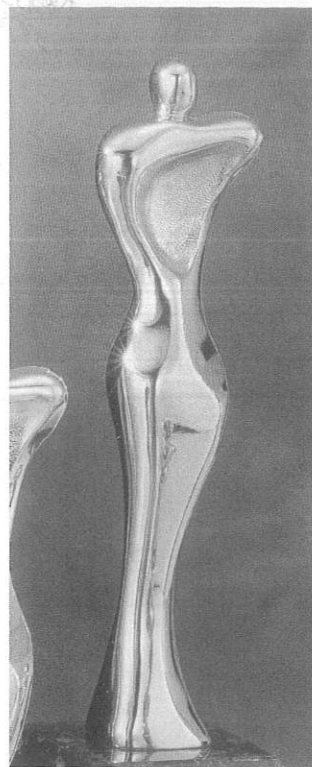
全国同人雑誌振興会

文芸思潮

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL&FAX03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp



新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の公開選考会に参加
ご希望の方は、以下の用紙をご利用ください。

第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞選考委員申込用紙

2012年9月17日(月祝)に東京都大田区民プラザで開催される、第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の選考に参加します。

ふりがな 氏名	年齢
住所 〒	所属同人誌(あれば)
TEL	Eメール(あれば)

2012年8月31日までに「文芸思潮」まほろば賞係宛に郵送・FAX等でご提出ください。これは実際に会場での選考に参加される方(一般選考委員)のための申込用紙です。選考に参加される方は、必ず全ての候補作をお読みください。※会場参加費2000円
会場に出席できない方(文書選考委員)は別頁の投票用紙をご利用ください。

★候補作作者は出席できませんので、御了承ください。

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから（3年以内とする）優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。候補作は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
 - ② 毎年**公開選考会**を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
 - ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
 - ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員（選考会参加）、および文書選考委員（選考会不参加／文書のみ）によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
 - ⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は当面設けない。
 - ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前までに行い、選考会当日までに開票集計して発表する。
 - ⑦ 最優秀賞は一人が原則とするが、二人もありうる。
 - ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる）
 - ⑨ 最優秀賞選考過程・結果を「文芸思潮」に発表する。
 - ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年5月25日（2012年7月1日改訂）

※文書選考委員の持ち点を3点に戻す。

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

第6回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞公開選考会

参加費 2000円
文書選考委員 1000円

あなたの手で最優秀賞を

★進行予定

①合議・討議⇒②投票⇒③絞り込み討議⇒④投票⇒⑤集計・決定

※徹底的に話し合った後、投票で候補を絞り込み、討議を重ねて第2回目の投票で決定いたします。

●選考会に出席される方は、前ページを利用しただき、お名前・ご住所・お電話番号を2012年8月31日までに、FAX、メール等でお知らせください。

●お問合せ 文芸思潮まほろば賞係

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL & FAX 03-5706-7848

Eメール asiawave@qk9.so-net.ne.jp

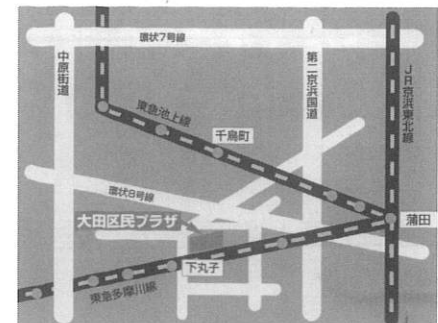
会場 **大田区民プラザ**

東急多摩川線「下丸子」駅前

2012年9月17日（月・祝）

13時半～17時予定

どなたでもご参加いただけます。



第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞文書選考委員投票用紙

選考会に参加できない方はこの用紙を切り取って記入し、郵便為替1000円同封の上8月31日までに、まほろば賞係宛てにお送りください。	⑥ 紺野夏子 「南風」 29号	⑤ 佐佐木邦子 「仙台文学」 79号	④ 若草田ひずる 「じゅん文学」 70号	③ 波佐間義之 「九州文学」 539号	② 市尾卓 「季節風」 108号	① 「下北沢路地裏ツアー」 草原克芳「カプリチオ」 31号
	点	点	点	点	点	点
持ち点 3	氏名			TEL		
住所 〒						

文芸思潮



※点数の合計が持ち点となるようにつけてください。一作に限らなくてもけっこうです。126文書選考委員の方は1000円の郵便為替を同封して下さい。収益は賞金にさせていただきます。

下北沢路地裏ツアー

草原克芳

1

茶沢通りに面した北沢タウンホールのアトリウムを通し
て、淡い光がフロアを水色に染めている。桜の散ったなご
りが、まだ道沿いのそこかしこに残っていた。春とはい
え、すでにいささか蒸し蒸しするほどの暑い陽気であっ
た。

羽木務は、腕時計を見て、集合予定の二時を少し過ぎた
ことを確認した。

すぐ向い側のバス停から、のろのろと三軒茶屋方面に、
バスが走り出す。車体には、春にしては強過ぎる陽が舐め

るように照りつけ、まばゆい光を反射している。

閑散とした広いタウンホールの一階ロビーでは、椅子と
テーブルが散在していた。若いカップルが黙り込んでコー
ヒーを啜っている。他にも暇そうな年金生活者ふうの老
人、買い物籠をかかえこんだまま放心したような顔で休ん
でいる主婦、仕事を探し疲れてタバコをふかしているとい
った風情の中年男性などが、所在なさに腰を降ろしてい
た。

無言で、あるいは小声で囁きながら座っている彼らの足
元には、青灰色の短い影が落ちていた。

奥の方では、ガラス越しに二、三人の職員がデスクに向

っているが見える。いかにも日曜の午後の公共施設の退
屈そうな風景だ。

さつきから羽木務は、いやな予感がしていた。

自販機の前で旗を持って立っている初老の人物が、この
ツアーの主宰者だろうか。《下北沢路地裏ツアー》と旗に
書きつけてある。

年の頃はおそらく七十代、若くて六十代後半だろう。胡
麻塩頭に褪せた紺色のキャップを被り、白いものまじっ
た顎髯を生やしている。小柄だが精悍な印象があり、全身
から何か闘志のような、ただならぬものを放っている。両
足を踏ん張るようにして、仁王のように立ち尽くしている
のだ。

彼はそれとなく自販機にコインを入れて、冷たいコーヒ
ーを飲んだ。

「あなた、メールくれた方？」

いきなり老人の顔が、隣にあった。

「ええ。すみません」

「謝ることないよ。それにしても今日は、集まりが悪いな
あ。もう、予定時間なんだが」

彼は、時計を見た。二時三分。無骨なダイバーズ・ウォ
ッチだ。

やっぱりやめとけばよかった。ほんの思い付きで参加し
た市民団体のイベントではあった。しかし、このいかにも

頑固そうな、煮ても焼いても食えないような老人と二人だ
けで、二、三時間歩くことになるのだろうか。気の弱い彼
は憂鬱になった。せつかくの天気なのだから、家の近くの
野川沿いの遊歩道でもゆっくり散歩していればよかった、
と彼は思う。

「私、こういう者です」

白髪まじりの男は、にこりとせず、名刺を手渡した。

—画家 アトリエ牧田主宰 彩明会会員 牧田徹吾—

洋画家というよりは、作務衣が似合いそうな、頑固な職
人といった感じの人物だ。人生についていらぬ説教でもさ
れてしまいそうだ。羽木務は、名刺を持ってきていないこ
とを謝り、喜多見に住むフリーのライターですといった。

羽木は、知人の編集プロダクションから急ぎの仕事が入
っていたのに、なかなか集中できず、ネットで調べ物をし
ていると、たまたまこの『路地裏ツアー』の広報が目につ
かれた。いっそ気分転換にと思って、足を向けたのである。
ごく軽い気持ちでの参加であった。

しばらくしてもう一人、灰色のハンチングを被り、ステ
ッキを持った背の低い小太りの老人が、にこやかに挨拶し
た。

「お世話になりますよ」この人物も参加するらしい。甲高
い唄れ声で、昔の江戸っ子ふうの雰囲気の人だ。祭りの
日など、半被はんぺいを着て世話役などやったら似合いそうであ

る。

突然、エントランスの回転扉が回って、いきなり華やかな空気が撒き散らされた。

「ごめんなさい、牧田先生。ちょっと秘書との打ち合わせが長引いちゃって」

「五分遅刻」ぼそりと画家はいった。人が集まり始めた。すねたように、笑った。

「こちらが有名な美人区議の御厨景子さん。こちら、今回初参加の、ええと、羽木さんでしたっけ」

画家はそれぞれを紹介した。

「あたし、話には聞いてたものの、今回参加は初めてなのよ。ちゃんと再開発計画の具体的な範囲を、自分の目で確認しておかないとね」

「ええ。僕もこの道路計画は、ネットや広報で知っていただけで」

羽木務は目をぼちくりさせた。

ひよっとして、区の広報誌などに顔写真入りで出てくるあの女性区議会議員だろうか。目を惹く派手な顔立ちのためか、最近は一、二の雑誌などでも取材されているし、ネットでも話題を呼んでいる。憂鬱が少し吹き飛んだ。

「何でこのツアーを、お知りになったのですか。あのホームページで、よくわかりましたね」

「いえ、この間、テレビでもシモキタ再開発問題を取り上げていたので、このところ、注意して検索したのです。

それであのサイトに引っかかりました」

「そうか。テレビの影響か。ふむふむ」

グラマラスな美人区議は、ボールペンを取り出し、手帖に何かを書き付けた。

「やっぱり強いわねえ、一般大衆には、テレビの影響」

（ちえつ、一般大衆かよ）と思いつつも、羽木は見とれていた。白いブラウスに黒いパンツといったシンプルな格好だが、彼の知らない外国ブランドらしく、全体のラインが、どこことなくスタイリッシュだ。胡麻塩頭の画伯と並んでいると、奇妙な組合わせである。

こんなことなら、Tシャツにジーンズなどという貧相ないでたちではなくて、もう少しましな服装をしてくればよかったですと後悔した。

「あ、来た来た」と美人区議が小さく手を振った。

エントランスに、痩せた細縁メガネの男の影が現れた。

シオルダーバッグの中身を気にしながら、ひよいひよいと、軽い足取りでやってくる。

「そのサイトを作った澤田さんです。塾の先生」

「まあ、あの、塾教師、っていうか……」とメガネの男は顎に人差し指をあてた。「いや、実は私、某国立大学の院生くずれでして。学間で飯を食おうと目論んでいたら、

教授と合わなくて、人生曲がってしまったという、よくあるパターンなの、なんとも情けない。特に某大学の体質は……」

「その某大学って、どちらなんですか」羽木務は、何の気なしに聞いた。

「まあ、いちおう」と澤田はいった。「いちおう、東京とか、ついているような、しょうもない、いわゆる、日本の代表的な、税金の、無駄使いの大学で、あります」

すると美人区議が、突き放したような口調で、

「ちゃんと、東京大学っていいなさいよ、トーダイって。自慢なくせに」

「あ、またまたまたア、御厨女史は、そういうふうには、個人情報を、勝手に、横流しするんだから」

痩せた塾教師は、片手を口元に当てて、細身の体をひねり、照れ隠しのような笑い声を上げた。

もう時刻を過ぎてはいるが、何人ぐらゐ集まるのだろうと、羽木は訝った。集団は苦手なので、これ以上増えない方がいいとも思う。

「お、マスター、登場だな」顔をしかめて、画家がいった。色浅黒い、体格のいい中年男が「失敬」とでもいうように、額に手をかざしてやってきた。

「昨日、友達が店に来て、四時過ぎまでどんちゃん騒ぎやあって、片付けに手間がかかって」エキゾチックな顔立ち

で、髭が似合う。太い首には銀のペンダント、腕にはブレスレットが光っていた。

「言い訳、無用」

にやりと渋く笑いながら、画家はいった。

「彼はバー『ロシナンテ』のオーナーよ。これでとりあえずメンバー揃ったのかしら。それにしても、暑いわね」

美人区議は、生白い首をあげ、片手に摘んだハンケチで、無防備に胸元に風を入れた。羽木務は、豊かなバストにどきんとした。選挙の票の三分の一は、この色気で吸い寄せたに違いない。

そうこうするうち、さつきから奥でもじもじしていた二十代のカップルが、こちらに近づいてきた。

「路地裏ツアーの方、ですか」と女がいった。

「ええ」と御厨区議。

「参加しても、いいですか」男は、気弱そうな笑いを浮かべた。

「もちろんよ」

お互いに挨拶を交わしたり、耳打ちをしたり、市民ホルの一画が少し騒がしくなった。

ふと、空気が、変わった。

牧田画伯が話を始めるらしく、持っていた旗を瘦せた塾教師に渡して、後ろ手を組みながら、真ん中に一歩進み出た。

「ええ、牧田と申します。絵描きをやっております」

老画家は、メンバーの前に、あらためて話を始めた。

「ご存知の通り、小田急線下北沢駅前を、現在、何とも無骨な、高さ二、三メートルの白い壁が囲んでおります。ちょうど、パレスチナのガザ地区を囲んでいるような、趣のない鉄のフェンスですな。線路脇にも、中から太い黒蛇のようなパイプがはみ出したり、泥まみれの瓦礫のような資材が積み上げられていたり、この町に似つかわしくもない、何とも荒涼とした、戦場のような工事風景が展開しております」

羽木務は、少し離れたところで、二人のタウンホルルの職員が、こちらを見ながら、ひそひそ話をしているのがあった。すでにロビーで缶コーヒーなどを飲んでいた一般市民が、面白がってこちらの方に耳を傾けている。

「ついこのあいだまでは、あそこでギターを弾いたり、大道芸をしていた若者たちも、すっかり、いなくなってしまう。そして、ラブソングやギターの調べのかわりに、鋼鉄の重機が、日々、物凄いい音を立てている。これは、駅前再開発計画ということで、小田急線を、地下にする工事があります。ところが我々の調べによりまして……」

羽木務も、ネットや雑誌を通じて、ある程度の知識は入っていた。

幅二十六メートルというのは、環状七号線並の幹線道路

低く官能的な美声で『ロシナンテ』のマスターはいった。

「そう」と老人は、力を込めた。

「文字通り、文化破壊道路、神をも恐れぬ悪魔の道路で、あります。第一に、はたしてこの巨大道路が、すでに拡張工事を経ている井の頭通りの完成後に、本当に必要かどうかということ。第二に、この区のプロジェクトが区民に、つまりわれわれ納税者に、適切に情報開示されてきたかどうか、ということにあります」

「いいぞ、巨匠。その通り！」
マスターは、自分のテノールの魅力を、十分に意識していた。

ハンチング帽の江戸っ子風の老人は、マスターの顔を不快そうに眺めている。

「あの、すいませんが、政治的演説はタウンホールでは、遠慮していただきたいのですが」

いつのまにか中年の職員が、彼らの背後に立っていた。「はて、なにか。私は仲間と、立ち話してただけですよ」

牧田老人は、職員を睨み据えた。熟練の寿司職人や、蕎麦屋の店主のような、気迫ある面構えだ。

相手は愛想笑いをしながら、「ここはどうか、ホール内からお引き取りいただきまして」と画家をエントランスの方へ促すような仕草をした。

だ。この道は、山手通りと環七とを結びつけ、交通量を緩和させるのだそうである。牧田画伯の言うところによると、世田谷区は、小田急線の駅前再開発計画に強引に連動させて、六十年間も眠っていた計画を、いきなり復活させ、補助五十四号線という堂々たる幹線道路まで、作ることになったという。私企業と区の行政が手を結び、あえて何の工事が分かり難くしているようにも見える。

「しかも、その巨大道路、これは、米軍占領下の時代、昭和二十一年に計画された過去の亡霊みたいな道路計画で、かつてマツカリーサー道路といわれていたもので、あります。

この道路が、駅のすぐ東側、なんと、演劇の町、下北沢の文化的シンボルともいわれるスズナリ劇場や、その背後の斜面にあるカトリック世田谷教会を、完璧にぶつぶします。さらに、線路を斜めに横切りまして、北口のいちばんシモキタらしい町並み、すなわち、ブティックや、アンティークショップ、古着屋や、エスニックレストランの並ぶ個性的な区域を、無味乾燥でただっ広いだけの、アスファルトのロータリーに、変えてしまいます」

「まあ、京都でいうならば」美人区議は、突き放した口調でいった。「町家の家並みや、祇園みたいな魅力的な小路を、いきなり壊しちゃうわけよね」

「そんな殺風景な白茶けた風景は、千葉や埼玉に行けば、幾らでもあるだろ」

彼は、しばらく沈黙したあと、ごほんとか咳払いをして、

「まあ、おいおい歩きながら、解説いたしましょう」

職員は安堵の表情をした。ロビーにたむろしていた市民たちは不審そうに目配せした。

最初、何となく苦手に感じていた羽木務は、この老人画家を、少し好きになっていった。

最後に遅れてきた男性が一人、慌てて駆け込んできた。痩せた背の高い人物で、のっぺりとした、眉の薄い、とりとめのない顔をしていた。

髪が短いので、坊さんのようにも見えるし、白いナマズのようにも見える。目だけが異様に鋭い。

「ええと、これが今回の地図ですね。ちよつと文字が小さくて見えないかな」

画家に促されて、塾教師の澤田が、バッグの中の資料を取り出し、参加者に手渡した。白ナマズは、資料を渡されると、畏まってお礼をいった。

「それでは、みなさん、出発します」

牧田画伯は再び旗を受け取って、野武士のように厳かに歩き始めた。一行は、その後についてゆく。

羽木務は、地図上の道路計画を、目で追った。新しく予定されている五十四号線は、駅の東側に斜めに走り、茶沢通りを突き抜け、町で最も古い劇場を潰してしまう。

「あの職員、私のこと知らないみたいね」

美人区議の御厨女史は、貰った地図を広げながら、不満そうにいった。

「いや、意識してるよ。さっきから奥で耳打ちしてたから」と、筋肉質のマスターが、片目を細くして笑った。太い首に下げたチャラチャラした光りものが気になる。

「こんな有名人、知らないわけ、ないでしょう」にやにやしながら、塾教師も、薄ら笑いを浮かべた。

茶沢通りのデイスクユニオンというレコード屋の前で、一行は止まった。入口手前に、白い自動販売機がある。

「やはり再開発反対のグループ、セイブ・ザ・下北沢という市民グループのやつっているTシャツ自販機です。まあ、これを着て運動を広げよう、闘おうということですよ」

自販機には、Tシャツのイラストレーターとして、黒田征太郎、リリー・フランキーなどの名前があり、彼らのデザインによるシャツが、缶コーヒーのように選べる形になっていた。これはかなり予算がかかる仕掛けだ。

渡された資料を読むと、反対運動の賛同者には、町内の居酒屋やブティックなどの老舗はむろんのこと、坂本龍一や、フジ子・ヘミング、よしもとばなな、本多劇場代表の

本多一夫、生前の松田優作も通ったジャズバー、レディージェーンのオーナー大木雄高。他にも建築家や社会学者、都市プランナーなどの名前が並んでいる。驚いたことに、著名なドイツの映画監督ヴィム・ベンダースの名前まである。これらの文化人や識者、アーティストは、すべて駅前再開発と、五十四号線の工事着工に反対しているのである。

「世田谷区も、大変な計画に手を染めたことになりませぬえ」

羽木は、思わず呟いた。

「そうだよな。これをあえて決行すれば、文化に無理解な行政という烙印を捺されかねないだろう」と、マスター。

「こんなことやったら、幾ら過去に立派な美術館や文学館を作ったとしても、すべて台無しということにもなりかねないって、区議会でもいつてやったのよ、あたし」

御厨女史は、猛然と髪を掻き上げた。「どうも猪熊区長になってから、風通しが悪いわ」

「ヴィム・ベンダースには、誰かがこの運動への参加を、依頼したのですか」と羽木。

「いや、向こうから、自分で来たみたいですよ」と澤田。

「彼は、もともと日本好きだから。何かで下北沢の風景が変えられてしまうというのを、聞きかじったらしいのです。日本の友人も多いでしょうからね。『東京画』見ました？」

「ああ、残念ながら。『ベルリン天使の詩』は見ました。

『東京画』には、下北沢、出ましたっけ」

「いや。でも、プライベートでは、よく来ているという噂ですよ」

陽がまた照りつけてきた。羽木は汗を拭った。まだ日本列島の北の方では桜が咲いているというのに、もうすでに初夏の雰囲気だ。最近、気候がおかしい。

敵めしい顔をした銀髪の画家を先頭に、旗を掲げた奇妙な一行が、茶沢通りのカーブを小田急線の駅方面に進んでゆく。しばらく行くと、目の前に、老舗劇場のザ・スズナリが見えてきた。

「演劇の町シモキタザワ」を作り上げたといわれる本多劇場グループの最初の芝居小屋だ。

決して立派なビルではなく、小さなスナックの集合した飲屋街を抱えたひとつのコロニーのような建物である。地方の温泉町に残っている映画館やストリップ劇場のようだ。向かって右側に、細い鉄階段が突き出しており、そこを昇っていくと、二階の劇場に入ることができる。人気の劇団が芝居を打つときは、ここに列ができる。羽木務は、大学時代にこの狭い芝居小屋でアングラ系の流れを汲む小劇団の演劇を見たことがある。何人かの女優や役者が、その後、テレビや映画で活躍している。

今回の「ツアー」は、たまたま偶然のきっかけで覗いて

みたのだが、この下北沢は、彼にとっても特別な街だった。学生時代、友達に連れられて初めて来たとき、ここは新宿や渋谷とも違う、何か小さな自治都市、手作りの解放区といった印象を受けたものだ。世の中には、まだ、バブル経済の名残りがあった。その印象とは、ジャズ喫茶やライブハウス、ブティックが街の基調となっている妖しい多面体の宝石であった。日常生活から浮遊した密度高い小宇宙のような街。この街を訪れた者の想像力を刺激するイメージの庭園であり、東京というコンクリートの瓦礫の中の文字通りオアシスであった。静岡県という穏和で保守的な地方出身の彼にとっては、これはほとんどカルチャーショックといってもよかった。

「ええ……。この有名なスズナリ劇場も、マッカーサー道路によって、潰されます」

旗を片手でなぞりながら、牧田画伯はいった。五十四号線を、あえてマッカーサー道路と叫んでいる。「第二期工事において、もののみごとに、潰されます」

天を仰ぐようにして目を閉じる。

「入ったことないのよ、私ここ」

ブラウスの胸元をルーズにあけたまま、ハンケチで風を入れ、御厨区議が目を丸くしていった。

「そりゃ駄目だ。この町を語る資格、なしだ」

浅黒い顔をしかめ、プレスレットをつけた太い腕を組み、

髭のマスターが、おもむろにいった。どこで灼いているのか、全身がすでに褐色である。

「そうなのよオ。今度、何か見ておこうかしらね。文化行政のリサーチとして。何がいい。いま何がワカモノに、受けてんの？」

そんな会話をしている二人は、何だか、個性派の女優と男優のようにも見えてくる。髭のマスターには、イタリアンマフィアの伊達男の格好をさせ、御厨女史にはベリータンスの踊り子の格好をさせ、仮装パーティーでもさせたら、この派手な二人にはさぞかし似合うことだろう。すると、胡麻塩頭の牧田画伯は、ベテランの映画監督か演出家といった雰囲気だろうか。

羽木がその思いつきを楽しんでいると、先程から黙って付いてきていたカップルが、デジカメで熱心に写真を撮っていた。

ふと、羽木は気を利かせたつもりになり、「撮りましようか」といった。「じゃあ、そこで並んで」

スズナリ劇場の前に立って、ぎこちなく二人は笑った。撮る瞬間、女性の方が顔を傾けて、唐突にVサインをして見せた。

「あるがと、ごさいマス」二人は笑って頷いた。このアクセントは、中国人の日本語ではない。

「あ、ひょっとして、韓国の人？」

ツプルだ。

「朴といます。ヨロシク」

「金と、います」

二人はあらためて自己紹介をした。

スズナリ劇場脇の小路を曲がり、数軒の鄙びたスナックを横目に進むと、フェンスで仕切られた緑の敷地があった。まぶしいほどの若葉が、いきなり目に飛び込んでくる。小径は緩やかな斜面になっており、奇妙なカマボコ形の建物と、住居らしいアパートがあった。

建物の入口には薔薇のアーチがある。季節には、イングリッシュ・ガーデンのような風情となり、さぞ美しいことだろう。小高い斜面の上に、陽を受けた教会の白壁が見えた。幾つか並ぶ縦長の窓に、彩色されたステンドグラスが嵌められている。

古風な白壁と、新緑との対照が、息を飲むほどだった。

すでにこの二三週間で、樹木は夥しい葉を繁らせ、空を覆う新緑の密度が、いっそう濃さを増していた。

柔らかな色の草が繁る道を、一行はゆつくりと上がって行く。

彼らはすでにカトリック世田谷教会の敷地内に入っていた。奥には、不思議な空間が広がっていた。右手には、聖ヨ

「そです。でもいま、日本に住んでますヨ。ソシガヤ・オオクラ」

「そうなんだ」美人区議も口を挟んできた。「出身は、ソウルかしら？」

「ソウル。二人とも、ソウルですよ」

「そうよねえ。何となく、雰囲気わかる」したりげに、御厨女史。

「アンニョン、ハセヨ」とつぜん区議がおどけていうと、「アニョハセヨ」と相手も素早く応え、日韓の女同士で、笑いあった。

「観光に、なるど、思っで」若い男は、人なつっこい目をして、穏やかに頷く。

「ええつ、これが——。市民運動のツアーが？」

羽木は、素晴らしいながら、デジカメを戻した。

「シモキタザワ観光ですよ。町の詳しい説明が、つくですよ。彼女、頭いいね」

男は、体を反らし、感心したように女を眺めるポーズをして、褒めてみせた。

女は、恥ずかしそうに両手で顔を覆って、いきなり男を横から突き飛ばし、韓国語で何か鋭く抗議しながら、恋人を睨みつけた。

男は鷹揚に笑って「もう、これですから」というような顔で、情けなさそうに頭を振ってみせた。なかなかいいカ

ハネ礼拝堂と称するロマネスクふうの聖堂があり、多角形の屋根には、小さな十字架が立っていた。

高台になった中庭の左手は、広々とした草地になっており、幅十メートル以上の蒼灰色の岩崖が迫っていた。その芝草の広がり半分を、大きな樹木の影が覆っており、陽が直接当たる明るい草地が、金緑色に輝いている。

小田急線の線路からさほど離れていないのに、空気の質がまるで違う別世界だった。

とりわけ目を惹くのは、その崖のものものしさだった。真ん中に大きな半円形の洞窟があり、四角い祭壇のような石の台が設えてある。その右上方の小さな洞に、青い衣をまとった聖母マリアの像が、天を仰ぎ祈っている。異国的な聖なる静謐さに満ちた一画。茶沢通り沿いのスナックや、飲食店、レコード店、古木屋などの雑然とした風景を見慣れていた一同は、茫然としていた。

「こんな場所が、あったの。知らなかったわ。木蔭の向こうの坂道は、何度も通ってきたのに」

御厨区議は、かすれたような声を出した。

彼女の手前では黄色い蝶が二羽、戯れるように飛んでいた。

「俺も、下のスナック街までは、よく来るんだが」

髭のマスターも呟いた。

「ええ」と、老画伯は咳払いをして、芝生に旗を突き立て

た。「ここは、世田谷では戦後建てられた、最も古いカトリック教会です。こちらの十字架のある建物が聖堂です。もともとは、府中の墓地に建てられる予定で、はるばるフランスから運び込まれた建材が、戦争で一時中断になりました、ここに移ってきたそうです。クリスチャンではないのですが、私もこの聖堂は好きで、何回か油絵に描いておられます。向こうの坂道から見ると、この庭からの眺めが美しい」

画伯は旗を斜めに握りしめ、奥へと歩いていった。

「さて、この洞窟を見てください。これ、どこかで見たことがありませんか」

「ルルド、じゃないかしら」区議はいった。

「そう。フランスとスペインの国境近くの巡礼地、ルルドの泉で有名な町ですね。十九世紀の半ば、村の幼い牧童たちが、聖母マリアの顕現を見たと言われるルルドの洞窟を、模しているわけです。難病が治るといって、パチカン公認の奇蹟ですね。この洞窟祭壇の様式を、通称ルルドといいますが。カトリック教会の庭にはときどき見かけられますが、ここはかなり大きい」

「まあ、カトリックは、どこか日本の神道や仏教と近い土俗的なものがありますからね」

澤田は顎に人差指をあて、したりげに一人で頷いている。羽木務は真下まで行って、聖母の像を見上げた。岩の上

には低木や蔦が生い繁っている。

「しかも、これらはすべて、信者さんが協力して手作りで作ったそうです」

韓国人カップルは、男の方が日本語に習熟しているらしく、彼が解説する度に、彼女が神妙な顔で頷いている。男は、光の角度を確かめながら、何枚か恋人の写真を撮った。「戦後すぐ、この近くにあったプールが壊されたままになっていて、その残骸が、積み上げられていた。そのコンクリートの廃材を積み上げて、ここまで立派なルルドを作ったそうです。結婚式や、いろいろな教会のセレモニー、ファミリーケット、パーティーなどでも使われている美しい庭です」

牧田画伯は、そこで少し疲れたように目を細め、キャップを取って、頭を扇いだ。

髭のマスターはもっともらしげに首を振り、美人区議は感銘を受けたのか、ハンケチで口を押さえていた。

「――例の幹線道路は、この教会の敷地を通るのです」塾教師の澤田が、不意にそう断言した。

眉をぴんと釣り上げ、細縁メガネの奥で鋭く目を光らせる。

「スズナリ劇場を潰してからこちらに伸びて、いまわれわれがいる場所を、見事に突っ切るはずですよ。幅二十六メートル、環七並みのでかい車道がね」

「そう。ピアニストの家の前を、交通量の激しい道路が通ることになる。ときどき綺麗な音が聴こえてきましたが、

やがてそんなことも、なくなるでしょう」

淡い春の雲が、枝々の間を流れていく。

岩陰の聖母マリア像にも、陽が射していた。「ハギサン。スママセン。また、お願いシマス」

いきなり、韓国人カップルにデジカメを手渡され、羽木務はびっくりした。

穏やかな微風が中庭を渡っていった。二人はすでに、聖母マリアの洞窟の前に並んで、顔をびつたりと寄せ合っている。共に指でVサインを示し、白い歯を見せ、大袈裟な笑顔を作っていた。

3

霞むような晴天の中、鉄が匂っていた。遮断機が、ゆっくりと立ち上がった。

「下北沢路地裏ツアー」の一行は、交番前の踏切にさしかかった。

新宿駅方向には、代々木上原の住宅街を超えて、遠く青紫色の高層ビル群が霞む。赤錆に縁取られた白銀色のレールが、幾条も春の陽を浴びながら伸びている。

くたびれたような午後の日射しが、白っぽい土埃に汚れ

一同から、たちまち小さな悲鳴が上がった。ふと、羽木が気づくと、最後に遅れて参加してきたのっぺりとした白ナマズのような男が、携帯をこちらに向けて撮っている。何かの記念だろうか。撮り終わると澄ました表情で、後ろ手を組んで佇んでいる。「ひどいわ。マリア様の庭に。何とも罰当たりな計画ねえ」と御厨女史。「これはねえ、クリスチャンだけの問題ではない。世田谷区の行政が、精神的遺産というものを、どう考えるかということですよ。いわば文化財でしょう、この風景は」

老画家は腰を庇いながら、険しい目で一行を睨みつけた。「文化財ねえ。ウチは浄土真宗なんぞね。ま、どうでもいいことだが。日本人は、仏教だろッ」

例の江戸っ子口調の小太りの老人が、ステッキで芝草を突きながら、わざと聞こえるような大声でいった。

さっきの黄色い蝶々が、追いかけてこをしながら、木の枝を透かして青空へと舞っていった。日光の中で、きらきらと輝く小さな金の環に見えた。

木洩れ日が芝草の上に淡い紫の模様を投影している。「さっき通ってきた道で、アパートが見えたのですが、それがフジ子へミングさんの家です」

澤田がすぐ隣にいた羽木にいった。「ああ、ピアニストの」

た砂利に照りつけていた。

踏切の西に下北沢の駅構内が見える。仄暗いプラットホームに、電車を待っている人々。構内を通した遠景は、トンネルの向こう側のように、白く明るい。駅側面の風景は、殺風景な白いフェンスで囲まれていた。

半年前は確固として存在していた建物が、いまではすっかり取り壊され、そこだけぽっかりと空虚な青空が見えている。この再開発計画では、駅全体を地下にするという。

しかし、いまだに駅ビルにするのか、駅舎だけにするのか、具体的なイメージも発表されていない。行政側にも影響力を持つ私鉄企業の駅前開発では、毎度ながら地域住民には何も告げられず、どこかの会議室で一つの計画が決定され、それは絶対的な効力を持つ。しばらくすると、白っぽい大型の建造物が、次々と建てられてゆく。その一方で、懐かしい古風な町並みが、櫛の歯が抜けるように、人知れず壊されていくのだった。沿線住民は、都政に食い込んだ大企業の前に、常に無力だった。

間もなく赤いシグナルが点滅し、甲高い警報が鳴り始めた。

「駅前のロータリーができるよ、おそらくは、いまの町田みたいな風景になるでしょう」

踏切を渡り終えた一行に向かって、老画家は溜息をつくように、いった。

所ですね。成城学園の隣だしね。大学時代、シモキタに住んでいたのですよ。一番街のちよっと北に入ったポロアパルト」

「僕もこの街に住みたいとは思ったのですが、何だか飲み込まれそうでね」と羽木は応えた。

「飲み込まれる？」

「生活が。つまり、毎日この街で飲み歩いたり、女に惚れたり、友達と会ったりで、たちまち時間が過ぎてしまう。いわばここは、小さな御伽の国です。じつさい、僕らの先輩にも、この街に住み着いて、いつのまにか、四十になり、五十になり、それでもまだ青春が続いていると錯覚している夢見る中高年、という人がいっぱいいます。皆、サラリーマンや役人ではなく、編プロをやったり、イベント企画の会社をやったり、ヤクザな商売で食いつないでますが。なにしろ、この不景気だしね」

「わかる、わかる。一度この御伽の国に住むと、他の街には住めなくなってしまうんだ。かつての神童、今ではしがない塾教師のオイラも、まあ、似たようなもんだし……」

駅の脇の左手に入ると、そこは不思議な気配を漂わせている下北沢北口食品市場、通称、駅前マーケットの空間が始まっていた。

屋根は低く、通路は狭く、戦後すぐに発生した焼跡鬧市

「この辺を、でかいビルが囲むわけだ……」と羽木。

「そう。渋谷や新宿辺りから、大手資本が進出し、高さ七〇メートル、地上一七階ものビルが林立する。巨大な駅ビルを中心としてね。ロータリーでは、タクシーやバスが回り込み、効率よく人間どもが運ばれる」

「画伯はおもむろに、顎髭を撫でた。」

「シヤネルや、ヴィトンの店が入るかも」と御厨女史がいった。

「何だよ、まんざらでもなさそうに」と髭のマスター。

「しかし、味もそっけもない町になるな。もちろん、その晩には、ウチのバーも出て行くことになるがね。常連どもども」

「あら、民族移動みたい」

「そうさ。まさにエクソダスだ」

「さあ、そろそろ駅前市場に入りましょうか」

世話人役の澤田が、片手を上げて一行を手招きするような格好をして見せた。

「どこ、お住まいですか」澤田が、歩きながら話しかけた。

「近い世代でしょ、ウチら」

「喜多見です」と羽木は答える。「世代ねえ。世間でいうところの、オタクってやつ？」

「フッフ。そうね。喜多見は野川もあるし、緑の多い良い

の雰囲気をいまだに残している、いまや東京でも数少ない場所だった。天井は、トタン板やベニアがひしめき合うように組み合わされ、さながらドイツ表現主義映画のような、舞台裏の天井のような、雑多で不規則な構造を顕わにしている。

意外にも、二階の窓辺などにはモダンな装飾が施され、随所に昭和の残り香を感じさせる。路地は半世紀もの間、夥しい人間たちに踏みしめられ、奇妙な光沢を放ち、陶器のような緑がかった鼠色を帯びている。小さなカスバ、香港九龍城のようなその内部には、ついこの間までは、干物、乾物、野菜果物、食器陶器や手袋や足袋やバッグ、袋物の類、駄菓子や日用雑貨を小売りする露店のような小店舗が並んでいた。

しかし、駅前再開発計画によって、大方の店は、多少の金を握らされて追い出され、いまは期限付きで内部を改造した飲み屋などに活用されている。

「しかし皮肉なことに、あと半年しかやらない、一年しか営業しないというところに付加価値が生じて、小さな焼鳥屋や居酒屋が、いま雑誌に取り上げられて大流行なのです」

牧田画伯は、旗の端を撫でながらいった。

「この市場の中は、私も昔から馴染みで、知り合いの店もいくつかあります。最近の若者の発想は大したもの、廃屋同然の店を、お洒落なワインバーに作りかえたり、ユニ

「クナ和食レストランが出現したりと、なかなか連中、クリエティブですな」

「この店なんて、懐かしい作りね。大正十三年からあるお団子屋なのね」

御厨区議は、腕組みをしながら看板を見上げた。その店は、ガラス戸で囲まれた間口の狭い店で、カウンターやテーブルが覗いていた。

「じつはここ、『うさや』といって、竹中直人主演の映画セットを、そのまま飲屋にしてるんです。二階もどこかの民家みたいで、いい感じですよ。看板にある団子とかまんじゅうとかは、実際には関係ありません」澤田が流暢に解説した。

韓国人カップルが、格子状になったガラス戸を覗いている。

少し離れた所で、例の白ナマズが、携帯のカメラで撮影していた。ことによると、風景ではなく人間を、撮影しているのだろうか。羽木は訝しげに彼を見た。長身だが、ことなく冷酷な尼僧のような顔立ちだ。

前方の楕円形の小窓から、今夜のための支度をしている二十歳ぐらいの女が見える。壁には横文字のメニューが手書きされている。

「もつと奥へ、参りましょう」

牧田画伯は、髭に覆われた厳めしい顔を反らして、悠然

と進んでいった。

仄暗い路地の壁にはバッグが吊され、木箱の上には足袋や、靴下、雪駄等が並んでいる。薄暗い店の奥で、老婆がひっそりと座っていた。狭い壁の隙間に、洗濯物が干されている。まるで東南アジアのパザールだ。ここに住んでいる人間もいるのだろうか。かすかに微臭い。平成の日本ではないような褐色に沈んだ一面は、空気の質まで違っていた。

「汚いねえ、きたない、きたない」ステッキの老人が、いきなり語気を強めて、吐き捨てるように、いった。「ボヤでもあったら、どうすんだろねえ」

「あの角に、以前『せつちゃん』というおでん屋があつたね」

髭のマスターは、老人には全くとりあわず、懐かしそうにいった。「せいぜい数人が入れるような狭い屋台。劇団関係者には有名な店だよ。ワラジという、どでかい厚揚げがうまかった。明け方まで、よくその角に椅子を並べて、肩をくっつけ合つて、若い連中が騒いでいたつけ」

「ロシナンテから流れていくパターンとかね」と、区議。

「あつた、あつた、そういうこと。夜の二時頃に店を閉めて、俺も一緒にいった」とマスター。

このマーケットを囲む薄い壁をひとつ隔てて、駅がある。おでんやの屋台のあつた角を廻ると、アンテナが斜めに突

「あの、僕は、防災上の問題だつて、聞いてたけど」

羽木は口を尖らせた。

「こんにちは。素朴な、世田谷区民の皆様！」澤田が、皮肉っぽく冷笑した。「そんなわけ、ないでしょ。一体、いつ、どんな火災があつたんですか、この駅前市場付近で。」

下北沢で、大火事があつたことが、ありますか」

「たしかに」羽木はあつさりど、納得した。

「あんたらサ、そういうけどね」不意にステッキの老人が、我慢しきれずに甲高い声で口を挟んだ。「これからもないと、断言できないだろ。安全なことに、越したことはないんだ。それに、住民の意志だつて、再開発を望んでいるじゃネエか」

「貴方がいう住民とは、地権者のことですか」

牧田画伯が、穏やかにいった。

「住民と言つたら、住民なんだよ。なあに。地権者だろうと地主だろうと、立派な区民ですよ。この辺でロクに働いてもせず、ふらついている若者と違ってサ、税金をたんまり払つてるんだ」老人は、厚い下唇を突き出し、画家を睨んだ。

「爺さん。ロータリー予定地の地主ではない地域住民は、どうなんですか。つまり、再開発で、たんまり金の入つてこない人間は、全然、同意してないでしょう。というよりも、このままの雑多な街並みを愛しているわけだ。それとも、土地持ちでなければ、風景について物言う権利はない

ある」と老画伯。「つまり、交通量緩和なんて、ただの建前。連中は駅前に、町田や渋谷みたいな大型ショッピングモールや、デパートの箱物を作って、収益性の高い土地利用がしたいわけよ。そのためにわざわざ血税を使って、いらぬ幹線道路まで造らうとしてるわけ」

御厨女史が、豊かなバストの前で腕を組んだ。

とでもいうのかい。……あんたらは、土建屋行政から、美味しい餌で一本釣りされてるだけさ」

老人よりも頭ひとつぶん背の高い、イタリアの伊達男のようなマスターが、濃厚なテノールの美声に、多少の凄みを利かせていった。

するとステッキの老人は、慌てて目を逸らした。

ロクに働きもせずふらついている若者という一言に、ちかんときた羽木は、内心快哉を叫んだ。実際のところ、不景気で仕事の少なくなったフリーのライターなど、ほとんど引き籠もりのニートに等しいだろう。

でつぶりとした老人は、厚い下唇を突き出し、ハンチングを乱暴に被り直して、大袈裟な咳をひとつした。

「まあ、いいじゃないの。ここで議論することないわ。いろんな人がいるわよ、世の中」と女性区議。

「ほう、あんた、美人だねえ」老人は、急に目を細めて媚びるように、御厨女史の顔を覗き見た。

「まあ、ありがとうございます」

彼女は、丁寧に頭を下げてから、同志のマスターに向かって、意味ありげにウインクした。

「議員さんかね。大したもんだ。推進派を敵に回して、ジャンヌ・ダルクみたいだねえ」

話題が逸れて助かったという顔をしている老人を見て、羽木は、ぶつと吹き出した。

《下北沢路地裏ツアー》の一行は、駅前マーケットを過ぎて、やがて北口の雑多な一画に入り込んだ。花々の匂う天気の良い日だった。すでに住宅街の庭には、紫色のモクレンや、白いハナミズキなど季節の花が咲き誇り、華やかな色彩にあふれていた。水溜りには、写真のように雲の影が映っている。

この周辺は、もともとは住宅街だったけれども、現在ではブティックや古着屋、アンティークショップ、それにフレンチやイタリアン、アジア系の小さなレストランなどが建て込んでいる。

いまから三十年以上も昔、アジア各地や、アメリカ西海岸、ヨーロッパを放浪していた若者たちが、帰国してから、比較的地価の安いこの辺りに、輸入雑貨店や古着屋や一風変わったバーを始めたという。

つまり店の初代オーナーたちは、かつてビートルズやローリング・ストーンズに入れあげていた、ヒッピーやフラワートルドルンの成れの果てなのだ。

彼らは中央線沿線では、雑多な雰囲気を保つ吉祥寺、阿佐ヶ谷、西荻、高円寺にたむろし、そして井の頭と小田急線の交差するこの下北沢といった町に、ごく自然に住み着

などと、うそぶくのである。

さらには、決して画一的な小市民生活に埋没したわけではないといわんばかりに、腕のワイシャツをまくり上げ、ネクタイを左肩にたくし、胸を傲然と反らしつつ、次の生ビールを注文する。「……あの頃の連中、いま頃、どこでどうしているもんなかア」などと、目を細め、感慨深げにつぶやきながら。

こうして、元ヒッピー達の経営する店を、自称元ロック1、元シンガーソング・ライターのネクタイ族が、経済的に心情的に、脇から支える常連客となつていった。ここでは、長い髪を切らずにそのまま中年を迎えた人種と、きちんと髪を整髪料で撫で上げた企業の間管理職とが、仲良く共存している。

そんなわけで、商店街の価値観とも、市民のそれとも異なつた独特の解放的な意識が、このカラフルな村落のような町では、裏道の石ころや苔にまで染みついていたのである。

日曜の午後なので、路地という路地を、若者たちが思い思いの格好で、そぞろ歩きをしている。路地裏から次の路地裏へ……。この町を訪れる若者たちは、まるで岩や藻の中を泳ぐ回遊魚のようだ。

日光と木蔭のんだら模様。樹木も多いので、ツアー一

いた。色とりどりのインドのお香や、まがい物のエキゾチックな仏像を売っている店、ジーンズや革ジャンの古着店、香辛料の匂うタイ風レストラン、ユーモラスな凶々しさにあふれたバリの工芸品の店など、極彩色のアジア文化と、欧米のロック音楽とが、狭い路地のどん詰まりで、妖しい紫煙のように混じり合った。

そんな店では、本来は輸入雑貨の店のはずなのに、夕暮れともなると、仲間内では酒がふるまわれ、ときには酒以外のものも回つて来た。

興が乗つてくるとともに、端っここの柱の陰あたりで、おもむろにギターが奏でられ、丸めた指の隙間から、鋭い汽笛のような口笛が吹かれ、手拍子、脚拍子が始まった。

ほんのりと頬を染めた艶っぽい歌姫が、いつももなくグラスを片手に、ゆらりゆらりと立ち上がり、長い髪をかきあげながら、甘くハスキーな美声を響かせて、やんややんやの喝采を受けた。

夜ごと繰り返されるゲリラ的な深夜の饗宴……。その音と光は、安っぽいガラス戸の隙間を通して、迷路めいた路地裏にも、星明かりのように洩れていった。

そして、とりあえずネクタイを締めて、社会に復帰したサラリーマン達が通い詰めるようになり、「今では毎朝、満員電車で揺られているこの俺だつてさ、こう見えても、昔はその辺のライブハウスで、ちよいと鳴らしたもんヨ」

行の顔が、日向になったり、日陰になったりを繰り返した。牧田画伯はときおり、店の主人や店員たちに声をかけられる。老画家は、その度にかすかに微笑し、軽い挨拶を返していた。

大きく枝を張った楠のあるマンシヨンのベランダでは、部屋の住人らしい若い外人男性が、ギターを弾いて得意げに歌を唱っていた。その下を若者たちが、紙袋を下げて、けだるそうに、ぞろぞろと歩いていく。彼らと目が合うと、金髪男性は、上機嫌で投げキッスを返して笑って見せた。いま住んでいる部屋が、気に入っているらしい。

この辺りでは、昭和三、四十年代に建てられた木造民家が、そのまま二階建ての和風フレンチの料理店に改造されたりしている。ブロック塀には、いつものメニューが記され、魔女の腕のような枝に吊るされた黒板には、本日のお薦めの三陸海岸の牡蠣が、白いチョークで手書きされていた。玄関脇の木箱には、数本の濃緑に輝くワインの瓶が並んでいる。

鉄の装飾のついた窓の中、ひっそりとした仄暗い室内に、アールヌーボーふうの緑やオレンジの花型ランプが見える。常連客たちはパンを指でちぎり、肉料理にナイフを入れないが、ひそひそ声で語らっている。

やや暗くなった奥には、網目のある旧式の蓄音機や、黒い扇風機が覗いていた。木陰のテラスに灰緑色のパラソル

が、なかなか楽しいメンバーなのよ。旧建設省の天下り官僚、財団理事の谷島孝。同じく旧建設省官僚から大学教授になった岸田幸隆という、元役人の二人。そして小田急電鉄系のシンクタンクに属していた大山次郎という人物で作られているの。ステキでしょ」区議が言った。

「それと宮地芳明は、二子玉川再開発を展覧したデベロッパ出身」澤田はつけ加えた。

「つまりその委員会は、再開発の推進派そのもの、ということ？」と羽木。

「そう。やらせというか、最初からゴーサインありきの出来レースよ。ぬけぬけとまあ」

「しかし、なんだナ」むつつりと黙り込んでいたステッキの老人が、下唇を突き出した。「ああいう、民家を使った小料理屋なんざ、自分達は、気の利いたことやってるつもりなんだろうが、不衛生だわな。昔の家の黴臭い台所を、そのまま使ってるんだろ？ ネズミだつて出るし、ゴキブリだつて混じってる。ヤダネー。どうして、どうして。あんなもなア、食べられたもんじゃないヨ。あたしゃ、ちゃんとしたモダンなビルの店の方が、好きだね」

「爺さん、どこの店で、ゴキブリが入った料理を出したつて」ロシナンテの店主が斜め上から睨みつけた。「こら、証拠出せよ。こつちも一応、食いもの屋なんぞね。いい加減なこといってると、許さないぜ」

を立てた外テーブルでは、三十代後半ぐらいの二人連れが、ちょうどワイングラスの縁を、カチンと接しているところだった。

「駅前ロータリーは」と牧田画伯は、窄めた旗で指し示した。「ちょうどこの辺りの幅まで、フラットなアスファルトにしてしまいます。六十年かけて、できた風景ですがね。車が入り込み、さっきの十字路の辺りで、いちばん太くありません。バスやタクシーが回り込むでしょう」

参加者たちは、重苦しいものを感じていた。「それって、自然破壊、環境破壊に近くない？」御厨女史は、訝しげにいった。

「ですよ。林道を一本通すと、周囲の動物や野鳥たちが、死滅するみたいよ」と羽木。

「土建屋行政の最たるものだ」とマスター。「ダムや道路などいつもの公共事業の手口だけど、とりあえずどんどん工事を進めておいて、後戻りできない状態にするわけだ」

「猪熊区長と役人たちが、密室で都合良く人選した諮問委員会の見解を、一般区民の意見だということにしてね。つまり、大規模な再開発やむなし。いやそれこそが、住民の願いだ」と

舌打ちしながら澤田がいった。

「ちゃちなマインド・コントロールよね。世田谷区が、広く意見を聞くという建前でかき集めた学識経験者というのの辺りをばさばさと叩いた。

「な、なんだよ。例えばの話さ。例えばの話だよ」

老人は、慌ててそっぽを向き、ハンチングを取って、膝の辺りをばさばさと叩いた。

棕櫚の樹や、ぎざぎざのヤツデの木に囲まれた洋館もどきの家。古い民家の裏手を通り抜け、軒先をくぐる。猫や犬や、世田谷一帯に棲み着いているというハクビシンや狸が夜中を通り抜けるような道に入る。うっすらと苔に被われた石畳に、古いブロック塀。そして、垣根から覗く物干し竿や赤い三輪車。

やがて彼らは、住宅と店が入り組んだ小路を過ぎて、再び、思い思いのファッションを着こなした若者たちの多い路上に戻った。

何十台もの車が入るような大型ガレージとして使われていた建物に入る。

いきなりラップ音楽が、大音響で飛び込んできた。

そこには洞窟の中の迷路のように、雑貨屋やアクセサリー、ファッションの店舗が、所狭しと入り込んでいた。極彩色の古着が葡萄棚のように吊り下げられ、照明に照らされて立体的に浮かび上がる。太い鉄骨が剥きだしのままの天井や、落書きのある壁には、安物の首飾りや宝飾品が吊り下がり、鏡に映されて輝いていた。どこを見ても、光と闇とけばけばしい色彩が、万華鏡のように鏤められている。

赤や桃色、水色や黒、女性物の下着は、薔薇やポピーのように、花ざかりだった。

ラップの音が、天井にまで響く。

それぞれの店は、小動物たちがこしらえた地下の巣穴のようにも見えた。コンクリートの通路には、かつての車庫の表示らしき白線や矢印の跡が、色褪せたまま残されている。茶髪に染めた若い女たちが、澄まし顔のまま、軽くラップのリズムに身をゆだねるようにして、ネックレスを並べ変えている。彼女たちの細く尖った爪先には、小さな花や星が描かれていた。

隣の店では、フランケンシュタインやドラキュラなどのグロテスクな仮面や、ポップアートのようなオブジェ、怪獣たちのぬいぐるみが並べられ、こちらを睨んでいた。

一行は、まるで初めて地下世界を捜査する探検隊のように、好奇心を剥きだしにして店を覗いていた。韓国人カッブルは何か買うつもりなのか、店員と交渉を始めた。

「若い人の発想って、凄いわねえ。こういうアイディア、あたしの選挙に活用できないかしら」

区議会議員が、仮面の赤い鼻に触れながら、呟いた。

「そういう遊び心のない人間には、無理だね」と、バーの店主。

「では、こちらに向かいます。迷子は、いないよね」老画伯が、穏やかに笑う。

折れ曲がり、ドアを開け、トイレの横の角を過ぎると、どうやらスーパールの一画に着いたらしい。

一つ向こうの明るいフロアでは、近所の住宅街に住んでいるような主婦やサラリーマンたちが、野菜やパンや麺類を入れた籠を下げて、レジで並んでいる。ここではすべて、白っぽい無機質の照明に照らされていた。

まるで地下の極彩色の異次元世界から、脱色された日常空間へと戻ってきたように思われた。二つの世界は、プレイヤードッグの巣穴のように、立体通路で繋がっていたのだ。

一行は、白い廊下を出て外の景色の見える開放的なガラス窓の前に立った。

「ほらあそこ。下に見えるのが、駅前マーケットです」

澤田が、手をかざした。

大きく張り出したガラス窓から、さつき歩いた赤錆びた迷路、焼跡闇市時代から続く駅前マーケットが望める。とはいうものの、ほぼ真上からの視界のため、茶色やブルーの板を、ピカソやブラックのカラーージュのように貼り合わせた無惨なトタン屋根や、貧しいバラックの壁が、見えるだけであった。

——ある感慨が、一行を支配した。

確かに、汚いのである。みっともないのである。しかし、このトタン屋根の赤錆や、風雨による破れ目は、戦後日本

「あら、あの方、大丈夫かしら」

ふと見ると、例のハンチングの老人が、具合が悪くなったように、通路にしゃがみ込んでいた。羽木は少し心配になった。青紫色の髪の少女めいた女性店員は、店先に蹲った老人を、不快そうに眺めていたが、助けようともしない。「いや、ちょっとね」

額に汗をかいて、ふうふう荒い息を吐き、小太りの老人は、苦しそうにしていた。「よくあることなんで」

御厨女史が背中をさする。朴と金の韓国人カッブルも、不安そうに覗き込む。

老人は、むりやり笑顔を作り、何とか持ち直して立ち上がった。「こういうところは、駄目だな、あたししゃ」

ハンチングの老人は、皆から途中で帰るよう促されたものの、駄々っ子のように頑として聞かなかった。意地になっているのか、心臓の持病から来るいつもの発作だという。

多少迷惑ではあったものの、参加続行ということになった。

《下北沢路地裏ツアー》の一行は、地下洞窟のような極彩色ガレージを抜け、エレベーターに乗った。

何階か上昇し、ドアが開く。すると、何の変哲もない単調なビル内の通路に出た。窓のない長い長い廊下を過ぎ、

の歴史であり、象徴そのものではないだろうか。

「行政と電鉄は、これを撤廃して、おそらく巨大な駅ビルを建てるでしょう。その中には、ショッピングモールあり、映画館やシアターあり、コンサートホールや美術ギャラリーまで、あるかも知れない。コラ、市民ども。お前ら、そんなに文化が欲しいなら、くれてやるってね」と画伯。

「ヴィトン、ブルガリ、高級ブランドも入るかもね」皮肉っぽく、御厨女史が加えた。

「アコムや武富士、ドコモやマクドナルド。その他、駅前定番ショッピングもな」とマスター。

牧田画伯は、緑色のツアーの旗を、カチンと突き立てるようにして、語気を強めた。

「つまり、本日、私たちが歩いてきた万華鏡のような風景は、あとかたもなく、煙のように、消える。そして大手資本は、文化の街、若者の街というブランドだけをまんまと頂戴して、温もりのある地域のコミュニティを分断させ、手作りの感触を抹殺するでしょう」

「そしてきつと、ショッピングモールの中に、昭和のレトロな街を、わざとらしく再現してみせるんだわよ」と御厨女史。

ツアー一行の目前には、ぼんやりと霞んだ晩春の空が広がっている。

駅構内と古いマーケットを仕切る薄い扉を、緑に繁った

鶯が這い廻っている。強い陽射しを受け、濃緑の葉が照り輝く。駅北口の細い道は、人混みで混雑していた。

「まあね、ワタクシ、思いまするに」と澤田が口を開いた。「最小のスペースから、最大の利潤を吸い上げるといふ哲学だけが、都市や町を作っているわけじゃない」と

「いいこというね。インテリのわりには」マスターが突っ込む。

「いや、例えば銀座や六本木みたいに、客単価が何万円、何十万円ブランド店だけにする必要はないんですよ。不健全でしょ、そんなの。世の中のすべてが、投資対効果の考えだけで、いいのかってこと」

「だからさ、千円二千円の小銭商売をやる『ロシナンテ』みたいなしよばい店だって、世間には必要なんだよ」

新宿方面から、電車がゆっくりと入ってきた。プラットホームの人影が移動してゆく。

「役人の頭の中の青写真は、都心近くの利益率の悪い町を、根こそぎ平準化しようという魂胆なのよ。そういう頭の固い基準を、グローバル・スタンダードならぬ、トウキョウ・スタンダードにして、定規のように当てはめてるだけ。いまにそこらじゅうが均一に、ミニ町田、ミニ渋谷になってしまおうわ。人間を、消費者としてしか見てないのよ」

御厨女史は、人差し指で窓ガラスをなぞりながら、悲しそうにいった。

まらない呑屋のマスターは、浮かぬ顔だった。「聞いたところによると、二子玉川、新築マンションに空きが目立ってるんだってね」

「再開発と称して、膨大な金をつぎ込んでおきながら、空洞化している。生け簀の中を整理して巨大にすれば、魚が育つ、というもんじゃありませんよ」と澤田。「同じ失敗を、シモキタで繰り返すかよ」

「でもさーア一体どこが、投資対効果よねえ。ぜんぜん計算も狂ってるじゃないの。血税の大量出血」御厨女史が、吐き捨てるようにいった。

「やっぱり町は、緑の藻があつて、岩陰があつて、魚が隠れ潜む穴があつてこそ、ですよ」

いつのまにか羽木はいっぱしの反対派になりおおせていた。我ながら恥ぢかしい。

「そうそう。それでこそ、卵も孵化する。魚たちも回遊する」と澤田。

卵の孵化。藻のゆれる水槽――。

路地のあちこちに、陽を透かした透明なオレンジ色の卵が無数に生みつけられ、次第に育つて孵化してゆく美しい幻を、ぼんやりと見たような気がした。

「さてと、疲れしましたな」牧田画伯が、一同を見渡した。

「あんなじゃないが、老人に長旅はこたえるね。そろそろ、お茶にしますか」

すぐ下の道を、黒い革ジャン姿の数人の若者たちが、喋りながら通り過ぎてゆく。背中に背負っているのは、ギターだろうか。

「でも、こんなごちゃごちゃした街だからこそ、面白い役者や、個性的なミュージシャンが育ってきたわけですよ」と羽木務。

「そういうこと。巨大なコンクリートの谷間からは、何も生まれんですよ」と澤田。「ストレスと疎外感を溜め込んだ凶暴な犯罪者、以外はね。それに、利益主義のコンセプトで再開発した二子玉川だって、いまや人が来なくなっている。おいしい思いをしたのは、土建屋と政治家と天下り官僚だけ。そういう利益誘導ではなくて、才能をインキユベートする町だって、あつていい」

「な、なんだって。インキユ？」と、マスターが聞き返す。「インキユベーションというのは、孵化のことです。つまり、アートや創造的才能を育て、孵化させる保育器、孵化器。もしくは揺り籠ね。それがいまの下北沢の役割じゃありませんか」塾教師は、目を伏せたまま、後ろ手をして、にんまりと微笑んだ。

「……才能を、孵化させる町か」羽木は頷いた。

ギターを背負った革ジャン姿の若者たちは、駅の北口階段へと消えていった。

「まあ、そだな」頭でっかちの塾教師をやり込めたくて太りの江戸っ子は、ぎこちない笑顔を返した。羽木は二人の表情を見て、何となく嬉しくなった。

5

画家は、ステッキの老人に振り向いて微笑した。

さつきから居心地悪そうに、黙って会話を聞いていた小太りの江戸っ子は、ぎこちない笑顔を返した。羽木は二人の表情を見て、何となく嬉しくなった。

路地から路地へ。壁の間を通り、その奥の細道へ――。どこをどう巡ったのか、羽木務は見当がつかなくなってきた。疲れたといっておきながら、牧田画伯は他のメンバーなど一向に介しないような表情で、すたすたと歩き続けた。

虚無僧のように、愛想がない。落書きだらけの壁。黒蛇の巣のように絡まり合った雑居ビルの配線。狭い通路の青空。似たような風景が、何度も現れた。何だか半径数十メートルの迷路のような区域を廻っているような錯覚に陥ってしまう。

「ではここで、休憩します」
そういって、牧田画伯が指差したのは、小さな細い路地の行き止まりだった。

前方には、鶯の這いまわる陽当たりのよい壁が見える。

一行が進んでゆくと、かすかに小鳥の啼く声が聞こえた。

そして、緑色の鶯の葉に蔽われた、古びた木の看板が見えた。

「閑話茶館」

緑の壁面の手前まで来ると、右手が急に明るく開けて、不思議な空間が広がっていた。それはがらんとした簡素な中庭だった。

小さな池の奥に藤棚があり、紫色の藤の花がひっそりと垂れている。色褪せた木の露台があり、簡素なテーブルが春の陽を受けて並んでいた。露台には、餡色の大きなどっしりとした壺がある。奥は、店のような構えとなっており、薄暗い中にカウンターのようなのが見えた。

とりわけ印象的なのは、軒先や木の枝のあちこちに吊り下げられている大小様々な鳥籠であった。青紫や黄緑色の羽をした小鳥たちが、竹籬を編んだ繊細な工芸品のような籠の中で、美しい声で啼いている。その声が何ともいえない華やきを与えていた。

晩春の昼下りの日射しを受けて、池面はなめし草のような鈍い光を帯びて、ゆるやかにゆらめいている。

光は白い漆喰壁に、けだるく照り返している。水草の藻がときおり揺れるのは、水の中の鯉がつつくためだろうか。水面では、大小のアメンボが、細い脚を張ってじっとしていた。まるで時間が止まったような空間であった。下北沢にこんな所があるとは、羽木務も聞いたことがない。

藤椅子に横になっていた人物が、顔に被せていた本を置

き、むっくりと体を起こした。

「おお、ご到着ですか。おひさしぶりです、牧田先生」丸顔の小柄な老人は、にこやかな笑いを浮かべて、一同に挨拶した。

「お元気ですか、候さん。ご無沙汰してます」画家は、キャップをとって挨拶した。「この連中に、お茶を飲ませてやってください」

「かしこまりました。皆様、いらっしやいませ。ただ今、飲茶の用意をさせます」

候老人は身を屈め、歓迎するように手を差し示す。

「さ、さ。どこにでも好きなように、座ってください。奥にも椅子がありますから」

老人は、肌の色つやが良く、まるで大きな満月のような黄色い顔だった。

彼が「アイリン！」といって、ぱちんと両手を打つと、すらりとした若い女性が、はにかむようにカウンターに現れた。薄くて白い清楚なチャイナ服姿だ。

しばらくすると、中国茶の道具一式をそれぞれのテーブルに設えた。そしてかすかに笑みを浮かべつつ、しなやかな手つきでお茶を淹れ始めた。

「候さんは台湾の方でね、日本や中国を行ったり来たりして、貿易のご商売をされています」と牧田画伯。

枝垂れ柳の木が、陽光を受けてゆるやかなS字を描き、

水面すれすれに数本の枝を垂らしている。

細い鎖のような葉を透かして、金緑色の光がにじむ。

「台北や上海にも幾つか家があるという、大変なお金持ちです。私も数年前、その豪邸の一つに泊まらせてもらったことがあります。断崖絶壁の上から遙か東シナ海が見渡せるという、何とも広大な邸宅です。東京にもこうして時々やってくる。この茶館は、開いている時と、閉じている時があり、今日お茶を飲める君たちは、とても運がいい」

「徳のある方だけ、私のお茶は飲むことができます」

候老人は狡猾そうに、にっと笑った。

「いまこの娘が淹れているのは、阿里山にある私の茶畑のお茶ですね。標高三千メートルに近い村です。昼と夜の寒暖の差が大きいので、美味しいお茶が採れる。一煎、二煎、三煎……。どうぞ、何杯でも何杯でも、ゆっくりと、心ゆくまで楽しんでください」

藤棚に吊された籠のカナリアが、素速く向きを変え、露台の影模様を変化させていた。

「ほんとうに、素晴らしいお庭ですね」女性区議が、感に堪えたように辺りを見回す。「このお店で、私の講演会とか、開けるかしら」

「残念ながら」と候老人は、悲しそうな顔をした。「ここは、無駄話、閑話、役に立たない話だけ、オーケーね。お

金になること、政治の話、企業のやり口、世の中に有用なこと、そういうことを話すと、この場所は煙のように、消えてしまいます。ここは、無用の場所、無為の庭」黄色い丸顔をした老人は、ふっと、謎のような笑みを浮かべた。

羽木務は、御厨女史やロシナンテのマスターと三人で、池に近い木のテーブルを囲んでいた。

「あのアイリンちゃんとかいう素敵な子、何者かしらね。孫でもないでしょう？」

御厨女史は、照れ隠しのように話題を換えて、羽木にささやいた。

「さあ、向こうから連れてきたのかなあ。それとも留学生なのかな」

「ひよっとして、若すぎる愛人か。あの台湾美人」と、ロシナンテのマスター。「柳腰というのは、ああいうのをいうのかねえ。隅に置けんぞ、あの爺さん」

牧田画伯は、目を細めてお茶を啜りつつ、無言で彼らのやりとりを楽しんでいる。やがて気分よさそうに、パイプを取り出し、火を点けた。

他のメンバーには相手にされないかと悟ったハンチングの老人は、韓国人カップルをつかまえて、藤棚の下のテーブルで話し込んでいた。ステッキを斜めに立てかけ、身を乗り出すようにしている。

二人のソウルっ子は、多少迷惑そうな顔をしていたが、儒教的な律儀さからか、生真面目に老人につきあっていた。

白ナマズは、相変わらず一人無言で、携帯電話のカメラで風景を撮影している。面白くも何ともないという、無表情で事務的な顔であった。目だけは刺すように鋭い。

しかし時折、牧田画伯や、候老人にもカメラを向けているのを、羽木は見逃さなかった。

このアジア的とも西洋風ともつかない奇妙な中庭は、ほぼ正方形で、四方が他の建物の背中になっているらしく、灰色のコンクリートの壁や、びっしりと蔦の被う緑の壁面、古い赤レンガの壁で囲まれていた。西側の壁際には、小さな赤い薔薇や、さんざしの白い花が微風に吹かれていた。

ふと見ると、どこから吹かれてきたのか、黄色い蝶が二匹、もつれ合うように戯れている。光の中で、くるくると回り、金のリングのように見える。さつき教会の庭にいたのと同じ黄色い蝶々のようだ。まるでどこか見えない近道があつて、こちらに飛んできたようにも思われた。

「あの、質問していいですか」羽木務は、茶碗を置いた。

「どうぞどうぞ」

「ここも、幹線道路、五十四号線の工事によつて、なくなつてしまふのでしょうか」

「そうです。そうです。皆様が、このような場所を欲しな

戯っぽくボンと叩いて、呵々大笑した。

池面にたゆたう光に照らされながら、まるで長年の同志のような二人の老人は、椅子にゆつたりと座つたまま、しばらくの間、愉快そうに無言で微笑んでいた。

再び優雅なアイリンが、背筋をのばした品の良い歩き方で、それぞれのテーブルに飲茶の菓子を運んできた。

室内ではパロック音楽が低くかかっている。雑草や苔は伸び放題といった有様だったが、沈んだ色彩が程良く調和している。忘れられた庭園のような、それについて荒れたところのない閑雅な空間であつた。

一同は、時間の静止したような庭の中で、お茶を何杯も啜り、ゆらめくような池の光に目を細め、幸福な気持ちになつた。太陽光線の中に虹色の粒子がまじっているような、静謐な午後のひとときであつた。濃いオリブ色を帯びた池が、鯉の動きとともに、ゆつたりと光を放つ。

ここにいつの日か、パワーシャベルやクレーンが乗り込んで来るなど、まるで考えられなかった。

「そろそろ、上へと、参りましょうか」と、候老人。

「今日は、いいのではないですか」なぜか煙たそうな顔をする牧田画伯。

「いやいや、先生もぜひ」

二人の間でそんなやりとりがあり、画伯は苦笑いした。

「私は、ここでパイプを燻らせていますよ」

ければ、それは当然、なくなりませう」

「ええっ？ では、望めば、存続するということですか」

「それが、宇宙の摂理です」

候老人は、涼しげにいつて目を細めた。

「しかしね。いざという時は、この庭全体を池ごと、そこにある壺に吸い取つて、私は羽化登仙。我眉山にでも逃げよう」

『閑話茶店』の老主人は、腹を抱えて、ホッホッホと笑つた。

水面のゆらめく光を受け、鉛色に輝いている大壺を、誰もがあつけにとられて注視した。

「なんだかまるで、老子みたいな人ですねえ」

感銘したように、澤田がいった。

「ここは、下北沢の風水の中心ね。微妙な諸力が、ちょうどその辺で」と、老人は柳の脇の中空を、芝居がかった表情で、ゆつくりと人差し指で示した。「組み合わせられている。ここで皆様が意識したことが、周囲の環境や未来を、大きく変えてしまう」

「ふふふ。あのね、君たち。あまり候さんのいうことをまともにとると、とんでもないことになるぞ。ほどほどにしといた方がいい。この人、台湾の導士、魔法使いだから」

にやにや笑いながら、牧田画伯がいった。

すると候老人は、ゆるゆると手を伸ばし、画家の膝を悪

「では、先生以外の皆様……ご案内いたします」

候老人が手招きをするので、ツアー一行は奥の室内に上がった。

床が黒光りするような、しんとした廊下の右側、観葉植物の背後に階段が見える。

二、三段進むと、候老人は、薄暗い階段の途中で、また意味ありげに、おいでおいでをする。その目つきは、いささか不気味な光を帯びている。

羽木務やマスターが階段を上ると、立派な額に入った油絵が壁に飾られていた。

それは、木陰の下で食事を嗜む人々の姿であつた。

木洩れ日が、男女の肩に黄色や紫色の淡い斑に射している。閑静な住宅街の中のフレンチ・レストラン。

これはどこかで見たような風景だ。

そのすぐ斜め上には、『下北沢スズナリ劇場』とあつた。十号くらいだろうか。曇天の下に小劇場の特徴的な建物が、筆の跡もあらわな荒いタッチで描かれていた。

その隣には、劇場周辺の猥雑な飲屋街を描いた作品。ユトリロやプラマンク、佐伯祐三など、エコール・ド・パリの画家たちの懐かしい画風に似ていた。さらに階段を昇ると、金縁の豪華額に『カトリック世田谷教会』の白い建物。

その隣に『洞窟の聖母マリア』。

羽木務は、ここで目が、釘付けになった。

いつか破壊されることを知っているあの白い聖母。両手を祈りの形にして、天を仰ぐマリア。まさに受難の聖母ともいうべき、美しい一枚だった。

彼はほとんど宗教画を前にしたかのような強い感銘を覚えた。

「ひょっとして、牧田先生の絵ですか、この作品」

羽木務はいった。

「その通り。巨匠は照れて、こちらにいらっしやらない」

店主は、静かに微笑んだ。

「そうか。今日、歩いてきたところが、ぜんぶ絵に描かれているわけね」

美人区議が、口元を押さえるようにして、叫んだ。

「私は、牧田先生のコレクターね。これまでに、パリの街角の絵を含めて、三十点は持っている。代官山や表参道の同潤会アパートを描いた絵も、傑作です。失われた風景をいとおしむ気持ち、よく出ています。あのセンセイ死ねば、この作品、ゼーんぶ値があがるよ」

満月のような顔をした候老人は、破顔一笑した。

『駅前マーケット風景・夏』『ピリヤード場にて』『レディ・ジェーン之夜更け』『夕暮れの代沢三差路』『JAZZ喫茶マサコ』『露崎館』『アンティーク・ショップ』『深夜のマザー』『茶沢通りにて』『秋のプロテスタント教会』。

うな気持だった。

「まあ、こんなに路地裏がいっぱい。じつに不思議な迷路ねえ、この街は。あちこちの水路で、藻や岩に隠れながら、色とりどりのお魚たちが遊んでいるようだよ」

欄干に両手をつき、高揚した御厨女史が、歌うようにいった。

小田急線が低い憂鬱な音を響かせて、滑るように走行している。

遠方では、夕日を受けたガラス窓が、金の板のように反射している。羽木は、目の前に広がる風景が、なぜか遠い記憶のように思われた。迷路のように巡る路地という路地に、林檎酒のような夕陽が射して、いたるところに金色の蜜の流れが輝いているようであった。

《路地裏ツアー》の一行は、まるで龍宮城か桃源郷から戻ったような奇妙な虚脱感に浸っていた。候老人とアイリンが、手を振りながらこちらを見ていたのは覚えてる。しかしあの庭からどの路地を通って、ここまで来たのかわからない。皆はただ、牧田画伯の後をついてきただけだった。もう一度、『閑話茶館』を訪れようとしても難しいかも知れない。

たまたまあの場所に出くわしても、空地の中にあの趣のある鉛色の壺が一個ごろりと落ちていて、なんて

下北沢の特徴ある建物や、街並みの絵画作品が、白い壁一面に飾られている。かつて存在していた建物や、これから壊されるかも知れない建物。街の匂いや歴史までが、いづくしむような筆遣いで描き上げられていた。

一同は候老人に促され、二階の部屋を横目に、さらに階段を上がってゆく。上の階からさらに上の階へ。それはまるで、天空に向かって縦に作られた路地のようでもあった。

「ここが、わが閑話茶館の最上階です」

ツアー一行は、楼閣のような建物の欄干に出た。

——目の前には、東京という都市の天空が広がっていた。遠く新宿の高層ビル群が、蜃気楼のように青く霞んでいる。

西の空いっぱい、赤あかと夕陽が射して、赤紫色の雲が浮かんでいる。街の屋根屋根は、金色の光を帯びたおびただしい鱗片のように染まっていた。小さな無数の路地が見える。垣根や、軒や、看板や、洗濯物。古着屋のディスプレイは、まるで極彩色の花壇のようだ。そぞろ歩きをしている若者たち。彼らの長い影。自転車。バイク。店の呼び込みをしている店員たち。シヨウウインドウの中のハイヒールや、エナメルバッグや、帽子の類。

これは錯覚なのだろうか、三階建ての建物にしては異様に高い気がする。まるで雲の上にいるような、夢の中のような

ことにもなりかねない。

歩き疲れた彼らは、ビールでも飲んで、簡単な打ち上げをしようという話になった。

仕事が控えている羽木務は、申し訳なきようにマスターに頭を下げた。彼としては、閉じ籠もったままパソコンに向かう気詰まりから、何とか解放されたかっただけであった。スケジュール通りならば、今夜は徹夜になるかも知れない。

「残念だなあ、みんなにウチに来てもらって、一杯やろうと思っただけに」

「いえ、また今度、そういう機会もあると思いますので」

「ロシナンテには、あたしもしょっちゅうお邪魔するの。この人、カクテルの腕前、最高なのよ。ぜひ、いらっしやいよ」と御厨女史。

「そうですね。場所は先程教えてもらったので、すぐわかると思います」

「あ、そうだ。大事なこと忘れてたわ」女性区議会議員は、そそくさと名刺とパンフレットを取り出して、羽木に渡した。「次の選挙、よろしくね」

大きな顔写真入りの派手なパンフレットだった。

「そのうち、私、都議に打って出るかも。やっぱり無力よ、区議会議員じゃ」

「代議士だろ、本音のところは」と、マスター。

「まあ、厭なヒトねえ」御厨女史は、店主のたくましい胸板の脇を、指でつねった。
羽木務がパンフレットを読んでいると、不意に肩をつつかれた。

「最後に一枚、撮ってもらえますか」

朴と金の二人連れが、申し訳なきようにデジカメを渡してきた。またしても二人は、いきなりぎゅつと頬を寄せ合いい、笑顔でVサインを作った。

「はい、チーズ！」下北沢駅を背景に、二枚撮った。

「あの素敵な庭で、撮りたかったよ。でも、あのお爺さん離れなかったですよ。日本の年寄り、しつこいね」女の方が、不服そうに口を尖らせたので、羽木は笑い出した。

彼氏の方は、慌てて「シーイッ」と口に指を当てた。

ずんぐりとしたハンチングの老人は、誰かが声をかけてくれるのを、それとなく待っているようでもあった。

羽木は、最後に牧田画伯に挨拶した。

そして白ナマズの方を見て、「あの人、ずっとツアーのメンバーを撮ってましたよ」と小声で伝えた。

白ナマズは、やや冷ややかな距離を置き、手持ちぶさたのような顔つきで、空を見上げ、見下ろし、やはり無言のままで行んでいた。

老画伯は「知ってます」といった。

「スパイだよ、あの男。市民運動を監視している。妙なと

その横顔は、表情に乏しい、冷酷な尼僧のようだった。

「——そうです。ええ。合計八名参加。リーダーは、牧田徹吾という例の絵描きの爺さん。ミクリヤ？ ええ、今回は区議も来ています。すいません、そこはまだ不明です。その辺は調査中ですので。はい、了解。まもなくそっちに戻ります」

羽木務は、相手に気づかれぬように、反対側を向き、そのままバッグから文庫本を取り出して、立ち読みするふりをした。

列車が滑り込み、構内が暗くなった。ドアが開き、目つき鋭い白ナマズが、大股で乗り込んだ。

羽木は一電遅らせることにした。

（「カブリチオ」31号より転載）



草原克芳
くさはら かつよし

1956年宇都宮市生まれ
中央大学文学部中退
広告代理店、制作プロダクション、通販会社に勤務
文芸同人誌『カブリチオ』編集発行
世田谷文学賞受賞（第13回「ドラキュラのいる客間」第14回「夏草の酒」）
作品に『プラハの人形遣い』『建築家の檻』『アスペラトゥス雲』『庭師と四人の女たち』『人間ポンプの女』などがある
評論『地下生活者としての夏目漱石』『砂の女』と『箱男』他 インターネットではGrasshouseの名で電子書籍を公開

佐山広平
詩集
水の流れに
文芸思潮現代詩人賞に輝く詩人の
第三詩集
みずみずしい言葉
光る感性のきらめき
真の詩の言葉がここに結晶
アジア文化社
1500円+税
御注文はアジア文化社まで

ところでメモばかりしてるし。普通の参加者が反応しないよ
うなところでね。我々一人一人の顔写真も撮っている」
「やっぱ。そうだろうと思ってました」
羽木は唾を飲んだ。

「背後は、どっちですかね。デベロッパか、電鉄か、行政
隣で腕を組んで聞き耳を立てていた澤田が、目配せをし
た。」

「だいたいの見当は、ついている」

牧田画伯は、そういつてから、一日の用を終えた緑色の
旗を、ゆつくりと巻き付けた。

その落ち着きようは、夕暮れにおもむろに槍を手仕舞う
古武士のような風格があった。

羽木務は、駅前でバー『ロシナンテ』に流れる一行と別
れた。慌ただしい駅前雑踏は、次第に青い夕闇に沈んで
いった。

小田急線の喜多見方面に向かおうとして、駅のプラット
ホームに立つと、長身の白ナマズが、階段脇の人混みの中
にいるのに気がついた。

羽木務はぎゅつと、相手に気づかれないことを確
かめた。白ナマズは、携帯電話で話中だった。電車の出
入りの音がうるさいためか、片耳を手で覆っている。

小説と評論

カプリチオ

東京都

奇想曲・狂想曲

あやしくも、物狂おしい二十年

今年で二十周年を迎え、秋に発行する雑誌で38号を迎える。現在会員五〇人。「カプリチオ」の発行は不定期で、年二冊から三冊である。旧態依然としたこれまでの同人誌からの脱皮を図って、「リトルマガジン」的に特集に力を注いでいる。

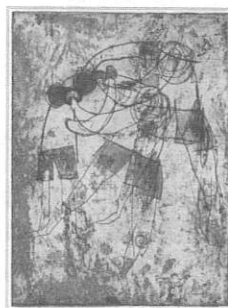
古いところでは「タルホ感覚嗜好症」と題した稲垣足穂特集。「三島由紀夫と戦後アプレゲールの悪童たち」のタイトルで三島特集。近年では「私小説は誰を刺すか?」、「古本屋のアルケオロジ」、「新宿ゴールデン街が見ていた戦後日本」、昨年は、東北大震災を意識した「いまだからこそ再会したい夏目漱石」の企画を実現した。歴史探訪と称して、佐倉惣五郎や、「大菩薩峠」の裏宿七兵衛などを扱った。短編・エッセイ特集も、不定期に企画してきた。小説・評論は、しばしば『図書新聞』、『週刊読書人』などでも取り上げていただく。かつての『文学界』では、何度も掲載作品が論評されたものだが、その同人誌評コーナーもいまはなくなってしまったのは、なんとも淋しいも



カプリチオ例会でのスナップ

小説と評論 カプリチオ

2009年冬 第31号



「下北沢路地裏ツアー」
草原克芳
「開いている扉」
萩 悦子

のである。出発当時は、比較的若いメンバーと自負していたのが、この二十年の間、多少の新陳代謝をしながらも、腰を据えて書いている書き手は、すでに若いとはいえなくなった。もちろん、精神だけは依然として若いつもりであるし、二十代三十代の書き手も歓迎である。

雑誌発送は、時間の許す者が随時集まり、手作業で一冊一冊、丹念に封筒に入れ、宅配便のシールを貼っている。合評会はいまのところ、JR田町駅近辺の会場で、出席者数は毎回二〇人前後。これはかなり白熱する。中には「合評会は、格闘技」などと称する不謹慎な者もあり、以前と比べて理論家が多くなった。一次会がそんな調子だから、アルコール混じりの二次会がどんなことになるかは、ご想

像に任せる。一方では、世の中全体に、小説をじっくり書こう、文学の香気あふれる密度高い作品を書こうという、いい意味での「小説職人」が少なくなったようにも思えるが、どうであろうか。

雑誌名の「カプリチオ」は、奇想曲・狂想曲という意味のイタリア語 capriccio で、十七世紀の音楽用語である。『悪魔のトリル』で有名な天才バイオリニストのバガニニの曲にも、斬新な奇想曲がある。最近「狂」の字が差別語だということで、音楽業界でも「狂想曲」という言葉は避けるらしい。しかし、こと文学の世界ぐらいいは、人間の内なる「狂」を、作品という形で表出すべきではないだろうか。「あやしうこそものぐるほしけれ」(『徒然草』)の境地を排せず、動脈硬化した日常を別のまなざしで凝視してこそ、精神の健康は保たれるはずである。雑誌「カプリチオ」は、内なる思いの、怒り狂いのたけを込めた多様な小説が百花繚乱の妖しい花園でありたいと願っている。

(編集委員/谷口葉子)

小説と評論

カプリチオ

二都文学の会

TEL56・0044

東京都世田谷区赤堤1・17・15・101 草原克芳

●連絡先・事務局 〒1150・0022

東京都渋谷区恵比寿南1・21・8

☎03・3713・7962 塚田吉昭

鏡が湖

うみ

市尾卓

電車は、樹林の繁茂した崖の露わな山蔭に停まっていた。車窓の一方の側は、田んぼの陽だまりが望める駅舎に見えた。その小さな駅舎の改札にも、ホームにも人の影は見えない。無人の駅らしく降りる人もなく、乗ってくる人もいない。電車は停まったままだが、ホームや駅舎の向こうは田んぼの荒れた黒土が、延々と続いている。広々した田んぼに陽が差して遠くに連山が見渡せる。

「いったい、ここは、どこか、なんというところなのか、ホームのあちこちに駅の名を探してみた。地名にこだわりのを不思議に覚えながら探していると、「鏡が湖」(かがみがうみと振り仮名がしてある)の看板がホームに見えた。そこに名所案内の説明があつて「日本夕陽百選」とある。

絶景の夕日が見える名所のような。この湖には、背後の山に鶯が棲んでいて、湖上にかぶ夕陽は、格別の美しさだと誌されている。古来、落陽の美しさが讃えられたところとして名をなしているのだろう。

電車は、そこで停まったまま動かないようだった。電車が、動こうとしないと思つてるとき、私は夢をみていたのに気がついた……。

夢というのは、こうして書き留められたときには、もう夢でないものになつていく。それにしても、なぜ、こんな湖畔の小駅に停車中の車内にいる夢をみたのか……。

実は、「鏡が湖」の所在は、むかし、宏子に聞かされて

知つたのだが、あのころ、この湖が、日本の夕陽百選のひとつだ、などというのに、だれも思いおよばなかつただろう。

私は、宏子から聞いたこの湖を想いだして、最近訪ねたのである。遠い記憶にみちびかれるように訪ねてみたが、そのおりの湖畔の小駅らしい夢のように訪ねてみたが、その記憶が、よほど忘れられないのだろうか。

郷里の子ども時分の友人で、在京の医学生であつた原和夫の下宿を訪ねて、この「鏡が湖」の話聞いたのは、ずいぶんむかしのことである。

そのとき、原の下宿を訪ねるのは、二度目だったような気がする。そこで徳島で医院を継ぐ原の長兄の嫁の宏子に、思いがけず出会つたから愕いた。木造アパートのドアをノックすると、容色じろの着物姿の似あう宏子が、下宿の狭い部屋に膝を崩して原のジャケットを編んでいた。前触れもなく訪ねた私に、宏子は、ちよつと愕いたけいを見せ、私も、さすがにそこに宏子がいるのにびつくりした。そんな宏子は、

——和夫さんは、いま、外出しておりますの。

と、持ち前の男好きのする容色をたたえて挨拶をかわした。狭い田舎町のこと、まったく知らない間柄でもないから、私は、予期しない彼女との出会いに、あれこれと話し

はじめた。宏子は、婚家を捨てて義弟の原を追つて上京して間もないころのようであつた。狭い一間では、食器をとるにも窮屈そうに宏子は腰をひねって応接しなければならぬ。宏子は、いそいそと部屋をでると、共同調理場へ往つたりもどつたりした。

間もなく、和夫が帰つて、テーブルをかこんだときを私は、いまでも忘れていない。

宏子が、献立をならべてテーブルで話しはじめた。

——廊下でね、いま、あの方が出かけていくのに出遭つたのよ……。

宏子は、すずしげな眼ばたきをして、原に言いかけた。

原は、それには応えようとせず、箸を動かしている。

——ねえ、聞いているの？

——うん……。

そう応えて、黙つている原を宏子は媚びをふくんだ視線でみやつている。なんとない安らいだけはいが、二人の間に流れていた。和夫は、宏子の話に関心をしめさないが、兄嫁だった年上の宏子の、満ち足りた大様さがあたりに漂つている。宏子は黙りこんでいる原にかわつて私にむかつて喋りはじめた。

——わたし、ここへきて、やっぱり東京だなあつて思つたの。

宏子が、さも愕いたように話を切りだした。

下宿の隣室の男は、夜ごと、硬貨の山を畳にひろげ、うるさい音をたてて、それを算^たえている。そして、男は、昼過ぎになると、傷病兵の白衣に身を装い、片手に茶いろの皮革の保護具を着けて、松葉杖でびっこを引きながら、出かけていくという。大戦後、山手線の車内や駅頭で、しばしばみかけた、復員傷病兵に身をやつして日を送る男が隣室にいて夜陰にまぎれて収穫の高を畳にひろげて騒がせているというのだ。たまたま、部屋のドアが開いて、男が保護具を傍らに、布袋から硬貨を畳にひろげているのを宏子がみかけたらしい。

——いまま、顔を合わせたけれど、なんだか、ごつごつした怖い感じの人の……。

宏子は、言いながら着物の袖をからげて食器を原に差し込んだ。宏子の手の甲の、ぼつてりした膨らみと繊やかな指を、私は眩しげに見やった。

原は、隣室の男の話にはさほど興もおこらないように見えた。疑うことを知らないような宏子には、男が隣にいるのをかなり負担に感じるらしい。しかし、原が、宏子ほどには隣室の男に関心をみせようとせず、聞き流していたのが、いかにも、彼らしい反応だったような気がする……。

私は、ときおり、原の下宿を訪ねては、物のない頃の、在り合わせの宏子の手料理を馳走になったりした。彼女の周りには、乏しいながらも原と暮らしはじめた満ち足りた

華やきがただよっていた。

このころ、原は郷里から学資の仕送りも途絶えて医学をあきらめ、フリーで映画の仕事をはじめていた。コマースヤル、教育や広報番組の制作と忙しく、ロケにでると帰らない日もあるようだった。彼は、郷里や友人との縁も断ち、寄る辺ない慌しさに安らぎをもとめているふしにも見えた。

そんなある日、私は、久しぶりに原を訪ねたことがあった。が、その夜、原は、いつまで待っても帰らなかつた。彼は、変わらずに忙しい日々を過ごしているようだった。

宏子は、原がロケ先にいるのを知っているから、さほど気にもかけていないように見えた。彼女は、原との暮らしぶりや帰郷した徳島の話などをして聞かせた。徳島へは、実家の荷物の整理などで帰ったようだ。中学生のころ、年上の女学校の生徒だった彼女は、顔見知りでもあったから、つい話も弾んだ。

徳島の話をして、これからの暮らし向きを樂しげに喋った彼女が、不意にワンピースの裾をおさえて立ちあがった。彼女が、狭い一間の頭上の棚に手をのばし、一葉の写真を取りだして見せた。

——ねっ、これっ、この前、私たちで行った湖なのよ。

彼女は、うれしそうな笑みを浮かべて、湖畔に佇むっ

ショットの写真を私の手のうえにおいた。

——これ……私たちの新婚旅行っていうのかな……。

——どこですか。ここは……。

——ここは、ねえ……鏡が湖^{かがうみ}っていうの。

宏子が、思い入れ強く、とてもいいところなの、と繰り返かえした。

——あんまりよかったせいかしら、私……ちよつとしたアクリデントをおこしちゃったのね……。

——そういって、彼女は遠くをみるような眼遣いで顔をあげた。

——原も忙しいけど、きてよかつたって言うてくれたの。無理をして時間をかけてきただけのことにはあつた……。

湖は、国鉄を私鉄に乗り換えて、夕暮れに着いた、寂しいところだったと言う。駅裏は、険阻な山塊の山蔭になって、駅に着くと、辺りの薄暗さは、なんとも言えず心細く寂しかったらしい。

湖のほとりのちいさな宿に泊まり、彼女は、朝早く原が寝ている隙に起きだして湖畔にいった。独りでほとりを歩いたようだ。夜明けの湖は、なめらかな水を湛えて、湖面は鎮まりかえっていた。水辺に佇むと、水底の小石が、陽差しの箭をきらめかせて透けて見える。底砂の透明な粒子が映えているようだった、と言う。そして、彼女は、つづ

けた……。

——水底がきれいだから見惚れていたら、ふと翳りが射して湖面のうえをなにかが掠めたの……。頭上に風をきる羽音がして、愕いてふりあおぐと湖を鳥影が遠ざかっていくの……。

宏子は、そういつてひと息つき、私の手のうえの写真を見きこんだ。写真のなかのふたりの背後には、湖畔の水辺が広がっている。

——この写真はね、宿を離れる日に湖畔で写したのだけ……。

——そう言うて写真を見せる宏子は、傍らで額の生え際に汗のしずくを浮かべている。

——あの朝ねえ、水底に鳥の翳りが映ると、その翳りが、ずつと消えないから妙な気がしたのよ。

宏子は、そう言いながら、ひと息ついて写真を私の手からテーブルのうえにおいた。急きこむように喋った宏子はワンピースの胸元をおおきく弾ませていた。原の帰らない、蒸し暑い夜のひととき、彼女の話は、終わろうとしない。

原がいたら、宏子が鏡が湖でのことをあれほど詳しく話したかどうか、わからない。原は、そういう話をくたくだ聞かせる男ではなかつた。

湖畔の水底に暗い翳りをみていた宏子は、そのとき、眼の前がぐらぐら動きはじめるのに気づいたらしい。彼女

は、思わずその場にうずくまって屈みこんだ。彼女は何か起こったのか、よく解からなかったようだ。宿では、この朝、湖畔に倒れていた彼女を行方知らずとして大騒ぎになったらしい。

——突然、気が遠くなつて、湖畔にしゃがみこみ、そのまま横たわつたの……。貧血のようだったけれど、ひどく気持ちよく意識が遠のいていくようだったの。なにかうっとりするような気分分で眼の前が遠くなつて……。

宏子は、臆面もなく、そういつて旅先の不意の出来事を喋つたのであつた。

原の留守にことよせて、彼女にしてみれば、一期の旅の想い出を思う存分に聞かせたかつたのだろう。

当時、原が、映画の仕事に忙しく過ごしているのは、人伝に聞いていた。彼は頼まれれば、仕事を選ぶことなく引き受けていたようだった。兄嫁だった宏子と同居をはじめた原は、郷里に背いて都塵にまみれ、知己をしりぞけて忙しく過ごしているようだった。

鏡が湖の話聞いて、半年ほど経つた正月明けのある日、私は、宏子の思いがけない手紙を受け取つた。そして、差出人の宏子の住所が徳島に変わつてゐるのに愕いた。手紙は、かなりの長文でつぎのように誌されていた。

宏子の手紙は、はじめて見る丸っこい手蹟で、のんびりした大様の彼女には似合わないものに見えた。

私は、会わなくなった原のことを想つたが、宏子と別れて、彼がどんな暮らしをしているのか知るよしもなかった。

少年のころから寡黙な原は、感情を顕わさないおとなしさが周りを近づけないようでもあつた。なにかしら解らないところも感じられたが、このころは、往き来も絶えて彼の消息を知ることにはなかつた……。

宏子が、徳島でちいさなパブのような店を開業したのは、何年か経つて、彼女の年賀状で知つたのだ。

私は、ある夏の夜、帰郷のついでに、その店に立ち寄つたのである。

店は、徳島の街を流れる川のほとりにあつた。間口の狭い店の裏口には、川面の緩やかな流れに夜の明かりが煌めき映えていた。なめらかな川面の揺れに、街の明かりがたゆたつている。時刻が晚いせいか、客の絶えた店で宏子はよくしゃべつた。

——いま、よくいらつしやるお客さんが、帰つたばかりでなつ……。

宏子は、辺りを片付けながら、そういつて私を迎え入れた。

——その人は、酔いつぶれて寝てしまつてなつ、見ている

このたび、私は、原和夫と別れて、はじめてのお正月を徳島で過ごしております。暮れも押し詰まつて、こちらの病院で無事男の子を出産し、現在、実家の近くに住まいしております。原に女性がいるのを知つたのは、鏡が湖の旅から帰つて、すぐのことでした。あなたと鏡が湖のお話をした直後のことです。知らされたとき、鏡が湖の旅のなかに、おぞましい予兆をみていたような不思議な気がして、思い返したものでした。

あの湖畔の旅では、とても仕合せな昂ぶりのなかにいました。羞ずかしいことですが、私は、湖畔の朝露を踏んで悦びのなかに浸っていました。

突然の驚の影に愕きはしましたが、そんなことは意に介さず、気持ちは弾んで有頂天でした。私は、ほとんど前後もわからぬほどの昂ぶりのなかにいました。

そして、それが、なにを意味していたのか、私は知ることなりました。

あなたは、私の愚かさをお笑いでございませうね。

でも、いま、私は新たな日々にかつて、あれこれとめぐらしているところでございます。いづれ、よいお知らせができるようにしたいと存じております。

こちらにお帰りの節には、ぜひお会いいたしたく存じます。

と、ときどき表情を崩して笑つたりするんよ……。ねえ、夢でもみていたのか、気持ちわるいじゃない？ つい魔が差したように怖くなつて、わたし、声をかけてその人を揺さぶり起こしたの。

私は、屈託なく話す宏子に、邪気のない、変わらない活き活きとした日々を垣間見る思いがした。馴染んだ阿波弁で、カウンター越しには畳敷きの狭いひと間が見え、二つ折りにした座布団には人のけはいもあつた。宏子は、所を得ていかにも楽しげに働いているように見えた。

——こんなお店でも、お客さんがいらして寛いでくれるようになったんよ……。

彼女は、馴れた手つきでビールをそそいだ。カウンターに椅子がならび、ほかにはテーブルが二つだけの、十人も入れれば満員になるだろう。化粧のない宏子の、ふつくらした若やいだ雰囲気は、歳月を感じさせるようには見えなさい。私が原の近況に口をすべらせたのは、郷里にいる気安さのせいだったか、長く会わない友人の安否に、私は、つい興を覚えたのだろう。聞いてみると、

——わたしが、知ってるはずないでしょ。あなたに聞いてみたいくらいよ。

そういつて、宏子は、原の近況には、触れようとせず、別れる前後のことに想いがいくらしく、にわかに饒舌にな

った。

——過ぎたことを言っても仕方がないけれど、原に女がいると知って別れるまで、半年という歳月がかかったの。想いだすと、この六カ月は長くてつらかつけど、私なりに必要だったのかしら……。でも、原という人間は、ついに解らずじまいよ……。

宏子は、話しながら、水割りをなんどか口にした。彼女は微醺を帯びて言葉もなめらかになった。

——彼に、女の影がみえてからも、ときには、ねえっ……。なにを思ったのか、わたしを抱こうとしたりする……。そういうときの苦行というのか……。あれは男の人には、解ってはもらえんわね。できれば自分をころしても、と思ってみるけれど、女は、男の人とはちがうけん……。おなじ人に抱かれていながら……。それは、もう地獄や……。

宏子が、そういつて毒づいたとき、店の電話が、いきなり鳴った。彼女は、背後の食器棚においた受話器をとりあげ、背をみせて話しはじめた。相手は、店の常連のようで、話は長くなりそうな気がした。

まもなく受話器をおいた宏子が声をかけてきた。

——これから、来るって言う人がいるんだけれど……。

——ああ、そろ、そろ、こちらも……。

そういつて引き揚げようとした私に、宏子は新たな客をちよつと煩わしがるような眼顔をみせた。が、嫌がるどこ

ろか、彼女は、棚からグラスをとりだしたり、来客の準備をいそいそとはじめるのだ。

そんな彼女に、折を見て店をでようとすると、

——ねえ、ゆつくりしていつて……。ところで、あなたは、いまも、お独りなの……。

彼女は、いきなり、こちらの現況に踏みこんできた。

——そう……。

——どうして再婚なさらないの。

宏子の無遠慮なもの言いが、会わなかった間の、こちらの事情も人伝に知っているらしい。原の下宿に往き来したのもむかしのこと、私もすでに不惑の齢で人並みにさる女と暮らしたが、相手は早ばやと空しくなつて何年も過ぎている。思いがけぬ宏子の言葉を聞いて、私は、いっしゅん無常の風が胸をよぎつた……。

——ねえ、おさびしくないの……。

——さびしくない人なんて、いるのかなあ……。

宏子は、上目遣いにこちらを見あげた。夏の夜の暑さに薄衣の胸元はだけて、あだつぼくみえる宏子は、どこかふてぶてしい落ち着きに見えた。

宏子は、グラスを唇からはなすと、また、ひと言つぶやいた。

——そんなら、ええけどなつ、あのひとのことは、解らないわ……。

します。

聞いて、私は、愕きに撃たれた。胸奥に眠っていたものが、いちどに眼を覚ましてくるような気がした。

——いやあ、ご無沙汰しております。

私は、そういつたまま、なにを話してよいのか、とつさに言葉を失った。年賀の遣り取りも絶えて久しく、宏子の声を聞かなくなつて、どれほどの歳月が過ぎているだろう、私は、なにか特別な用だなど直感した。電話のなかで、宏子も、ながの時空の向こうに往き来しているけはいが察せられた。私は、呼吸をととのえ、冷静を装いながら、忘れていた彼女の、ねつとりした声のひびきに聞き入ろうとした。宏子が、控えめに喋りはじめた。

——原が、具合悪うて入院したので、病院へ見に行つていただけないか、というお願いでございます。たいへん不躰なことは、重々、承知いたしておりますが……。そして、どういふ容体か、お電話いただけませんかというお願いでございます。

宏子は、そう言つてひと息入れた。急を要する口ぶりのようだし、実際の絶えた原への用むきは、尋常のものではなさそうだった。

——病院がなつ、あなたさまのお住まいのお近くのよう、ついで、こんなご無理をお願いしとるんでございます。なぜ、いま、宏子が原のことを……と思わないでもない。

ある年の若葉のころの、よく晴れた日曜日であった。電話の音に目覚めた私は起き上がつて、おぼつかないけいはいで受話器をとつてみた。すると、年配の女性の落ち着いた声が聞こえた。

——突然、失礼でございます。私、徳島の伊丹宏子ともう

宏子の店を訪ねたのは、このときだけで、以来、私は彼女の消息を知らずに過ごした。

——これ……男性には、ちよつと解らんわなつ……。

——私、諦めたようにいつて黙るほかなかつた。

原は求められて応えようとすると、口ごもつたり、つと抑えたように口をつくむ癖があつた。

ある年の若葉のころの、よく晴れた日曜日であった。電話の音に目覚めた私は起き上がつて、おぼつかないけいはいで受話器をとつてみた。すると、年配の女性の落ち着いた声が聞こえた。

——突然、失礼でございます。私、徳島の伊丹宏子ともう

——それで、原の入院は、いつのことでしたか。

尋ねてみると、宏子は、原の妹から入院を聞かされたという。明け方、東京の病院から妹の許に原の緊急入院を知らせる電話がはいる、それが宏子に伝えられたらしい。電話をしようと思立ったのも、この原の妹と相談してのことだという。

妹は、郷里の実家と縁を断った原を案じて音信を絶やさなかつたのだろう。

私は、宏子の依頼で、ともかく原の入院先の病院を訪ねてみることにした。日曜日の朝の陽ざしが、病院の人氣な構内に明るく揺れていた。広場の葉桜となつた樹木の蔭を踏んで緊急対応の入口へ急いだ。

原は、緊急外来で応急処置室に運ばれ、二人の当直医の蘇生術をうけているところだつた。近寄っていくと、ベッドの傍らの心電図が、のつぺらぼうの横線を繰り返つづけている……。私は、なすすべもなく、枕元近くに佇んで看まもつた。久しぶりに眼にする原の、白髪混じる髭面、頬のこけた横顔の骨相に面影を見るもの、行きずりの見知らぬ初老のひとを覗いているようにも想われる。五十歳になつたばかりとは思えない哀類した相貌に胸を衝かれた。

付き合いが途絶えて久しい原の最期に立ち会うのかもしれないと、一瞬、なにやら由縁らしきものを覚えた。が、

を生きる縁あるもののような気がしてきた。この刻に巡り合わせて、ともに生きていこうと思えてならない、決して無縁なものではないように思われた。

そのとき、背後で声が聞こえた。振り返ると、バルコニーの扉をあけた看護婦が、陽ざしに眩しげな顔をゆがめて呼びかけた。

——ちよつと、先生がおよびです。

瞬間、私は、その意味を悟つた。が、緊急処置室へもどりながら、不思議になにも感じようとしな自分があるのに気づいていた。私は、どこかの筋書きのうえを歩いているような気がしていた。原の横たわる処置室に導かれ、救命処置のかなわなかつたことを告げられた。それから、年配の看護婦が、私を促して隣の小部屋へみちびいた。

——患者さんとは、どういうご関係でしょうか。
——友人です。

私は、小声でつぶやくように応えた。仔細を告げたいような誘惑にも駆られた。隣室の原のベッドから医師がはいってきた。看護婦が、原の身につけていた財布や持ち物類を机にならべた。表皮の擦り切れた財布があり、傍らの名刺入れに妹のものらしい徳島の住所と電話を認めた紙切れがでてきた。それらは、すでに持ち主を失つた匂いがしていた。持ち主のない遺留品ほど、そのいのちを主張しているものはない。私は、それらをじつと覗きこんでいたが、

どこかに不当な気持ちもしていた。日曜日の安らぎや平穩がかき乱されたという、思いがけない居心地の悪さもくはない。友人の早い最期に、図らずも立ち会おうとしていること、そんな巡り合わせの疎ましさ、遣る瀬ないもの憂さは、日ごろの屈託にも重なつてのしかかつてくるようだ。どこかに腹立ちのようなものが込みあげていた。そして、私は、胸奥に広がる寒々とした空しさに抗しきれずにいた。不当というより、眼の当たりにしている自分の役柄を奇妙に思つて、予想もしない再会に落ち着きをなくしていったのだろう。

私は、たまたらず、誰にともなく会釈して緊急治療室を後にした。廊下にでると、ガラス扉の向こうのバルコニーに陽が白く煌めいている。私は、そちらに歩きはじめた。予想だにしなかつた男の最期が、後ろから挑みかかつてくる。背筋に張り付いてくるものを剥ぎとりたい気持ちで病室を遠ざかろうとしたのだ。バルコニーのガラス扉を開けて、外にでるとコンクリートにはじける陽射しが眩しい。陽光は、バルコニーにあふれ跳ねて、あちこちにスズメが戯れている。病院構内の大きなケヤキ樹は、葉を茂らせて濃い影をつくっている。スズメが、光と戯れながら、バルコニーの手摺りに群れ、跳ねては、さんざめく。彼らは、瀕死の男の病室の眼の前で恍惚境を奏でながら戯れている。ふと、このスズメたちも原と同じ時間のなかの、現在

長くは眼に留めることはできなかつた。それらの持つている匂いの一つひとつが私を拒絶していた。原のすべてが、そこに籠っていたのだろう。

医師は、机上のものに眼を遣つて話しはじめた。原は、明け方、救急車で運ばれてきたとき、すでに危篤状態だつたらしい。原が、重患のうえに末期症状にもかかわらず治療もせず、通院したけはいがないと言つて、医師は不審そうに首を傾げた。

——こんなになるまで、なぜ、病院にこなかつたのですか……。

医師は、そう告げて、私の顔と机上の原の持ち物を見まわした。

——もつと早くこられたはずだけ……。

私は、かすかに頷くしかなかつた。医師は、自殺の可能性さえほめかす言い方もした。

果たして、原が、医師の言うように治療を拒む道を選んだのかどうか。あえて、彼が、そういう選択をして死期を待っていたのか、どうか……。

世間には、単なる病院嫌いの人も多い。

治療の跡もなく、最期になるまで通院しなかつた原の心事は、どういふものだったのか……。一期の近いことを知つたときの彼が、病院を忌避していたのは瞭らかなようにも思われた……。私は、壁に架かつたカレンダーの日並び

に眼をやって呆然と佇んでいた。

——どうなさいますか。このまま、ここにはいられません。

お部屋をあげていただかなければなりません。看護婦に促されて、私は自身の役割に気がついた。看護婦は、机上にならべた原の持ち物を掌で撫でるように隅に引き寄せ、紙封筒に移し入れた。隅の擦れた皮の名刺入れに財布、小銭入れと鍵類の、それらが、いやがうえにも不在の男の匂いを踵わしていた。

看護婦は、私たちもお手伝いしますから、地下の霊安室へ移動していただくか、葬儀社の手配もこちらでできますが……と催促がましく繰り返された。

病院の玄関ロビーにいくと、私は公衆電話を探した。目立たない扉の裏に隠れて電話機が静まりをみせていた。受話器をとると、徳島の宏子にむかって原の経過を伝えた。

黙って聞いていた宏子は、
——お世話になりましたわね、とんでもないお願いしてえ……。

——そういつて言葉を抑えて続けた。

——独り暮らしで病院嫌いっていうから、こちらでは困ったみたい……。それが、入院したって聞いたから、よっぽどのことだろうって、なっ……。

宏子は、そういつて原の容子を伝えて黙りこんだ。言葉

に詰まり、間をおいて、宏子は、原の妹が上京の航空便の手配を終えていると言った。

受話器をおくと、私は傍らの椅子に腰をおろした。疲れているのではないが、なにか居心地わるく減入っていく気分はとどめようもない。この数日の身の周りを想いだしても、今朝からの出来事は、意外で突出している。

通路の壁の時計は、午前十時を少し回っている。

日曜の朝だから病院受付の辺りは人気もなく、診察室への長い廊下や待合室も、明かりが消えて薄暗い。密やかに静まり、薄暗がり広がっている。窓際の床面が、陽射しに滑らかに光って薄明るい翳りがただよっている……。窓の向こうに老松の大きな幹が見え、近づいていくと、カマキリが窓ガラス下方の隅を這っている。窓下の草叢からのぼってきたのか、前肢の斧をもちあげると、ガラスの表面をすこし滑って、危うく窓の棧にとりついた。棧のうえをカマキリは、おもむろに肢を動かして、移動をはじめた。が、ついにガラス窓の下まで滑り落ちた……。草叢のうえに宙に取りついて、カマキリは、しきりに肢を動かすが、眼は、怯えているように見えた。

そのとき、遠いのか、そう遠くないのか、病院構内から距離感がかめないが、ピストルの音が、聞こえた。それと同時に、ウオーというどよめきが、押し寄せてくる。しばらくして、そう遠くないところの企業のグラウンドでの家

族ぐるみの運動会であるのに気がついた。どよめきは、遠くの波の音のように繰り返しかえし聞こえてきた。

病院の裏庭は、樹林が茂り草むらが生い茂っている。原の妹の上京を聞いて、なにかなし安堵はしたが、妙に落ち着かない……。

原は、いくら妹に勧められても通院しなかったようだ。

彼は、ずっと独り身のようにだが、宏子と別れて、どう過ごしていたのか、解るはずもない。

受話器のなかの宏子の声は、どこか落ち着いたけはいに聞こえた。私は、ともかく妹の上京だけは確かめることができた。

原は、中学時代の同級生で数少ない在京学生のひとりだから、いつとき、たがいの便宜を図ったりもした。日々を凌ぐのも、なにかと不如意をかこつ世相でもあった。

だが、彼は、どこか気を許さない頑なさをもっていた。深くは付き合いたがらない性向だったような気もするのだ……。

私は、院内をあてもなく、さまよい歩いた。原の妹の上京を、そうして待っていないながら、つとめて他事に気を紛らせようとしていた。院内を二階に上がり、さきほどのバルコニーに向かう通路に出ていく……。いつとき、胸の裡に外気を揺りいれたいような気分が萌していた。窓の外は、

眩しい陽射しが、コンクリートのバルコニーに揺れあふれている。ガラス扉を押しひらくと、スズメが、いつせいに群れてバルコニーを飛び立った。そしてまた騒ぎながら、つぎつぎにバルコニーに下りてきた。ちゅつちゅつと騒ぎたてるのが、うるさいほどであった。私は、陽射しに足を踏み入れると、大きく息を吸った。

時おり構内の裏手の樹林の向こうから、風に乗って運動会のざわめきが聞こえていた。先刻は、ここで、そのことに気がつかなかった。聞こえていたが、聞いていなかったのだらうか。私は、不思議なほどよく晴れた空を仰いで呆然と佇んでいた。

しばらくして、地下に運んだ物言わぬ原に想いが赴った。

原の最期に出会ったのは、なにかの縁につながっているのだらうか……。おそらく、原は予想だにできなかったらうが、この出会いを彼がどう想うだらうか、尋ねてみたい気もしてきた。

午後五時を過ぎて、私は、病院の玄関へ行ってみた。日暮れて広い構内が薄暗くなりだしたところ、二人の人影がこちらに歩いてくるのが見えた。

正面玄関に近づいたのは、長身の細身の青年と傍らを小走りに随いてくる小柄な女性であった。女性は、私に気が

つくと、薄暗がり走り寄ってきた。どちらからともなく、挨拶を交わしたが、なにを言ったのか覚えていない。女性は、原には似ないお喋りなひとらしく、日ごろの原への気遣いや通院を勧めていたことなどを、しきりに喋りはじめた。青年が、それをじっと聞いているようだった。宏子の息子だというのは、すぐに分かった。薄明かりの下でふりかえると、願のほそい、痩せたその青年が、

——伊丹つねひこと申します。

と名告って顔を上げた。かつての原の面影を想わせるこわばった表情を変えず、こちらをじっと見つめている。原の妹が、

——いま、こちらの大学に通つとる学生です。

と青年を振り返って言った。

宏子が、差し向けたのかもしれない。見知らぬ人たちを前に、私は、言葉もなく、連れだつて歩きだした。彼らは慌てたような固い表情のままに従ってきた。

私たちは廊下をいそいで曲がり、そろって地下の霊安室にむかうエレベーターに乗った。私たちは、ひと言も喋らなかつた。

原は、五十歳を一期に逝つたが、あの緊急入院までを彼が、どのように過ごしたのか、妹の話でも断片的なことしか聞けなかつた。

ひところ時おり彼と付き合つたとしても、どれほど、彼を知ることができたか、おぼつかないような気もする。最期を看取つた医者は、私の顔をうかがうようにして、

——この人は、なぜ、早く病院にこなかつたのでしょうか。と、怪しむけはいで私に告げたのだ。

私は、頷くだけで応えるすべもなかつた。

原の遺体は、黒いワゴン車に載せられ、病院から徳島へ向けて出発した。車は、暮れ方の薄やみのなかにテールランプを残して走り去っていった。私は、車の後部ランプを見送つて、そこにしばらく佇んでいた。ほの暗がりの構内の静まりに佇んだまま、私は、これでよかつたのだろうか、と、そんな想いに沈んでいた。朝から思いがけない数時間であつたが、終つてみると、どこかに大きな忘れ物でもしているように落ち着かない。なにか、しなくてはならないことが、ほかにあるような気がしてならないのだつた。

「季節風」108号より転載



市尾卓

いちお たかし

1930 徳島生まれ 早大文学部卒
53 6月、同人雑誌「季節風」を創刊
108号の現在まで作品を発表する
作品集「窓から歩きだした男」花村書店
短編集「月のかたち」勁草書房
「空を歩く——北の街から」武蔵野書房
「がんと闘つた七年六ヶ月」紀元社

借家の明け渡しを迫られる後、父、失脚した父との30年分の苦い再会、大金を横領し男に買ひ女、神通への小説に描かれる状況は、あまりにやりきれず感傷しなくなるほどだ。それでも一息に話させるのは、ひしひしと伝わってくるリアリティー感だ。

このほど初の小説集『雪解霽』を出版した。37歳から発表された小説約40編のうち、まずは神通さんならで



「法廷で当事者が言えなかつた思いを書きたい」と語る神通さん

言えなかつた思いをつづる

はの、法廷を通じた人間模様はの作品をまとめた。甘みは無し、冷徹なまでに客観的な描写と、確かな論理構成が光る。土台となっているのは、裁判所での41年間の通記官の経験だ。

富山市生まれ、5歳まで今の北朝鮮北部で過ごし、その後、その記憶はほとんどないが、「家はすべてを捨てて帰ってきた。物事に拘泥しない引揚げ者独特の感覚は自分にある」と語る。中学で読書習字文を愛められ、文を書くことが好きになった。18歳で最高級別冊書記官研修所に合格。夜間

神通 明美さん



じんぶん、あけみ、1944年富山生まれ、富山地裁勤務の初ら78年から小説家。89年と、まて文芸、12年『蕎麦の花』で純文学賞。秀英、「ペン」同人、富山在住。

大学で文学を学ぼうと考えたがかならず、卒業後、富山地裁に勤務を始めた。法廷では発言の言三句をタイプし打ちながら、人間の欲望や意地、油ひ込まれ罪を犯す人間の異常な思いを知った。27歳までは、自分も同じ事をしてきた。文学部に行くより文学の勉強になったと振り返る。離婚し、仕事、子育てと小説を書くこともままならない生活が続いたが、36歳の時に人生が転換する。彼れて会社から帰った夫が、崩壊中に居たのだ。小説20歳の手紙して、一

初の小説集を出版



神通さん初の小説集『神通』(アンテナ文化社刊、本体1500円)

言も残さぬ突然の死に、1カ月風葬の程に向いたまま一言もしやばらなかつた。まず書いたのは、絶望の淵からはい上がるとは打ち込めるものをと、通教育で小説を学んだ。まず書いたのは、夫を亡くした女性が町でスアオツ子を抱きつづけていた。書く時は集中し余計なことを考えないのをお勧めした。小説があつてよかった。なかつたらどんな人生を送っていたか。

以来35年、小説を書く前に年表を書き住所を具体的に設定する。「日」たるものは書かない。登場人物どちらの側にも味方しない。ハッピーエンドはいらない。が、タイトル、人物を助書も創作が「法廷 抱いた女性の罪を受け、当事者が言えなかつた思い、叫びたかったと書話。どんな書名をしても、小説に全てが生かされる。今年、銀筆文芸賞優秀賞を受賞した神通さんの小説『蕎麦の花』は、交通事故で体が自由とけい、絶望した男が、かつては思いを助書も創作が「法廷 抱いた女性の罪を受け、当事者が言えなかつた思い、叫びたかったと書話。どんな書名をしても、小説に全てが生かされる。人生は誰に勝つていながら、すべて自分にとって悪くないものだ。35年の執筆を通じて神通さんへの人生

雪解霽

きたい。と、この代は一頁きいて、

賞状も、優秀賞も貰ったが、応募は「向か間違つていないか確認する一手段」。埋してもフェスティバルの制作重労働も審査員にも努める。

季節風

東京都

早大文学部の友人が中心

ものを書くのは無償の行為

同人雑誌「季節風」は、早大文学部の友人が中心となり、卒業の翌年、昭和二十八年（一九五三）六月に創刊した。創刊号は、大平正巳、小沢正義、恩地延久（河村延久）、鈴木亮一、中里秋光、花村守隆、御舟朋夫（高井有一）、藻才修三、市尾卓の九名で、発刊した。

翌年には、岡島春枝、三原誠、茂木照夫が加わり、季刊を励行して志気も高揚していた。友人の集まりだから、当初から自由な雰囲気、その後、同人が入れ替わっても、加入の新旧を問わず、隔てのない、おたがいの遠慮のない交流は、この会の特長といえるだろう。運営はすべて平等におこなっている。毎月の会合は、実に激しい討論がかわされたものである。はじめのころ、私たちがしきりに言っていたのは、ものを書くというのは、無償の行為以外のなものでもないということである。

これまで、参加の主な人をあげると、高橋松夫、由良喬、石川邦夫、いけだみのる、岩佐利彦、三竹徹也、下林益夫、中村英雄、高瀬美代子、成清良孝、三谷博俊など、ほかに

魅力を感じなくなっているのに、しばしば戸惑うのである。作品のいのちということだが、これも時代環境や当方の感受性の変わりように問題があるのだろうか。かつての作品が、どこか魅力を失って興をよばなくなっているのは、否定のしようもない。ちかごろ、折にふれて気づくことである。時差を置かずには繰り返して読むことをしない、気ままな読者の当方に、その責めがあるのだろうか。

川端康成の「月下の門」昭和二十七年／一九五二新潮）に、つぎのような文言がある。

「永遠の文学などというものは、もう作れない時代がきたかとも疑える。私は、あまり読んでいないけれども、近ごろの翻訳される小説もそうなのではないか。書かれた時にしか、その短い時にしか生きて感じられないようなものが、今は小説の一つの傾きかとも疑える。嫌な疑いで、疑うことがすでに病弱であろう。しかし、時代の不安と分裂のせいもある。」

この「書かれた時にしか、その短い時にしか、生きて感じられないようなものが、今は、小説の一つの傾きか」という言葉が、近ごろ、かつての作品を再読していて痛切に響くのである。

一九五一年（昭和二十六年）六月創刊
（一九五二年）昭和二十七年十一月創刊

季節風

108

も今では、消息の知れない人たちもいる。最近は一、年一回発行で、昨年十二月、一〇八号を刊行したが、現在、同人は、岡島春枝、小沢正義、河村延久、鈴木亮一、花村守隆、市尾卓の六人……。半世紀以上の歳月を経て、かけがえのない同人をあいっいで鬼籍に送り、新たに加入の方があれば歓迎したいと思っている。

五十年を超える同人雑誌経験から、流通するおびただしい作品のなかには、作者の個性に親炙して懐かしく、感応の喜びに浸ったのを想いだす作品も少なくない。それが、時代や社会環境の変化とともに、近ごろ流通の作品は、著しく変質して、興味の持てない、縁のない作品がふえてきた。一方、かつて、前記のように感応の喜びを得て、相応な関心を抱いて読んだ作品が、現在、読みかえしてさほどの



「季節風」同人

季節風同人会
〒一八五・〇〇〇三
東京都国分寺市戸倉三・九・七
市尾卓肉 TEL〇四一・三三三・五四〇五

長、もしうちの油が原因ならば全財産ば投げ打ってでも被害者に補償する言うてマスコミの前で約束しましたでっしょよ」

「ええ……」

「中小企業の社長にしてはえろう肝っ玉が太かなあ思いよりましたばってん、実際はどげんですか？」

「何も」

「何も？ 治療費ぐらいは出してくれよるでっしょうもん」

「それもまだ……被害者の会の代表者が話し合っているらしいんですけど」

「治療費ぐらいはすぐ出してもらわんと困るでっしょうもん」

「そうなんです」

益恵はそう返事してから頭の中で五十万円あった預金通帳が病院通いですでにゼロになってしまったことを思い浮かべた。

「そうですね。そりゃあ……ぐらぐらこきますなあ」

タクシーの運転手はルームミラーの中で精いっぱい怒り顔を見せた。同情のつもりらしい。内心では自分の家族は免れてよかったと思っているにちがいない。益恵はそう思ってから慌てて自分の思いを否定した。このところ、自分はどうかしている、と戒めた。油症が意地汚くひねくれた感情を彼女に植え付けたのか。益恵は目を瞑り、片手で

眼窩を揉みしだきながら小さく息を吐いた。

益恵がそれらしい症状を訴え始めたのは、奇病発覚の二ヶ月ほど前の夏のことだった。彼女はその時妊娠していた。三ヶ月目だった。経理事務所に勤務する財津恵一と結婚して三年、やっと子供に恵まれた矢先のできごとだった。奇病の原因が米ぬか油に混入したPCB（ポリ塩化ビフェニール）という製油作業工程で使用されていた化学熱媒体物だと究明された時、益恵はほっと胸を撫で下ろしたものであった。原因が判れば必ず治療法も見つかる、と安易に考えていた。

ところが、近くの病院はもちろん、名医と評判のある病院をのべつ紹介されて行ったのだけれども、治療法はなかった。とうとう大病院にまで足を向けたのだが、そこでも効果のない薬をくれるばかりだった。治療に至らないばかりか、どこの病院からも治療費だけはしっかり請求された。PCBは熱を加えられることによってダイオキシン類という毒物に変化していて、それが体内に摂取され細胞内にある受容体というたんぱく質と結び付くと、どんな方法を用いても体外に排斥できず、そのことが原因で被害者の免疫低下や内分泌かく乱、発がんなどの複数の症状を与えることになるという。

夫の恵一にもやがて症状が表れ始めた。同じ食べ物を食

「どうする」

と恵一が箸を食卓の上に置きながら言った。食事も喉を通らないのは益恵も同じだった。二人の間に重苦しい空気が漂っている。何も映っていないテレビの画面から目を離れた益恵の顔が歪み、すすり泣く声に変わった。

「どうするって、もう八ヶ月よ」

涙声で恵一に向けられた。どうすることもできないことは恵一も知っているはずである。

「あの時、おろしておくべきだったな」

カネミ油症の疑いが濃厚になって大病院に検診に行った時、恵一はその時も同じことを益恵に言ったのを覚えていた。あの時は夫の無神経さに腹が立って、益恵は周囲のことも考えずに辛辣な言葉を吐き散らしたが、今考えると夫の言うことは間違っていないかかったのかもしれないと思った。しかし、あの時はとてもそういう気持ちにはなれなかった。産むことしか考えなかった。まさか子供にまで影響を及ぼすとは考えられなかったのだ。

「よくもそんなことが平気で言えるわね」

益恵の口から出てきた言葉はやはりあの時と同じように棘を含んでいた。男ってどうしてこうも無神経なんだろう。益恵の心の中を猛烈な勢いで感情の嵐が吹きすさび、体が震えた。

「もしも産まれてきた子供が黒い赤ちゃんだったらいい

べているのだからそれは当然といえば当然のことだった。せめて恵一だけでも、と思っていた益恵の願いは絶たれた。恵一は足の甲に大きなコブができた。靴が履けなくなり、コブは痛みも伴って歩行困難に陥ってしまった。夫の勤務先である経理事務所はすぐ近くにあるのだが、そこまでも歩くことができなくなった。しばらくはタクシーで通勤していたのだが、タクシー代もバカにならず、収入は落ちた。事務所の方が気の毒がって仕事を事務所の車で自宅まで運んでくれるようになったが、益恵が手伝ってやっても事務所でする時のようには捌けず、とうとう休職せざるを得なくなった。

そんなある日の夕方だった。

益恵はコタツに向き合って夫と食事をしながらテレビを観ている時、ショッキングなニュースが飛び込んだ。長崎県五島に住んでいるカネミ油症患者の妊婦から黒い赤ちゃんが産まれたというのである。赤ちゃんは死産だった。益恵も恵一も箸の動きを止めてその画面を食い入るように見つめていた。夫婦はしばらく口もきけなかった。テレビは黒い赤ちゃんとカネミ油症との因果関係を益恵も知っている油症研究班のK大学教授のコメントを添えて細かく報じている。恵一がテレビのスイッチを切った。益恵は指に挟んでいた箸をポロリと落とす。益恵の瞳は凍りついてしまったように消えた画面をまだ見続けていた。

よ地獄だぞ。五島の人は死産だったから、まあ言い方は悪いが、ホンネは不幸中の幸いだったんじゃないだろうか」

その言葉も益恵の気持ちを逆なでした。

「じゃあ、私にどうしろって言うの。死んだ子供を産めと言うの」

下腹部辺りの消化器官を逆流するような感じで熱いものが押し上げてきた。

「ばか、今更どうしろこうしろと言っくんじゃない。ただ……」

「ただ？」

「……もう仕方ない」

やはり益恵が墮胎に応じなかったことを根に持っているのだ。

長い沈黙の後、恵一はお茶を一口するとセーターを脱ぎ、畳の上に腹ばいになった。恵一の吹き出物は背中や臀部、それから精巢の周囲にまでできている。吹き出物を指で強く押すと血混じりの膿が出た。自分の手の届く範囲なら簡単につぶすことはできたが、背中にできたヤツは自分ではどうすることもできない。で、そいつを益恵につぶしてもらうために恵一はこうして腹ばいになるのだ。益恵は黙って鏡台に置いてあるちり紙に手を伸ばし、それから夫の背中の中のシャツをまくり上げた。吹き出物は無数にあった。どういうわけか背中の中の吹き出物は益恵にはできていないの

だ。その分は胎児が被ったのか。恵一の背中の一帯は梅干ほどに盛り上がっている。これまでいくつつぶしたことだろう。つぶしてもつぶしても、吹き出物は同じ場所にできた。場所を変えて出来る場合もあった。つぶすのがいいのかわかからない。親指と親指に力を込めて吹き出物を挟むようにして押すと、にゅるにゅると膿が出た。膿は微かに古くなった油のような臭いがするらしいが、益恵には何も感じなかった。もしかしたら彼女の嗅覚は狂ってしまっているのか。押し出した膿をちり紙でふき取ってまた押し出す。そのたび、恵一は痛みが走るらしく「ヒイ」とか「ウーッ」とか声を上げる。膿が出るとその部分に月面写真で見えるクレターのような穴が出来た。膿が溜まっていた時のような痛痒さはなくなるらしいが、それもその時だけ。瘡蓋ができ、その下に膿が溜まるとまた痛痒さがよみがえる。イタチごっこだ。いつだったか、恵一はカッターナイフでその吹き出物を抉り取ってくれと益恵に言ったことがある。本気だった。煩わしい気持ちは分かるが、そんなことで吹き出物が治るならそうしてやりたい。しかし、そうしていたら命がもたない。皮膚全部を切り裂くことになるではないか。もしかしたらあの時の恵一はそれでも構わないと思っただけかもしれない。益恵には恵一の気持ちは分かり過ぎるほどよく分かるのだ。夫の気持ちそのものが益恵の気持ちなんだから。

電話が鳴った。益恵は恵一から離れて受話器をとる。ノドに痰の絡んだような義母の声が聞こえた。義母はすぐ近くに住んでいる。義母たちも油症被害者だった。実を言えば義母がああ油をくれたのだった。よか油が手に入ったから、と義母はこうして電話をかけてきたのだ。義母の説明によると、米ぬかから搾り取った健康食品ということだった。義母たちは炭坑社宅に住んでいた。炭坑はもう潰れてしまっただけで現実に存在しないが、長屋の社宅だけはまだ元の姿で残っていた。すでに退去期限は切れている。社宅は取り壊してどこそこの企業に土地を売る算段にしているらしいが、従業員だった義父たちは、約束の退職金をまだ手にしていないのだから、そう易々と立ち退くわけにはいかない。もしも約束が果たせないような場合には社宅を肩代わりとして譲り受けるつもりなのだ。誰とでも分け隔てなく付き合える炭坑社宅の人たちの結束は堅く、倒産会社がいくらうまい話を持ち込んで立ち退きを迫っても、首を縦に振る者はいなかった。

そんなある日、カネミはこの炭坑社宅の集会所で料理教室を開いた。講師はもちろんカネミが依頼した料理家である。講師がカネミの油を使って調理して見せたのはいくつかでもない。天ぷらを試食させ、カネミの油がいかにおいしいかを集まった人たちに納得させ、その後、一斗缶（一八リットル）入りの米ぬか油をトラックの荷台に何缶も積み

上げてやって来ては定価の二割安で油を買わせた。おいしい、という評判が評判を生み、そして義母も余分に買ったものを益恵に分けてやったのである。まさかその食油にPCBが混入していたなど誰が知り得ただろう。いや、もしかしたらカネミの従業員の一人ぐらいは知っていたかもしれない。なぜなら、ダーク油事件が食油事件の前に発覚していたのだ。ダーク油とは食油を作る過程でできる、いわば絞り粕のこと。これが飼料会社に売られ、トウモロコシなどと配合され、この飼料を食べた鶏が西日本一帯で百五十万羽死亡している。この時に予見出来たはずなのにカネミは食油を回収するどころか、商魂たくましくこうして移動販売までやってのけたのだ。当時の農林省も厚生省も責任のなすり合いこそすれ、実態解明に乗り出そうとはしなかった。

「どげんしとるね」

義母はいつも方言だ。義母だけではなく炭坑社宅に住んでいる人たちはみんな義母と同じようにめったなことでは標準語は使わない。

「どげんもこげんもなかです」

益恵もつい方言になってしまふ。どうすることもできない状態、と益恵は言う他はなかった。お義母さんからあの油さえもらわなかったら、とは言えなかった。事実、あの油さえ口にしなかったら、貧しいながらも夢と希望にあふ

れた日々を恵一と共に暮らしていたはずである。いや、批難されるべくはカネミなのだ。益恵は慌てて思いなおした。義母も義父もそれから義妹も益恵たちと同じ被害者だった。益恵たちの人生を奪ったのはカネミなのだ。恵一がセーターを着込みながら、誰からか？と小さい声で聞いている。益恵はちよつとだけ受話器を手で塞いで、お義母さん、と応える。

「そげんたい、うちも。毎日毎日とうちゃんとお歯痒か思えばしとる。このままじゃすまされんばい。とうちゃんはその山羊ひげ社長と刺し違えてもよか言うて裏の山から竹切つてきては何本も槍ば作りよんなさるとよ。そげな物で殺せるもんかい言うても聞く耳ば持たつしやれん。もう五十本ばかり作つとんなさる。ちいっと頭もおかしゆうなつとんなさるごたる。うちらにも竹槍持たせて一揆でも起すつもりらしか」

「みんなそげん気持ちですくさ」

「うん、あんたたちにも迷惑かけてしもうて……ほんなごと、悪かつち思うとるよ」

義母もやはりあのことを気にしているのだ。

「お義母さんのせいじゃなかつた。こんなことが分かつていれば私の方から断つていますよ。悪かとはカネミですけん」

「うん、被害者の会の会長さんも言よらしたが、交渉にも出て来るのはいつも弁護士と下つ端役員ばかりで、山羊ひげ社

だ、と益恵は肩を震わせた。恵一はすぐ電話を切ったようだった。

益恵の目の前が急に暗くなり、膝から崩れ落ちてしまつたのはその直後だった。水道の蛇口は開きっぱなしだった。意識はあつた。気配を感じて恵一が慌てて台所にやって来た。

「おい、どうしたんだ？」

「お腹が痛い！」

益恵は呻きながら言った。恵一は益恵を抱きかかえるようにして居間に戻ると布団を敷き、益恵を寝かせた。陣痛にしては早過ぎる。しかし、痛みは治まるどころか間歇的に彼女を襲った。もしかしたら早産かもしれない。益恵は恵一に救急車を呼んでくれるように言った。恵一が電話をして五分も経たないうちに救急車は家のすぐ横まで来た。近くの行きつけの産婦人科に運んでもらったのだけれども、益恵が油症患者であることから簡単な応急処置の後、そこから六十キロほど離れたK大学病院に運ばれることになった。その間、益恵は付き添いの恵一の手を握り締めながら目を閉じていた。

救急車は小一時間かかってK大学病院に着いた。

病院に着くと益恵は連絡を受けて居残っていた担当医師の診察を受けた後、すぐに分娩室に入れられた。益恵は顔を歪め、歯を食い縛っていた。想像以上の痛みが益恵の下

長はいつちよん出て来んらしか。全財産は投げうってでん被害者の救済に当たるとか言うたのは何やったとかいな」

義母はそれから恵一に代つてくれるように言った。受話器を耳にした恵一はいつもだと「うん」とか「いや」とか短い言葉しか吐かないのに、この日ばかりはのっけから大声で「今更そんなことができるもんか」と怒鳴り声を上げたので、夕食の後片付けを始めた益恵は思わず食器を取り落としてしまった。

慌てて食器を拾い上げた益恵と恵一の目が合った。

恵一はこれまで見せたこともないような悲壮感を顔面に漂わせていた。益恵は直感した。義母はきつと産まれてくる子供のことを言ったのにちがいない、と。やはり五島での黒い赤ちゃんのテレビニュースを観たのだらう。益恵に言えないことを義母は息子に言つて伝言させるつもりだったのか。益恵は何食わぬ顔を繕つて台所に立つたが、恵一の言葉は彼女の胸に鋭い刃物となつて突き刺さっていた。今更そんなことができるもんか。お腹の子供を処分しろ、と言つたのにちがいない。それからこうも言つたにちがいない。五島のような子供が生きて産まれてきたら一家がこれ以上に辱めを受けるだけだ、とか、見世物になるだけだ、とか。はたまたこうも言つたかもしれない。今すぐ離婚しろ、と。まさかとは思ふけれど、もしもそうだとしたら、酷いお義母さん、まるで嫁が悪いことでもしたみたい

腹部を襲っていた。初めての経験である。すでに破水していたらしい。益恵は看護婦から後で聞かされた。自分ではよく分からなかつたが、ストレッチャーで運ばれる時、太股の辺りに生ぬるいものを感じたのがそれだった。

不安と恐怖の中で分娩台に跨り、果たして益恵の体内から取り出された胎児は一八〇〇グラムの女の未熟児で、五島の被害者から生まれた胎児と同じように黒い赤ちゃん、いわゆるコーラベビーだった。五島の被害者と違っているのは死産でなかつたことだ。益恵には「未熟児だが元気な女の子」であること以外は知らされなかつた。が、看護婦や恵一の態度や様子から益恵には大方のことは分かつていた。女としての重大な仕事を終えたという充実感などはなく、益恵の胸にあるものはといえば絶望的にどす黒く打ち沈んだ気持と疲労だった。

翌日のテレビや新聞はこのことを大きく報道した。益恵は後で知らされた。分娩直後、この大学病院で記者会見が行なわれたらしかつた。油症研究班の一員でもある主治医と一緒に恵一も同席し、治療法もない現在の苦しみ、仕事も休職中で収入が大幅に減つたことによる経済的な生活の不安、(胎児の)将来の事などについて述べたと言う。

益恵が保育器に入れられた我が子を初めて目にしたのは産まれて三日目だった。恵一は産まれてすぐに対面していたらしいが、益恵はなぜか対面するのが恐かつた。看護婦

から誘いかけても、体調不良を理由にしばらく延期させてもらっていた。母親がいつまでも産まれたばかりの我が子に對面しないというのは、たとえ保育器に入っているとしても怪訝に思われるのは当然であろう。本当は一刻も早く對面したいのになぜか気持ちに彼女をそうさせなかった。あれほど恵一から墮胎をすすめられても産むと決意したにもかかわらず、なぜだ。母親からも祝福どころか見放されて産まれてきたということを知ったら、あの子はどうなる。黒い赤ちゃんと産まれてきたことはあの子の責任ではないはずだ。あの子を守ってやれるのは誰でもない、母親のこの自分ではないか。どこからかそんな言葉が聞こえてきて益恵は自分の頬を両手で打った。

益恵はよく肥えた年増の看護婦に案内されて無菌室の前で白衣とマスクを着けて室内に入った。室内にはいくつもの保育器が置かれていた。益恵の心臓はさきほどから激しく動悸をうっていた。我が子との對面がこころも彼女を興奮させるのだろうか。息苦しささえ感じた。看護婦に教えられて立ち止まった保育器の中の小さな命の塊が目が触れた時、益恵は思わず込み上げてきた大粒の熱い雫をどうすることもできなかつた。小さな命の塊は薄く目を閉じ、両手の平をしっかりと握り締めてすやすやと眠っているように見えた。本来ならまだこうして母体になければいけないかつた。二ヶ月も早く出てきたのだ。小さな命の塊は確か

ろう。

駅には恵一が迎えに来るようになっていた。が、見当たらない。筑豊線のディーゼルカーは事故か何かで遅れているのかもしれない。あるいは本人が乗り遅れたのか。

益恵は人込み顔に顔を隠すようにして待合室に入った。見知らぬ目がじろじろと無遠慮に益恵の顔を盗み見た。いや、そうではないかもしれないが、彼女の目にはそう映った。

待合室の隅っこの空いた椅子にちよこんと腰掛けると、益恵はハンドバッグを開いて化粧鏡を取り出した。化粧をすることもなく、もう鏡は見ないつもりでいたのだが、やはり自分の顔が気になった。たくさん集まる所に行けば余計そんな気になってしまう。見れば見るほど自分の顔が醜くなるのが分かっていながらも、鏡を捨てきれないでいた。もしかしたらある日突然に元の顔に戻っているのではないか、という期待も心のどこかに潜んでいないわけでもなかつた。もちろんそんなことが起りうるはずもないということも百も承知の上で。益恵は周囲を気にしながらそつと覗く。鏡の中の自分の顔立ちは端正な部類に入りそうだが、皮膚はといえば相変わず吹き出物に被われ、浅黒く変色し、さながらガマ蛙を見るような気がした。益恵はすぐ鏡を閉じた。

母親だろう大人に手を引かれてよちよちと歩いて行く子

に赤黒い皮膚をしていた。色素の沈着でそうなったらしいが、マスクミが「黒い赤ちゃん」と騒ぐほどの大げさな色ではなかつたことに益恵はほんの少しだが安心した。

「名前はもうお考えですか？」

看護婦が益恵を振り向いてマスク越しに尋ねた。

「ええ、幸恵と決めています」

五ヶ月目に入った時だっと思ふ。行きつけの産婦人科の先生から女の子だと教えられ、恵一と決めたのだ。子供には「幸」せになつてもらいたいという願いと、恵一と益恵に共通する「恵」を取つて名前は「幸恵」にしよう、と。そのことを益恵は看護婦に説明した。

「あら、財津幸恵ちゃん、可愛い名前。ほら、幸恵ちゃん、お母さんですよ」

看護婦が保育器に呼びかけた。幸恵がこころなしか唇を動かしたような気がし、益恵は再び涙ぐんだ。

タクシーは博多駅の正面玄関に着いた。幸恵を大学病院の保育器の中に残したままなのが唯一気がかりだつた。未熟児だから仕方ないが、できれば幸恵を連れて退院したかつた。大学は幸恵を研究材料にするつもりなのだろう。五島では死産だっただけに幸恵は研究者にとってはまたとない好材料と考えているのかもしれない。もしも幸恵が未熟児でなかつたら、大学病院に残したりはしなかつただ

供が益恵の目に入った。赤い毛糸の帽子を目深に被っている。たぶん女の子であろうか。もぎたてのリンゴのような艶やかな頬つべたをしている。子供はよそ見しながら歩いている。そのよそ見していた目が益恵の目と合った。絵に描いたようにきれいに澄みきつた丸い目だ。その両目がやおらおぞましいものでも見せ付けられたように怯え、凍りついたのが益恵にも分かつた。益恵は思わず顔を伏せた。次に顔を上げた時にはもう子供の姿は見えなかつた。

待合室にいる顔も幸福に満ち溢れたように益恵の眼には映った。自分ほど不幸を背負っているような者はいないような気がしてならなかつた。いや、いるかもしれないが彼女の目にはそうとしか映らなかつた。もう口癖のようになっているが、あの油さえ口にしなかつたらきつと自分もそうだっただろう、と益恵は歯軋りする。その遺伝子を受け継いで産まれてきた幸恵のことを思うと、彼女は二重にいたたまれない気持ちになつた。あの時、益恵はなぜ墮胎を拒んでしまったのか。こういう結果が予測されないことではなかつただけにもつと冷静になるべきだった、と益恵は後悔する。病院にいる時、あの子と一緒に死のうか、と思ひ悩んだ。不幸になると分かっていたながら産むことを選んだ自分が悔やまれて仕方なかつたのだ。カネミ油症の原因が食油製造過程における熱媒体として用いられたPCBであると究明された時、すぐにも治療法が見つかるにち

がないという安易な考えが彼女のどこかにあったのは確かだ。彼女だけではなく、大方の被害者がそう思っていたにちがいない。国立大病院では国の要請を受けて油症治療研究班も編成されたことだし、これだけ科学が進歩しているのだから後は時間の問題だと高をくくっていた。

ところが、益恵らの思惑とは裏腹に治療法の研究は一向に進展しなかった。被害者はモルモットでしかなく、一縷の望みも絶たれてしまった。

あの子が大きくなって自我に目覚め、自分の体の異常を知った時、親に向かってどんな言葉を投げつけるだろうか。きつとこう抗議するにちがいない。どうして産んでくれたの、誰が産んでくれと頼んだの、と。あるいはこうも泣き喚くかもしれない。不幸な星の下に産まれたくはなかったわ、と。

益恵の周囲にいる人たちにカネミ油症事件はどう映っているのか。確かに大きな社会問題にはなっているが、それはあくまでもマスコミの世界であって、現実にはどの顔も自分たちでなくてよかったと他人事のように思っているのにちがいがなかった。もし益恵が口にしていなければ誰かがPCB入りの食油を口にしたはずである。すぐ目の前に行くウグイス色のネクタイをした紳士か、あるいは真珠のネックレスを見せびらかしてそそくさと歩く婦人だったかもしれない。若さの特権を思う存分に行使している隣の

ないのだ。産んだ子に母乳を与えられないなんて、なんと情けなく嘆かわしいことか。益恵はこの不条理を呪った。

「遅くなってごめんささい」

益恵の背後から声がした。弾かれたように益恵は胸に差し込んでいた手を引き抜いた。後ろに立っているのは恵一ではなく、義妹の美穂だった。美穂は丸い顔に屈託のない笑顔を浮かべていた。

「あら、恵一さんは？」

「それが歩けなくなったのよ」

「え！」

「足のコブが痛むらしいの」

だからお前行ってこれって兄から電話があったのだと美穂は言う。美穂も同じ被害者なのだ。首の辺りにはマフラーを二重に巻いているし、外見からは症状は見えなかった。しかし、見えない部分には益恵とおなじような症状がいくつも出ているはずだ。地元の高校を卒業してからずっと近くの本屋の店員として働いている。その日は有給で休んだということだった。

「そうだったの」

それで遅くなったわけだ。益恵は美穂に礼を述べてゆくりと椅子から立ち上がった。ポストンバッグは美穂が持った。

「義姉さん、一人で歩ける？」

アベックかもしれない。たまたま益恵たちが口にしただけのことである。誰が被害者になっても不思議ではない。

しかし、人間はどうして他人のことになると無関心でいられるのか。自分には降りかかってこないとしても信じているのか。まるで被害者を蔑視するような素振りさえ感じられた。この苦痛、この哀しみを誰にぶっつけたらいいのか。

考えれば考えるほど、益恵の心は歪んでくる。生きる権利を奪われたら人間誰しもこういう粗野な気持ちになるのだろうか。益恵は思った。水俣病やイタイイタイ病、四日市ゼンソクの被害者も自分と同じ気持ちなのだろうか、と。

益恵は目ヤニをチリ紙で拭き取った。目ヤニはべたべたと糊のような粘着力を持っている。一時間か二時間おきにそうして拭わなければ目ヤニが溜まる。ほったらかしておくと、目蓋に付着して目が開けられなくなるのだ。ついで彼女は残りのチリ紙をコートの襟元から胸に差し込んで乳首にあてがった。先ほどから乳房が張ってきて、乳首から液がこぼれているような気がしていた。案の定、肌着は濡れていた。本来なら幸恵が吸わぶりついたはずなのであった。しかし、授乳はできない。保育器に入っているという理由からではない。油症被害者の母乳にはPCBが多く含まれているのだ。だから飲ませてはならないと医者から言われている。入院中から全部捨てている。母乳の出の少ない人から見ればもったいないと思うかもしれないが、仕方

おぼつかない足取りの益恵を義妹が気遣う。

「うん、少し疲れているだけ」

そうは言ったものの、益恵は少し眩暈を感じた。

「どこか喫茶店にでも入って少し休みましょうか。一便乗遅れても構わないわよ」

美穂は益恵の背中にとっと空いた方の手を回した。

「大丈夫、美穂さんにまで心配かけて、ごめんね」

「そんなことないわよ」

美穂は幸恵のことについては何も聞かなかった。益恵を気遣ってのことだろう。あるいはテレビや新聞で報道されているので改めて聞く必要もないと思っただけにしないのか。それとも恵一が口止めしているのか。益恵にしてみれば義妹のそういう心遣いが益恵にはいじらしく思われた。しかし、いつまでも口を閉ざしているわけにもいかない。美穂はこちらから口火を切ってくれることを待っているかもしれない、と益恵は思った。

外は本降りになっただけらしく、駅へ入って来る人たちの下げた傘から雫が滴り落ちていた。

二人は筑豊線ホームの階段をゆくりと上った。

ホームに立つと周囲は薄暗くなっていて、ひどい雨に見舞われていた。

「こんな雨になるとは思わなかったわ」

美穂は傘を持って来なかったことを気にしている様子だ

った。

まもなく四輪連結のデューゼルカーが入って来た。

乗客はあまりいなかった。益恵は二人掛けの座席に着くなり、横に坐っている美穂の丸い顔に目を注いだ。濃い目の化粧で吹き出物を隠しているが、ところどころ黒ずんでいる。黒ずんだところが吹き出物の出来ている場所だ。やがて彼女も益恵と同じように顔面いっぱい吹き出物が拡がってくるのにちがいない。明るく振舞っているが、内心は相当落ち込んでいるはずだ。長年付き合ってきた恋人とも疎遠になっていられない。油症が原因であることを疑う余地はない。すでに美穂は結婚はあきらめているようだ。

「聞いたと思うけど……女の子よ」

益恵は小さく口を開いた。自分から言い出さなければ美穂はいつまでも益恵を慮って聞きたくても口をつぐんでいるにちがいがなかった。益恵が口にしたことで美穂はほっとしたように頬を緩め、「そうだってねえ」と語尾を上げて明るく応えた。「おめでとう」とは言わなかった。本来なら祝福される場面であるはずなのに。もちろん美穂のそうした態度に益恵が不快感を持ったのでは決してない。お互いにそういう気持ちになれないことはよく分かっていた。「名前はね、幸福の〈幸〉に恵一さんと私の〈恵〉をとって〈幸恵〉、と名付けることにしているのよ」

益恵は自分の手の平に漢字を書いて見せた。

真剣な眼差しで益恵を凝視した。美穂のそういう真剣な顔はこれまで見たこともなかった。益恵は一瞬言葉に詰まって無意識のうちに拳で胸を叩いていた。死、死、死……。考えたことがあるのではない。カネミ油症になってからは毎日が生と死の狭間で葛藤を繰り返して来たのだ。辛うじて死の世界へ足を踏み外さなかったに過ぎない。益恵にとって死はもう特別なことではないのだ。いつでも手の届くところにあった。

「そうね、考えたことないと言えば嘘になるわね」

益恵は思っていることの半分以上を呑み込んでいた。

「義姉さん、私、最近もう生きるのがイヤになる時があるの」

聞き返さなければならぬほど細い声だが、益恵は周囲を気にして辺りを見回した。すぐ近くに若い女性が三人ばかりいたが、三人は自分たちの話に夢中になっており、その他にも美穂と益恵の話に耳を傾けていそうな人はいなかったので安心した。それにしても、義妹までがそんなことを考えているとは意外な気がした。いや、それはちがっている。美穂が死を考えているとしても不思議ではない。他人の苦しみや哀しみ、辛さや怒りは外見では分からないことの方が多し。益恵には美穂の内面は手に取るように理解できた。それはそっくり益恵の内面なのだ。だからと言って、美穂の言葉に同情していいものかどうか、益恵は戸惑

「あ、それっていい名前」

私、幸恵ちゃんの叔母さんになるのよね、と美穂はすっかり紫色に変色した歯茎を見せて笑った。益恵も眉の辺りをいくらかひそめるようにして表情の乏しい笑顔を浮かべたが、心の中は鉛を呑み込んだように重たく沈んでいた。

しかし、それではいけないと思いついた。幸恵に対して申しわけない気持ち彼女を激しく揺さぶった。幸恵の誕生を母親の益恵までが祝福してやれないでは余りにも酷い話ではないか。幸恵は産まれながらに不幸を背負って誕生したけれども、かけがえない命であることに変わりはないはずだ。黒い赤ちゃんとして世間の目にさらされて一番憤りを感じているのは幸恵本人ではなかるうか。本人にそうした知能がない今はただ黙然と眠っているに過ぎない。世間からこの子を守って上げることができるのは自分置いて他に誰がいる！ 益恵は現実から逃れようとしている自分を激しく叱咤した。

定刻になってデューゼルカーは発車した。

「義姉さん、質問してもいいですか」

デューゼルカーが街中を抜け、車窓に田園風景が拡がり出したところで美穂が急にそんなことを言い出した。

「なあに？」

「義姉さんは死ということを考えたことがありますか」

声は細いが美穂は気が触れたのではないかと思えるほど

だった。カネミ油症と認定され、治療法もなく生きていくことにどんな意義があると言うのか。意義はなくともいい。どんな将来が待っていると言うのか。こうして苦しみもがいている間でも食べないわけにはいかない。まともに働けなくなり、収入もガタ減りしてしまった今、どうして生きていくことができるのか。多くの油症被害者はどん底に突き落とされた。国も地方も被害者の声だけは聞いてくれるけれども、具体的な話に及ぶとすると逃げたしまう。それはカネミに言いなさい、と。それはそうかもしれない。しかし、カネミは「全財産を投げうってでも補償する」から「ない袖は振れない」に変更してしまっている。これがその場しのぎの言葉遊びだとしたら、被害者を愚弄するにもほどがある。加害者であるはずのカネミは設備を新たにして以前と同じような営業活動を行なっている。では被害者はといえば「やられ損」で葬られようとしている。この矛盾を許せるか。自分らが死ぬということはそれらを許すことにならないか。「やられ損」で泣き寝入りすることにならないか。

「美穂さん、私だって生きるのがイヤになるわよ。でも、みんな必死で生きているのよ。幸恵だって何も分からないまま保育器の中で懸命に生きているのよね。私ね、今になってしつかり生きていかなければならないって気持ちになったの。死んだら負けよ。そりゃあ本人はそれでチョンだ

からいいかもしれないけれど、死んだつもりで生きること
もとっても重要な気がしてきたの。私ね、これからは幸恵
のためにも自分自身と闘っていかなければと考えているの。
生きることはカネミと闘うことにもなるのよね」

「それは分かるんだけど、そうまでして生きる必要あるの
かしら。私たちの前にあるのは絶望だけじゃないの。社会
からは疎外されているし、人生を返してくれて叫んでも
リセットできるわけでもないし、このまま苦しみ続けて生
涯を終らなければならぬのかと思うとやりきれないじゃ
ないの。治療法だってもうアテにはならないし」

「そうね、それは確かだけど……」

益恵は言葉に詰まった。美穂の言っていることは今まで
の益恵の胸に巣くっていた言葉である。幸恵の存在が少な
からず益恵の心を変えようとしている。そのことをどう説
明したら美穂に理解してもらえるだろうか。

疲れも伴って二人は無口になった。

ディーゼルカーは新飯塚駅に着いた。二人はそこで下車
し、後藤寺線に乗換え、更に田川後藤寺駅で下車、それか
ら日田彦山線下りに乗り継いだ。

列車の窓から英彦山が見えた。三月とはいえ標高
一二〇〇メートルの頂上付近は白く塗り込められている。

下界は雨でも山の上は雪らしい。

益恵は三年前の花嫁姿の自分を思い出していた。あの日

って益恵は義妹の名前を呼んだ。美穂が振り向いた。その
顔はいつもと変わりなく笑っていた。

「またね！」

叫んだ益恵の声に美穂は軽く手を振った。益恵は安心し
た。

道はところどころ泥濘ぬかるみになっている。普段なら五分で歩
けるところを十分ほどかけて自宅にたどり着いた。玄関の
表札が裏返しになっていることに益恵はすぐ気付いた。マ
スコミの訪問を嫌って恵一がそうしたのだろう。

玄関の鍵は閉じられている。

「ただいま」

返事はなかった。益恵は合鍵で開けて中に入った。居間
にしている隣の部屋からテレビのCMが聞こえた。テレビ
を点けっ放しでどこか出かけたのだろうか。そう思って部
屋に上がり込むと、テレビの音量が急に小さくなった。

「あら、いたの！」

「おお、帰ったか」

深く暗い沼の底から浮かび上がったような恵一の顔が、
少し開いている襖の隙間から覗いた。何日か見ないうちに
恵一の顔は確かに黒ずんでいた。特に耳たぶに浅黒い吹き
出物が目立つようになっていた。目がしょぼくれているの
は寝ていたからだろう。彼はコタツから上半身を起き上が
らせた。益恵はポストンバッグをその横に置き、自分もコ

も英彦山の頂上には雪がうっすらと積んでいた。恵一とは
恋愛の末に結ばれた。建設会社の事務員をしていた益恵の
ところに仕事でやって来た恵一と言葉を交わしたのが最初
の出会いであった。二人の結婚は多くの友人や親戚の人に
祝福され、新婚生活は幸福の日々だった。それが三年も経
たないうちに幸福の絶頂からどん底に引きずり下ろされる
ことになるうとは想像もしなかった。自分の責任でそうな
ったのであれば納得もできる。だが、あの油は栄養満点、
美容にいい、高血圧にもいい、皇后陛下も使っておられ
る、と義母に言わしめるほどの高品質の食用油のはずなので
あった。義母が嘘を言ったのではない。カネミの米ぬか油
を運んで来た販売員の宣伝文句は誰もが耳にしている。販
売員だって騙して購買意欲をそそったわけでもあるまい。
こんなことが日常茶飯で起るとしたら一体何を信じて食べ
たらいいのか。いや、何も信じられなくなる。

益恵と美穂は添田駅で降りた。改札口を出ると雨は止ん
でいた。かつて黒ダイヤで栄えたこの町も今は寂れてしま
っている。炭坑景気で賑わっていた頃の面影はもうどこに
もない。

益恵は美穂と駅前で別れた。美穂のお陰で鬱屈していた
気分が少しは晴れた気がした。美穂の方はどうだったか。

益恵は振り返って美穂に視線を送った。美穂は背中を見せ
たまま小さくなっていく。その背中がこころなしか気にな

タツに足を入れて坐った。

「昨日、役場に行ってきた」

恵一は幸恵の出生届けを出しに行ってくれたのだ。

「あら、ありがとう」

「そうしたら帰りには歩けんことになってしもうてな、今日

は美穂に電話して代わってもらうように頼んだんだ」

「美穂さんから聞いたわ。どう、足の痛み？」

「じっとしとれば痛みは感じないんだが、歩けば痛い」

恵一はそう言って右足を益恵の方に差し出した。足の甲
には梅千大の大きさのコブが二つに増えていた。

「マスコミが来たの？」

「ああ、あれから連日来るようになった。最初はまともに
応じていたのだが、そのうち嫌らしくなって、居留守をつ
かっている。あいつらはどうも俺たちの味方じゃないな。
正義の味方みたいな態度しているけど、興味本位でやって

来ているんだよ。幸恵が退院して来たらひっきりなしにや
って来るだろうな」

「それで玄関の鍵も閉じていたのね」

「うん。……どこかへ引越そうか」

「変わったってすぐ捜し出して来るわよ。それに、引越し
のおカネもバカにならないわよ」

「そうか……」

「お昼、まだなんですよ」

「ただだけど、食べたくない」

「でも、食べないわけにはいかないわよ。インスタントラーメン作ってあげる」

「いや、おれはいい」

こうなってしまうのはもう死んだ方がましだ、と恵一は吐き捨てるように言った。それからいつもの口癖を付け加えた。何もしてもらわなくてもいい、カネミの社長や従業員におれたちと同じPCB入りの油を食べさせたい、と。そうすればおれたちの気持ちに分かるだろう、と。それが唯一恵一の加害者に対する復讐だった。残酷な気持ちになるのは誰しも同じだった。こういう恵一にしたのは誰だ。恵一の真つ当な心まで奪ったのは誰だ。益恵はそう叫んでみたかった。そうした恵一の残忍な言葉を耳にするたびに益恵の胸は苦しくなる。いっそのこともっと多量のPCBを入れてくれていたらこんなに苦しむことはなかっただろうに。あの油を食べた瞬間、コロリと死んだ方がましだったのだ。苦しむ間もなく、怒る間もなく、悲嘆する間もなく、あつと言う叫び声だけ残してコロリと……。

だが、生きている。生きているから苦しみから逃れられない。どこまで苦しめばいいのか。これを運命と言うならこのあまりにも大きな運命の前に神や仏は役に立たないのか。

水俣の被害者は自分たちのことを生ける屍と言っていた

ラーメンを、恵一は一口すすった後、ため息をついて箸を置いた。益恵の食欲もほとんどなかった。古い沼に沈んだ朽木のようなこの生活はいつまで続くのだろうか。

義母から電話があったのはその日の夕方だった。美穂が朝から家を出たまま帰らないと言う。受話器を耳にした益恵はええーっと、素っ頓狂な声を上げていた。そんなはずはない、と。益恵は添田駅まで一緒に帰って来たのだから信じられなかった。あれからどこに行っただろう。美穂からは何も聞いていなかった。添田駅で別れる時に義妹の後姿が何となく気になって声をかけたのだったが、普段と変わった様子も感じられなかったし、まっすぐ家路に向かったものとはかき思っていた。

美穂が英彦山神社の杉林の中にうずくまっていたところを神社の人に発見されたのは翌朝だった。再び電話してきた義母の話によると、美穂は神社の人の世話で救急車の通る下の道まで長い階段を担ぎ降ろされ、近くの病院に運ばれたらしく、彼女の体はかなり衰弱してはいるものの命に別状はない、と言うことだった。義母は「英彦山神社の神さんが助けてくれたんやろう」と話しては「バカたれが」と美穂のことを言い、受話器を持つ益恵の耳に何憚ることなくさめざめと泣き喚いた。美穂は死に場所を求めて彷徨っていたのだろうか。美穂のマフラーは手の届く高さの細

けれども、自分たちにもそっくりその言葉が当てはまるような気がしてならなかった。生ける屍はここにもいる。恵一も益恵も、そしてこの世に生を受けたばかりの幸恵もそうだ。しかしこれからどうなるにしても、やはり生きていくしかない。二十七年間の益恵の生命の根源を共有するもう一人の益恵は、そう容易く死ぬことを選ばせてはくれない。それどころか、選択肢まで取り上げ、こう言うのだ。死ぬつもりで生きてみる、と。死ぬつもりなら怖いことは何もないはずだ、と。それからこうも言った。生きて怨念を晴らす気はないのか、と。

そうだ、生きて怨念を晴らさなければならぬ。晴らさなければ死ぬわけにはいかないじゃないか。化け物と言われようが何と言われようが、世間を気にするのはよそう。カネミ油症と認定されたガマさながらのイボイボだらけのこの顔を見よ、黒ずんだ皮膚を見ろ、腐食した体を見よ、黒い赤ちゃんとしてマスコミの餌食にされている我が子を見よ。人間の手によって開発された、壊れない、変化しない、酸にもアルカリにも熱にも強いという都合のよい万能の物質が、なんと人間を侵している。油症被害者はまさに近未来社会の人体実験を強いられているのではないのか。

益恵は手際よく買い置きインスタントラーメンを作ると、鍋ごと卓上に置き、取り皿を二つ並べた。もちろん一つは恵一のものである。益恵がその皿に取ってくれた味噌

い杉の枝に垂れ下がっていたらしい。

義母との電話を終えると、益恵はいつの間にかじんわりと濡れてしまった乳房を両手で押さえた。と、これまでに感じたこともないほどの力が腹の底の方から湧き上がってくるのを覚えた。益恵は思う。弱気ではいけない、と。あの子も生きている。懸命に自らの命を育んでいる。今は生きる事が大事なのだ。あの子が教えてくれたではないか。そうだ、幸恵が保育器から離れられるようになったら、義母や美穂を伴って家族ぐるみで英彦山神社にお宮参りしてみよう、と。

窓のカーテンを開くと、柔らかく慈愛に満ちた早春の陽射しが透明なガラス越しに益恵の体に降り注いだ。

（「九州文学」539号より転載）

九州文学

「文学賞」と「同人誌評」と良質の文学

福岡県

「九州文学」は、昭和十三年（一九三八年）九月に創刊され、紆余曲折を経て、二〇〇八年春、編集人・波佐間義之氏らによって、良質の文学を目指す第七期「九州文学」としてスタートし、今年で五年目を迎えた。

「文芸思潮」「全作家」「季刊文科」「三田文学」といった文芸誌や各新聞社の地方紙に「文学賞」や「同人誌評」が掲載されるのを楽しみにしている同人作家は多いと思う。

福岡県のひわきゆりこさん主催の「文芸同人誌案内」ホームページでは、各新聞社や各文芸誌の「同人誌評」が分かり易く一覧表で書かれていて楽しみに見て参考にしていく同人も多いと思う。ご尽力に感謝している。

作品自体よりも「文学賞」の「受賞作品批評」や「同人誌評」の方が面白いのは、芥川賞や直木賞の「受賞作品批評」と同じだ。

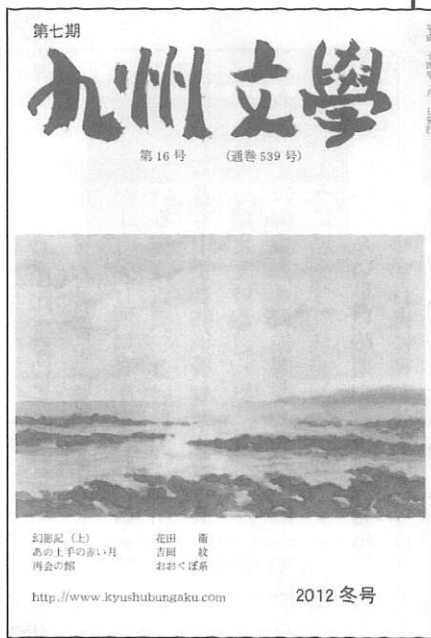
評論家の「批評」を読んで、その作品を読んでみようと思ふ時もある。

「文学賞」や「同人誌評」に一喜一憂し、それを目標に頑

張って書いている同人作家は多いと思う。「文学賞」「同人誌評」に取り上げられることは、全国の大勢の方に作品を読んで頂ける大きなチャンスでもあるからだ。

「九州文学」では、季刊文芸誌発行毎の三ヶ月に一回、合評会を開催している。

毎回三十五人前後の参加者が、福岡のホテルの会議室に全国から集合し、三時間みっちり合評するのだが、この際「文学賞」受賞者や「同人誌評」に掲載された同人の記事は、赤い線で囲んで必ず編集人が全員に配ってくれる。



波佐間義之

1942 福岡県生まれ はざま よしゆき
 73「深夜の形相」で第10回総評文学賞受賞
 同年「水上街の美学」で第12回新日本文学賞受賞
 76「ツンドラの街」で第8回新潮新人賞候補
 同年 北九州市民文化賞（文学部門）受賞
 2004「三角山で」で九州文学賞受賞
 09「どくだみ」で第3回まほろば賞優秀賞
 12「イエスの島」で銀華文学賞佳作
 著書『貌のない街の碑』（栄光出版社）『出発の周辺』（九州文学社）『鈍色の訴状』（あらし書店）
 第七期「九州文学」編集発行人



作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
 飯田章（群像新人賞）・八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・
 小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）

「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。
 あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩			小説	
1 篇	3 枚以内	3000 円	1 篇	20 枚まで 7000 円
エッセイ			50 枚まで	10000 円
1 篇	5 枚以内	4000 円	100 枚まで	15000 円
	10 枚以内	5000 円	200 枚まで	20000 円

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
 asiawave@qk9.so-net.ne.jp

当事者にとっては、大変名誉なことで自信にも繋がりが大きな励みにもなっていると思う。他の人にとってもいい刺激になり、次は自分が受賞し、紙面に掲載されたいという、前向きな気持ちになれる。

同人作家は、作品がどのように評論家に評価されているのか、とても気になるものだ。いい「批評」に出会った時はそれが他人の作品であってもほっとし、嬉しくなる。良質の文学は、ちゃんと評論家に理解されるのだと。

「文学賞」や「同人誌評」に選ばれるような良質の作品を書くことが、「九州文学」の目指しているところである。

発表の場が広がれば、受賞や批評の機会も増えるだろう。東京の文藝同人誌「文学街」主催者の森啓夫氏（前全国同人雑誌振興会会長）の呼びかけで、今年もまた九月に「文庫本（7）」（全国の同人作家競作で読者ハガキ投票の「読者賞」有り）を発行してくださることになった。「九州文学」からも九名が参加し新しい文学の流れに期待し、今から「読者賞」などの「文学賞」や批評家の「批評」を皆楽しみにしている。森啓夫氏のご尽力に大変感謝している。

一昨年の二〇一〇年十月、「九州文学」は「富士正晴全国同人雑誌賞」の「大賞」を受賞した。とても名誉なことだと思ふ。

その副賞のお陰で、昨春には「九州文学」臨時増刊号

を出すことができた。年四回の季刊誌だけでは捌ききれない程の作品が集まり、本当に助けられた。とても感謝している。

また今年も北九州市の公益財団法人芳賀教育・文化振興会の教育・文化助成金を「九州文学」は前年に引き続き受賞し同人誌発行の為に役立たせて頂いている。光栄なことだ。

「九州文学」を一冊でも多く売ろうと地域の各有名本屋さんには、努力して下さっている。各新聞社や各文芸誌で「九州文学」が度々取り上げられたお陰で、本の売れ行きは順調だ。今年七月一日に発行した第十八号夏号（通巻五四一号）は、現在各有名書店に並べさせて頂いているが、バックナンバーも発行所に在庫があれば購入できる。皆様に感謝している。

会員数は、若者も中年も熟年層も、入会希望者が絶えず、既に百人を超えている。

これもひとえに編集人・波佐間義之氏の作家の才能を見抜く力にあるように思う。

誰も気付かないくらい早い時期から才能を見出し、同人作家の何一つも否定せず自由に書かせている。目利きの編集人がいることが、「九州文学」の強みであり、良い同人誌の第一条件だと思う。新人発掘は重要事項だ。編集人は編集するだけでなく、毎回のようには作品を発表

し、全国規模の「文学賞」にも応募し果敢に挑戦している。そんな編集人の背中を見て同人たちは尊敬し、「文学賞」へと努力し、何をアドバイスされても素直に受け入れ、どんな力がついてくるのだと思う。編集人の陰の無私の貢献に支えられて、編集委員以下同人一同、編集人を支えようとしている。こうして第七期「九州文学」は、復活を果たし、発展を続けているのだと思う。「九州文学」は、情報化の波に乗ろうと、昨年十月一日に「九州文学ホームページ」を立ち上げた。「九州文学」の目次や同人作家の出版本を掲載し、ゲストブックへの読者の書き込みで、感想も聞けるようになった。

インターネットの影響は予想外に大きく、ホームページ上で紹介された本は、すぐに本屋さんや図書館や編集発行所に問い合わせがあり話題になる。情報伝達の速さに驚いている。既に延べ一万三千人以上のアクセスがあり、文学の世界もインターネットなしでは考えられない時代なのだ。



風景評合

と肌で感じている。

同人誌を取り巻く文学関係者や地域や個人の地道な努力が実を結んで、いつの日か全国に五百誌以上ある同人誌から、常に芥川賞や直木賞が出る時代が来て、お世話になった文学関係者や地域のみなさまにご恩返しが出来たらとても嬉しい。

福岡県の火野葦平氏、岩下俊作氏、劉寒吉氏、長谷健氏、原田種夫氏らによつて築きあげられた七十四年の輝かしい歴史と伝統のある「九州文学」の灯を消さないように良質の文学を目指して努力している。

（阿賀佐圭子「九州文学」編集委員）

九州文学

〒809・0028
福岡県中間市弥生一丁目一〇・二五波佐間方
TEL&FAX 093・244・8501